第 66 回日米学生会議　日本側報告書

66th Japan-America Student Conference Bulletin

文化の交差から創る道

～学生が受け継ぐ 80 年の平和への歩み～

Communicate and Connect:

Pursuing Peace at the Crossroads of Culture

第66回日米学生会議　日本側報告書

目次

第 1 章　日米学生会議とは……3
実行委員長挨拶……4
日米学生会議の歴史……5
第 2 章　第 66 回会議概要……7
本会議における主な活動……8
代表団名簿……11
第 3 章　事前活動……13
第 65 回報告会……14
選考試験……14
春合宿……14
防衛大学校研修……16
秋田研修……17
直前合宿……21
第 4 章　本会議・サイト活動……22
デモイン……23
サンフランシスコ……27
ニューヨーク……37
ワシントン D.C.……38
第 5 章　分科会活動……43
芸術とアイデンティティ……44
環境問題における国家、企業、市民の役割……55
移民の功罪と展望……64
現代における歴史教育とその社会的影響……75
正義と道徳……84
日米関係におけるスマートパワー……92
技術進歩と社会……103
第 6 章　日本側代表団の声……113
第 7 章　第 67 回会議概要……137
第 8 章　ご協力いただいた方々……141
第 9 章　パブリシティ……149

第1章

日米学生会議とは

実行委員長挨拶

8月12日の深夜、寒風吹きすさぶサンフランシスコ。私たち16名の実行委員は宿泊地であるカリフォルニア大学バークレー校フリーボーン寮のロビーに集い、円をなして座っていた。空気は張りつめ、とても重い。その日の午後は分科会ごとの自由行動であったが、実行委員同士の連携ミスや参加者の遅刻が目立ち、危うく口論になりかけたほどであった。第66回日米学生会議も折り返し地点を迎え、疲労とストレスが積み重なってチームにほころびが生じはじめていた。それを敏感に察知した米側委員長Annaが全員で思いを共有しあうことを提案し、今、臨時のミーティングが開かれているのである。一人が他の委員の怠惰に対して苛立ちを露わにすると、ある者は運営担当としての重圧に耐えきれず涙を流し、またある者は自分の役割の至らなさに負い目を感じていると告白した。各々の感情が堰を切ったように溢れ出し、ぶつかりあった。傍目には、それは負の感情が渦巻く破壊的な時間のようにも映るであろう。しかし私たちは皆、reflectionと呼ばれるこの時間こそが、チームとして苦難を乗り越え、前進するために必要不可欠で、むしろ創造的な営みであることを知っていた。全員が話し終えると、誰からともなく抱擁を交わしあった。間もなく任を終えるサンフランシスコのコーディネーターを皆でねぎらい、先ほどまで涙を流していた者は持ち前のジョークで笑いを誘った。空気はじわじわと暖かみを取り戻し、翌朝のミーティングには、疲れてはいるが晴れやかな16名の顔があった。それぞれに異なった感じ方や考え方を、正直に伝えて理解し合うことで、改めて絆を強くした瞬間であったと思う。

人は皆、自分だけの感性をもっている。勝負に敗れたときの砂を噛むような悔しさ、社会の不条理に対する憤り、信じがたい振る舞いをする他者への拒絶、仲間とともに大きなプロジェクトをやり遂げた達成感。そうしたものは、時に社会では私情と呼ばれ、あるいは個人的見解と呼ばれ、表に出さないことが要請される。確かに円滑なコミュニケーションのためにはそうした自制が必要かもしれない。しかし、心の奥底の、叫ばなければやりきれない思いを相手に伝え、そして相手からも思いを聞くこと、それにより生まれる相互理解を私たちは本能的に欲しているはずである。正直でいることは、心地よいものであり、大きな力を持っている。自分という個性のままに、仲間と一緒に笑い合い、泣き合うことが、どれほど強い絆を生むことか。

もちろん、世界はもっと複雑である。日米関係は、1945年の占領以来、憲法改正や沖縄の基地問題など、パートナーシップやトモダチといった美辞麗句だけでは語れない難しさをはらみ続けており、政府はそうした過去からの制約を免れ得ない。また東南アジア経済の急成長やアフリカ地域での疫病の蔓延などの動向に、企業間の取引は影響を受ける。

今、社会がそんな状況にあるからこそ、特定の権威や利害にとらわれない学生が、真っすぐに意見をぶつけ合わなければならない。そうすることではじめて何十年も続く真の友情が結ばれるであろう。

本書は、そんな思いを胸に一夏を過ごした学生たちの記録である。71名の学生が何を語り、何を考え、何を得たのか。この一冊が代表団にとって、あの嵐のような日々を永遠に心に刻み、その経験と成果を世界へと発信し、そして平和へのささやかな一歩を踏み出す礎となることを願ってやまない。

平成26年10月　歴史の積もったプレハブ事務所にて　第66回日米学生会議実行委員長　小松崎遥平

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934 年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力に限界を感じた学生らは、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生教会（日本国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4 名の学生使節団が渡米して全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢 99 名（うち 22 名は大学教授、およびその夫人など）の米国側代表を伴って帰国した。こうして第 1 回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第 2 回日米学生会議が米国オレゴン州のリードカレッジで開催され、以降、第 3 回（1936 年）早稲田大学、第 4 回（1937 年）スタンフォード大学、第 5 回（1938 年）慶應義塾大学、第 6 回（1939 年）南カリフォルニア大学、第 7 回（1940 年）津田塾大学と、日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は 1947 年に再開し、第 8 回を迎えることとなった。当時日本は占領下にあり、米国から学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であった。1953 年の第 14 回会議まで日本で開催され、翌 1954 年、第 14 回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第 15 回会議が戦後初めて米国の同大学で開催されることが決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15 名のみの日本側参加者が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「両国間関係のみならず、多国間で学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、1954 年、アジア地域の学生との会議を主目的に、第 1 回国際学生会議が開催された。なお、国際学生会議は、世界各国から学生を招集する形で現在も継続されている。一方の日米学生会議はこの決定により、1954 年をもって再び中断された。

1963 年に至り、翌 1964 年が会議創立 30 周年でもあり日米双方で、会議再開を望む声が高まった。これを受け、会議創始者である板橋並治らが理事を務めていた財団法人国際教育振興会が、日本側主催者を担う形で会議を再開することが決定された。第 1 回、2 回の米国側参加者の努力もあり、1964 年、日本側参 77 名と米国側 62 名により第 16 回会議がリードカレッジで開催された。この年は東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下会議は継続されるが、1973 年の第 25 回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、限られた日程の中で議論をより効率的かつ集中的に行うべく、毎年の会

議ごとにテーマを設定する、期間を 1 ヵ月間とするなど、現在の会議の基本形態が整備された。この年は円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した年でもあった。1978 年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の経済的支援を主目的とする国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開かれた。また第 31 回会議が開催された 1979 年には、戦前の米国側参加者により JASC, Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会と JASC, Inc.を主催者として、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態をとる中で、継続されることとなる。そして 2007 年度にアメリカ側主催団体である JASC, Inc.は International Student Conferences, Inc と名称を変え、米韓学生会議も開催している。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

本文中の略語

JASC（ジャスク）	：日米学生会議（Japan-America Student Conference）。
JASCer（ジャスカー）	：日米学生会議の現役および過去の代表学生。
IEC	：日本側主催団体である International Education Center（国際教育振興会）
ISC	：アメリカ側主催団体である International Student Conferences。
EC	：Executive Committee（実行委員会、または実行委員）。
AEC	：American Executive Committee（米国側実行委員会）。
JEC	：Japanese Executive Committee（日本側実行委員会）。
デリ、デリゲート	：Delegate（日米学生会議代表学生）。
ジャパデリ	：日本側代表団代表学生。
アメデリ	：アメリカ側代表団代表学生。
アラムナイ	：日米学生会議の過去の代表学生。
サイト	：本会議開催地。
RT	：Round Table（分科会）。
リフレクション	：代表団が腹を割って会議の感想や反省点を話し合う場。

第 2 章

第 66 回会議概要

第 66 回日米学生会議概要

文化の交差から創る道　～学生が受け継ぐ 80 年の平和への歩み～

Communicate and Connect: Pursuing Peace at the Crossroads of Culture

日米学生会議は、新たな発見に満ちた一夏である。

そこでは官僚のように、精緻なデータ分析や実現可能な政策提言をすることは難しい。メーカーのように、目に見える形で製品を提供するわけでもない。社会に出て仕事をしたことがない学生が、国際問題を議論する様子を見て、人々は冷めた声で言うかもしれない。学生ができることなどたかが知れている、と。

80 年前の学生も同じことを言われた。満州事変以降急速に悪化していく日米関係の渦中にあって、何の後ろ盾もお墨付きもなく、ただ平和を希求する 4 名の日本人学生が太平洋を渡り、アメリカ人学生や教授を説得する――。誰の目にも無謀な挑戦に映ったに違いない。しかし彼らの熱意と勇気ある訴えは、国籍も政情も関係なく、やがてアメリカ人の心に届いた。そして遂に、第 1 回日米学生会議は開かれた。今日まで続く伝統ある学生交流プログラムの船出である。彼らは学生だからこそバイタリティに溢れ、自らも世界平和の一翼を担うべきであるという強烈な当事者意識を抱いていた。

今日、世界地図を広げれば、そこには幾多の問題が浮かび上がってくる。北朝鮮がミサイル打ち上げを繰り返し、中国が経済を急成長させ、軍備を拡大させる一方、アメリカは世界の警察としての存在感を薄めつつあり、日本を取り巻く安全保障環境は刻々と変化している。異常気象が続く中、先進国と途上国との間では、温室効果ガス排出量削減をめぐり思惑が交錯する。歴史は過去の出来事であるが、それをどのように評価するかは、しばしば国家間の政治的争点となり、原爆投下、靖国参拝、従軍慰安婦をめぐる議論は、そうした歴史認識問題の最たる例である。2011 年の大震災による福島原子力発電所の事故では、科学の絶対神話が崩れ、その限界と危険性が浮き彫りになった。移民や外国人労働者の受け入れは、労働力需給ギャップを徐々に解消していく一方で、治安の悪化や地域社会との軋轢を招くと懸念されている。世界の人々を魅了した宮崎駿作品に日本人の自然観や宗教観が通底しているように、絵画や音楽、建築などの芸術には、表現者の思想や感性など、その背後にある文化的アイデンティティが投影されている。2001 年の同時多発テロの映像に映し出されたあの飛行機とビルは、衝突しあう正義の象徴であった。私たちは現代社会のこうした課題に自らその当事者として向き合い、自分が取るべき行動を考え、実行し

ていく必要がある。それこそが 80 年前の学生が志したことであり、今日にも通ずる日米学生会議に課せられた使命ではないか。

「文化の交差から創る道」。参加する学生たちの人格、思考、習慣といった文化が、日米学生会議という場で交差する。そこでは絶え間なく議論をする中で、絶え間なく衝突と理解を繰り返す。「学生が受け継ぐ 80 年の平和への歩み」。積み重なる衝突と理解の先に創られていく道は、平和への道である。たしかに今回の会議に参加するだけでは日米を、太平洋を、世界を変えることはできないかもしれない。しかし、人ひとりの人生をも変えてしまうような経験に恵まれる参加者がそれぞれの道を歩み続け、やがて日本と世界の発展に寄与してくことで、究極的には世界平和の構築に貢献する。私たちは、それこそが日米学生会議の本質であると考えている。参加者は日米学生会議の主役であり、世界中で起こる様々な問題の当事者でもある。そのめまぐるしい一夏は、自分の中に、世界の中に、きっと新たな発見をもたらすであろう。

【主催】

一般財団法人国際教育振興会

【企画・運営】

第 66 回日米学生会議実行委員会

【会議開催期間】

2014 年 8 月 2 日～2014 年 8 月 25 日

【事業実施期間】

2014 年 4 月 1 日～2015 年 3 月 31 日

【開催地】

デモイン、サンフランシスコ

ニューヨーク、ワシントン D.C.

■本会議における主な活動

分科会（Round Table, RT）

本会議の活動の中心となる分科会は 7 つ設けられており、日米各 5 名の学生が 1 つの分科会を構成し議論を重ねることとなる。本会分科会は本議中だけでなく事前活動においても、参加者が共同生活するための「チーム」としても機能している。

（1）Art and Identity
芸術とアイデンティティ

（2）Environmental Initiatives for a Sustainable Future
環境問題における国家、企業、市民の役割

（3）Immigration in the Modern Era
移民の功罪と展望

(4) Modern Consequences of Historical Education
現代における歴史教育とその社会的影響

（5）Morality and Justice
正義と道徳

（6）Smart Power in US-Japan Relations
日米関係におけるスマートパワー

（7）Technological Advancement and Society
技術進歩と社会

Field Trip

分科会の議題や開催地についての理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO や研究所などへ訪問研修を実施する。議論の対象となっている現場や現状を知ることができる貴重な機会であり、議論に必要な多様かつ具体的視点を得るために重要な活動となる。

Forum

各開催地でサイトテーマや日米両国に深く関わるトピックについて一般公開のフォーラムを開催し、第一線で活躍する専門家、有識者の講演や現地学生を交えたパネルディスカッションを行い、その地域特有の事情や新たな視点も得て参加者は開催地についての理解と関心を深め新たな問題意識や課題解決に向けて参画意識を涵養する

Special Topic Discussion

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、議論をすること目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見能力や議題設定能力を養うばかりではなく、参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

Final Forum

最終開催地におけるファイナルフォーラムでは、3 週間の総括を行う。現代社会が抱えるさまざまな問題と提起した 7 つの分科会における議論の概容と活動内容を発表することにより、第 66 回日米学生会議の成果として社会に発信する。

Reflection

参加者が一同に集い、3 週間の共同生活や、価値観や思考様式の違いから生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことで、参加者間の相互理解一助となることを期待している。また、他者の思いを理解することにより会議の充実や運営の円滑化など会議の成功に向けて努力する姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

日本側代表団

日本側実行委員	大学	学部・専攻	学年	RT
小松崎　遥平	慶應義塾大学	法学部法律学科	4	
木村　優吾	早稲田大学	政治経済学部国際政治経済学科	3	技術
大西　由起	同志社大学大学院	総合政策科学研究科	院 1	SP
大沼　雄貴	早稲田大学大学院	アジア太平洋研究科	院 1	歴史
兼子　莉李那	上智大学	国際教養学部国際教養学科	4	環境
古村　大和	国際教養大学	国際教養学部	2	正義
鈴木　健司	立命館大学	法学部法学科	4	移民
関口　響	法政大学	経営学部経営戦略学科	3	芸術

日本側代表学生	大学	学部・専攻	学年	RT
朝倉　咲希	早稲田大学	政治経済学部国際政治経済学科	3	環境
池田　耕一	早稲田大学	政治経済学部経済学科	3	環境
板倉　美聡	大阪大学	法学部国際公共政策学科	3	歴史
上島　万波	富山大学	医学部医学科	4	正義
岡崎　栞	慶應義塾大学	法学部政治学科	2	技術
奥谷　紘子	京都大学	法学部	1	正義
北原　吉泰	関西大学	商学部商学科	4	技術
小林　勇貴	京都大学大学院	発生・再生科学総合研究センター	院 1	技術
小宮山　宗	立命館大学	法学部法学科	4	歴史
近藤　直佑	慶應義塾大学	法学部政治学科	2	SP
澤　隼	早稲田大学	国際教養学部国際教養学科	2	SP
鈴木　良祐	明治大学	商学部商学科	4	芸術
竹内　瑞希	慶應義塾大学	法学部法律学科	2	移民
竹中　智	創価大学	経済学部	4	正義
辻村　志帆	早稲田大学	文化構想学部文化構想学科	2	歴史
永澤　拓也	千葉大学	園芸学部食料資源経済学科	4	環境
野間　雄大	獨協大学	外国語学部英語学科	2	正義
原田　有理子	九州大学	歯学部歯学科	4	移民
東影　喜子	早稲田大学	文化構想学部文化構想学科	2	芸術
藤井　一衆	青山学院大学	法学部法学科	4	SP
松居　純平	青山学院大学	法学部法学科	4	移民
松井　友紀	東海大学	医学部医学科	2	技術
光本　愛理	慶應義塾大学	法学部法律学科	2	芸術
村井　咲絵	国際基督教大学	教養学部アーツ•サイエンス学科	1	SP
森　鞠乃	学習院大学	法学部政治学科	2	芸術
矢島　ショーン	東京大学	教養学部文科二類	2	歴史
モンタニョミチェル　ルイス	京都大学	総合人間学部国際文明学系	4	移民

66th Japan-America Student Conference American Delegation

Executive Committee	University / College	Major	Grade	RT
Anna Zeng	Johns Hopkins University	Public Health Studies	2	
Pramodh Ganapathy	Duke University	Evolutionary Anthropology	4	MC
Sarah Choi	Haverford College	Biology	3	AI
Sharon Lu	University of Wisconsin, Madison	Biology, Neurobiology Option	4	TA
Norhito Naka	Tufts University	Electrical Engineering	2	SP
Quyen Nguyen	Smith College	Psychology	2	EI
Ken Panis	Villinova University	Finance	2	MJ
Ayaka Yoshida	Northwestern University	Clarinet Performance	2	IM

Executive Committee	University / College	Major	Grade	RT
Amelia Loew	Macalester College	International Studies	2	MC
Anna Miyajima	Duke University	Computer Science; Public Policy	1	EI
Ashley Davis-Reed	Haverford College	East Asian Studies	3	IM
Beatrice Visconti	University of Tampa	History	3	IM
Benjamin Sussman	Earlham College	Japanese Studies	4	AI
Christina Cheadle	Washington and Lee University	Art History	2	AI
Eliora Yokanan	College of St Benedict	Asian Studies	2	MJ
Eve Gillison	Haverford College	English	2	SP
Hannah Jun	Smith College	Government	2	SP
Isaac Min	University of Southern California	International Relations	3	SP
Jason Kim	Franklin & Marshall College	Undecided	1	AI
Jessica Shindo	Stanford University	East Asian Studies	M2	TA
John Harrison Bade	Villinova University	Communications	2	TA
Kasumi Kanetaka	University of California, Davis	Aerospace and Science Engineering	1	MJ
Ken Covey	University of Hawaii at Manoa	International Business and Finance	3	EI
Konoka Shiino	University of California, Berkeley	International Development Studies	3	TA
Man Yin (Vanessa) Cheuk	University of California, Berkeley	Political Science	3	MJ
Masaki Yamashita	Central Christian college of Kansas	General Studies	4	EI
Minh Hoang	Haverford College	Chemistry	3	TA
Naomi Cormier	Wellesley College	East Asian Studies	2	AI
Qinwen Jiang	University of Wisconsin, Madison	Economics	2	EI
Risa (Lisa) Kanai	DePauw University	Psychology	1	MC
Sakura Takahashi	Duke University	Psychology	1	IM
Sungwoo Park	Johns Hopkins University	International Studies	1	MC
Takuo Koyama	Whittier College	Business	3	IM
Yang Liu	Duke University	Mechanical Engineering	1	MC
Yogeeta Chatoredussy	Williams College	Economics	3	MJ
Takeshi Hikada	Carleton College	Cinema and Media Studies	2	SP

第3章
事前活動

第 66 回日米学生会議　事前活動

■第 65 回報告会

日時：2013 年 12 月 14 日（土）

場所：青山学院大学（青山キャンパス）

第 66 回会議実行委員会が発足して約 3 ヵ月、第 65 回日米学生会議報告会を開催した。まず、第 65 回会議報告では多くの写真やムービーを通して当会議のアカデミックな側面だけでなく、異文化交流、共同生活について紹介することができた。続いて第 18 回日米学生会議日本側議長である山田勝氏に基調講演を頂いた。日米学生会議でのご自身の体験が海外に興味を持つきっかけとなり、留学ジャーナルを創業するまでに至る経緯をお話頂いた。続くパネルディスカッションは、紙面やホームページには載らない本会議における個人的な衝突、葛藤や成果を聞くことができ、来場の学生から好評であった。最後に第 66 回会議概要について初めて公式発表した。説明会終了後のご来場の方々との交流の時間では、第 66 回日米学生会議への関心の声を数多く聞くことができた。

■選考試験

日時：1 月 11 日～2 月 21 日（第一次募集）、3 月 6 日～7 日（第二次京都選考）、3 月 16 日～19 日（第二次東京選考）

場所：同志社大学（今出川キャンパス）、日米会話学院

1 月 11 日より Web ページでの一次小論文の受付を開始し、一次小論文の結果、2 次面接に進んだ応募学生に対し、グループディスカッション、個人面接、教養試験を課した。

■春合宿

日時：5 月 3 日（土）～5 月 5 日（月）

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

4 月の選考委員会により最終決定した 28 名の参加者と 8 名の実行委員が、春合宿にて初めて顔をあわせた。本合宿において参加者は日米学生会議の歴史を学び、英語での議論、安全保障の講義、分科会活動などの「日米学生会議の基礎」を学び、8 月の本会議に向けての最初の一歩を踏み出す機会となった。

アラムナイとの懇談会

日米関係と平和のレクチャー感想

日本の外交政策が長い間、日米間の安全保障条約を軸に発展してきたことから、日米関係の基礎知識を確認することは、JASC の一員として活動するときの指針となるだけでなく、日本人が他国の人と交流する際、また国際社会の中での日本の在り方を模索する際に必ず重要になると思う。特に、法学部所属と言ってもまだ上辺の学説しか触れていない私にとって、憲法の理念や国際条約との比較の話は大いに勉強になった。また、それに対する法

学部でない人の反応や活発な意見も見られて非常に興味深かった。（竹内瑞希）

Special Topic Discussion 感想

米軍が日本に駐留することの米国にとってのメリットとは何かと問うと、アメリカ人の彼は嫌な顔一つせず丁寧に考えを述べてくれた。これこそ学生ならではの利益・立場を抜きにした会話であり、私の思うJASCの魅了である。非常に印象的なDiscussionとなった。（朝倉咲希）

普段ディスカッションは、比較的重い話題を取り上げることが多かったので、カジュアルなディスカッションが設けられていたことは良かったと思います。でもそこから派生して、これは歴史に関わってくるとか、これはテクノロジーに関わってくるとか、発展させていけたことも面白かったです。（村井咲絵）

春合宿感想

参加者と実行委員会の方を含めて、36人もいるので到底、名前と顔を一致させるのは難しいのではないかと不安だったが、アイスブレイクなどによりかなり早く様々な人と知り合えた。そして、何よりも、JASCが始まったんだなぁと実感できる合宿だったので、とてもよかった。特に、OBOGの方にお会いし、直接お話しを伺うことで、長く続くJASCの歴史を肌で感じることができた。縦のつながりと横のつながりを両方強く感じることができ、これから、同期と協力して最高のJASCを作り上げ、先輩とのネットワークも活かして更に色々なことにチャレンジしていきたいと思った。（光本愛理）

春合宿の一番の意義は、「私は英語できないもん。」という一種の割り切りが、なんでできないんだろうという悔しさに変わったことである。日本語だったら、ディスカッションもプレゼンもファシリも負けないのに、英語になった瞬間自分は何も出来なくて、とても悔しかった。「悔しい」を通り越してむしろ腹が立った。（板倉美聡）

春合宿を終えての意気込み

この活動は可能性に満ちている。個人的には何よりも、優秀な学生たちとの出会いと切磋琢磨に期待をしている。まだ個々人の全容は明らかでこそ、自分の弱点もよく見える。周りには参考になる強者たちがいるので、自分の弱点を克服するのにも最善の場である。以上のように、JASCではないが、明らかに私の所属大学では決して出会うことの出来ないような人たちが集まっている。そして良いことに彼らと対等な立場でやり合うことができる。こんな機会はまたとない。ぜひ参加者の一人一人からすごいところを盗み取りたい。更に、全体を通して自分の弱点を改善する機会になるのではないかと感じている。RTでの話し合いの持ち方や、英語力、プレゼン技術など、本気でやる活動だから出会うすごい仲間たちとの切磋琢磨を通して、自分自身を高めていきたいと思う。（小宮山宗）

恥ずかしいことに、まだ十分にJASCのことを理解しているわけではありません。むしろ知らないことだらけかもしれません。それで

もJASCの意義、また多くの人がバトンをつないできた、その熱い思いに触れることはできました。そして一層JASCに貢献したいという想いを強くしました。一つ思い悩む点があるとすれば、こうした素晴らしい活動をどのように故郷の未来に生かすことができるだろうか、ということです。JASCに参加したら素晴らしい仲間がいる。コネクションもできる。けれどそれをJASCの外に還元していきたいと思った瞬間に、何かこう、阻むものがある。うまく言えないのですが、そんな気がしています。個人的な課題として今後考えていきたいと思います。（東影喜子）

「If there's a wall in front of you, Think differently, not harder. If there's a road in front of you, you can bend it, but don't break it」これが今の私が考えているJASC及び分科会を成功させるための理念だと思っています。私は春合宿の分科会で最初は単純にスマートパワーを軍や経済、文化などと考え、自分のこれまで学習してきた知識を「Output」しながら、進めればいいやと思っていた節が少なからずありました。しかし、合宿の最後で行なった各分科会のプレゼンテーションを見て、自分の考えが間違っていたのかもしれないと気付かされました。これまで、SPRTでは安全保障や国際関係のみに焦点を当てていましたが、ハード・パワーやソフト・パワーは必ずしも経済や軍事に依存する訳ではありません。芸術や技術、環境、移民、正義という概念などもいずれかのパワーとして利用することが可能なのです。そして、その考えを取り入れるためにも他の分科会との連携の重要性に気付かされたのです。そこで私はJASCを「Smart Conference」にしていきたいと思いました。①自分の分科会内で1つの分野を徹底的に追究していく「Well Down Discussion（井戸型）」と②幅広い分野の知識や客観的な意見・疑問を取り入れていく「Horizon Discussion（地平線型）」を平行して行なうことで縦横に充実した新しい形態の会議です。（藤井一衆）

アイスブレイク

■防衛衛大学校研修

日時：6月7日（金）

場所：防衛大学校

日米学生会議では毎年、日米関係を考える上で重要な「安全保障」に関する知見を深めるため、防衛大学校を訪問し、教授より特別講義を頂くと同時に、同世代の防衛大学校生との対話と交流の場を設けている。本年度は、加藤准教授によるサイバー攻撃に関する講義と大井二等海佐による日米同盟に関する講義に加え、施設見学、そして各分科会によるディスカッションが行われた。

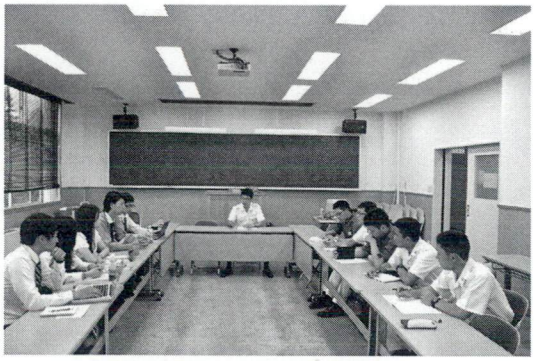
防衛大学研修参加者感想

とても有意義なものだったと思う。天候に

は恵まれなかったが、多くのことを学ぶことができた。特に普段は謎に包まれている自衛隊幹部候補生たちの本音が聞けたことは、すごく貴重であったと思うし、同時に私たち国民はエモーショナルになりすぎているなとも感じた。自衛隊の人々は「覚悟」をしている。それについて私たちがとやかくいうのは、彼らの覚悟を軽視する行為かもしれないと感じた。彼らの規律のとれた行動、華麗な銃捌きを見ていると、本当にかっこいい、遠い存在に思えてくる。しかし、実際に話してみれば、それこそ男子校であった高校時代に戻ったような感覚で、とても楽しかった。だからこそ、彼らに戦地に行ってほしくないという気持ちも、とても強くなった。（池田耕一）

今回防衛大研修に参加して一番感じたことは、防衛大生は学生という変わらない立場で日々の生活を過ごしていたことである。確かに、軍事訓練や厳しい規則など他の大学にはないユニークな点はあるが、学生自身は一般の大学に通う学生と変わらない考えをもっていたことを理解し親近感がわいた。特に防衛大生とのディスカッションでは芸術の定義について議論を深めた一方で、彼らの個々のアイデンティティに触れることができ、一人の防衛大生の話に感動して涙を流すデリまでいた。私達の分科会では主観的な議論となる難しさが壁となる一方で個人のアイデンティティが議論に反映されることで、メンバーそれぞれのアイデンティティを理解することができる分科会でもある。この分科会を通して、防衛大学生自身のアイデンティティに触れることができたのは大変貴重であり有意義な経験であったと思う。（森鞠乃）

防衛大に対して持っていた右傾のイメージを覆される研修で、リベラルな考えを持った学生の多さに驚かされました。防衛大生の行く先である自衛隊への認識も大きく変わり、今後アメリカ側と話をするうえで、大変参考になりました。また、同じ大学生であるのに、普通大学の生徒と比べて勉強量がはるかに多いことを知り、頼もしく感じました。防衛大生からは、寮生活であり、基本的に平日の外出はなく、休日も門限が厳しいという話を聞きました。大学生であるとともに、すでに給与を得ているという点で少し違うのかもしれませんが、それでも、彼らに日本の大学生は見習うべき所が多々あると思います。（辻村志帆）



防衛大学校生との議論

■秋田研修

日時：7月4日（金）～7月6日（日）

場所：秋田県（藤里町と国際教養大学）

自主研修とは、日米学生会議の非公式プログラムであり、日本の参加者が母国を知るために自主的に開催する宿泊型の勉強会である。

昨年は沖縄で開催され、第66回日米学生会議では「日本の地方を知る」ことを目的とし、秋田で開催された。日米学生会議の日本側学生の参加者は、主に首都圏の大学生によって構成されている。日本の未来を担う学生が、地方の豊かな魅力を認識すると共に、地方が抱える多種多様な問題を現場で体験することにより、問題意識を高め、研修参加者が解決に向けて意欲的に取り組めるような環境作りを目指す。

秋田は、白神山地や田沢湖など豊かな自然に恵まれ、なまはげや竿燈祭りなど様々な郷土芸能や祭りを保持し、農業も盛んな、いわゆる「資源大国」と言われている。また、全国学力テストの成績ではトップレベルを維持し、グローバル人材を育成している国際教養大学が注目されるなど、秋田の教育も評価が高い。一方で、日本の地方に見られる過疎化や人口減少が大きな問題の一つとして挙げられる。私たちは秋田の魅力を肌で感じると共に、日本の地方が抱える諸問題を、現地へ赴き視察することで理解を深め、問題解決に向けて地元の方々と議論する場を共有していきたいと考える。

初日は、藤里町社会福祉協議会施設「こみっと」見学、藤琴商店街の町歩き、月宗寺住職・袴田俊英様による講話、地域課題のディスカッションおよび夕食会を行い、「湯元和みの湯」に宿泊。二日目は、7月5日（土）白神山地世界遺産センターの視察および斎藤栄作美様のレクチャー、サフォーク飼育所の見学および農業レストラン「サフォーク白神」で昼食、六次産業の視察（エスポワール・白神の恵体験工房）、あきた白神りんどう見学、歴史民俗資料館視察、現地のお土産品の購入を行い、秋田市内のホテル秋田御所野に宿泊。最終日は、国際教養大学キャンパスツアー、北東アジア学生ラウンドテーブルとのディスカッション、秋田フォーラムを行った。

藤里町での感想

地域住民と話し合いの場を持てたのは有意義だった。とりわけ実際に仕事されている方々の実体験というのはそれ自体聞いていて面白い内容であり、かつ自分たちが調べてきた内容についての生の反応をも見られたのは良かったと思っている。当たり前の話ではあるが、私たちが第6次産業だの、新しい農業だなどと力説しても、現場の対応というのは実にシンプルなのである。対応して生き延びることが最優先なのであり、海外輸出の話など正直関心はないのである。（モンタニョミチェルルイス）

夕食会では、藤里町の地元の方々の心のこもった郷土料理を頂きながら、ディスカッションにお越しくださった藤里町住民の方とJASCメンバーはさらに熱い議論を交わしていた。私は月宗寺で日米の宗教観の違いについて話してくださった袴田さんに日本人のアイデンティティと宗教心との関連性についてお話を伺った。「芸術とアイデンティティ」分科会に所属している私にとって、今後の議論のうえで参考になるお話をしていただき、とても有意義な時間となった。また、藤里町の伝統工芸として地元で有名な「切り絵」文化についてもお話を伺うことができ、藤里町の新たな魅力を発見することができた。（森鞠乃）

6 次産業を営まれておられるエスポワールのオーナーの菊地整さんのお話が最も印象に残っています。知識やノウハウがないなかで、勇気を持って、起業し地元のために貢献するという決断は、誰にも出来る物ではないと感銘を受けました。様々な課題が有るなかで、特に後継者不足が深刻であるとお聞きし、複雑な気持ちになりました。なぜなら私自身も、このような分野に興味はありながらも、安定や将来のキャリアを考え、東京の大企業に就職する若者の一人であるからです。しかしそこで諦めるのではなく、このような素晴らしい取り組みを継続させるためのシステムや制度を将来創れるように、まずは実力を磨きたいと思いました。（竹中智）

藤里町の方々との議論

秋田フォーラムでの感想

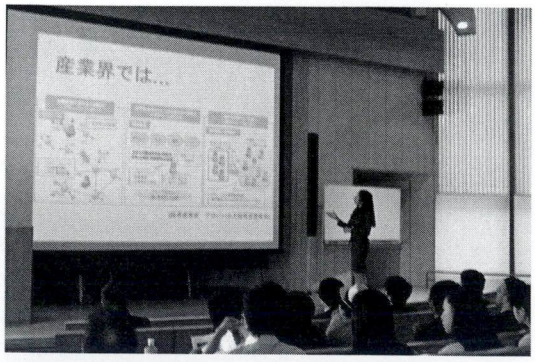
私自身が司会を務めたパネルディスカッションについて書きたいと思う。一番嬉しかったことは、AIU に在籍する学生二人の活動に関して、発表の機会を設けることができたことである。パネルディスカッション終了後、彼らが自分の体験を発表できてとても良い機会になったと話してくれたことがとても印象的で、このフォーラムを開催できて本当に良かったと思えた瞬間であった。副知事を含めてのパネルディスカッションは私にとっても相当なチャレンジであったが、パネラーの皆さんのご協力もあって、成功裏に終えられたと思う。若者の声を行政に届けるお手伝いができたことが一番の成果であると思う。（鈴木良祐）

秋田研修感想

今回の秋田研修の前までずっと感じていたことがあります。何故私達の議論は時折そんな言い方でそんなに上から目線なのだろう。秋田研修の事前議論ではそれがより顕著に感じずっともやもやしていました。しかし、今回の研修で、みんなの考えを更に知り、現地で感じたこと、考えの変わった点を聞いていくうちに、決して上から目線になりたかったわけではなく、単に私達は問題を肌で感じていなかったからだと感じました。これから日本で、そして世界で活躍していきたいならば、なおさら他人の立場にたって考えられることは非常に重要であり、私達は意識していかなければならないのではないだろうか。私達は単なる学生です。偉くも何ともない。しかし、しがらみのない学生だからこそできる議論があるはず。そして、そのために学生会議は存在しているはず。私たちは日米学生会議の代表団です。その責任はしっかり意識しなければならない。しかしながら、私達自身は偉くも何ともないのだから、そこをはき違えてはいけないと思う。お互いを刺激し合い、高めあうことは重要だけれど、すごいねと仲間内で言い合ううぬぼれ集団ではありたくない。JASCer であることの誇りの持ち方の方向性を皆間違えてはいけないと思います。（上島万波）

まずは、今回の秋田研修に参加することができ、大変光栄であったし、個人的には今後のキャリアにも影響が出てきそうなほど、実りのある経験であった。

途上国農村の勉強をしていてもそうだが、埋もれてしまっている潜在的な「価値」が農村や田舎にはたくさんあって、それは自然資源であったり特産物であったり、人的資源でもあるが、それを藤里町でも強く感じた。「コミュニティが強い」「きりたんぽが特産物」などなど、ディスカッションの中でも出てきた言葉があるが、言葉に出すのは簡単で、これらをどのように活用するか、価値を生み出すかが重要で難しいのだと思った。今まで自分はこの価値を「言葉に出す」、そしてこれまでの成功例からこんなことをしたらいいんじゃないか？と口を出すくらいしか学んでいなかったが、より現地の視点で、藤里町を理解した上で最善の方法を模索しなければいけない、少し本を読んだ程度で「一村一品やればいいんじゃないですか？」など言えない自分がいた。この経験をどのように活用し、自分がどのようにキャリアを積んでいくのかまだよくわからないが、この問題意識は、大きな変化をもたらすように思う。（永澤拓也）



国際教養大学での秋田フォーラム

■事前勉強会

日時：2014年6月7日（土）、2014年7月12日（日）

場所：国際教育振興会

第66回会議では有志による自主勉強会を2回開催した。第1回勉強会では、前日に行われた防衛大学校研修を振り返り、秋田自主研修に向けての知識補完、そして本会議に向けた英語でのディスカッションを行った。

第2回勉強会では、本会議まで2週間あまりという中で秋田自主研修の振り返りやより本会議への意識向上を目的として会議の意義を英語で考えるディスカッション、さらに英語での討論も行った。

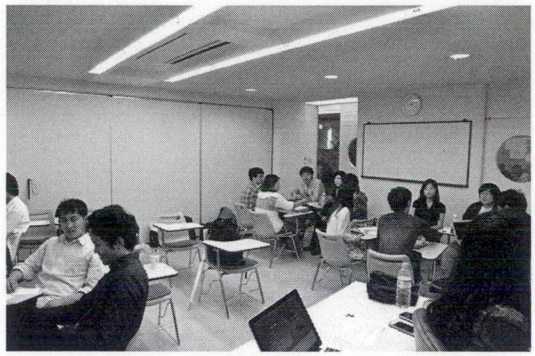
参加者感想

“JASC”を理解するためにはJASCの理念に関する話は大切です。時折、多くのことが行なわれる中でJASCが何なのか、何のためにやっているのかを見失うことがあります。そんな時に原点に帰る必要性があり、ほんの少しの時間でもこうしたJASCの理念を得ていくことで、JASCの外枠が形成されていきます。その理念から形成された外枠を受け継ぎながら、最終的には自分たちがJASCで感じた事で埋めていくことが出来るのだと思います。JASCが何なのかは一人一人違うのかもしれません。しかし、その根本にあるフィロソフィーは同じはずなのです 。（藤井一衆）

ディベートは自分の本来の意見に関係なく、賛成反対の主張とそれをサポートする理由を深く考えるきっかけとなった。あえて自分の立場とは逆の立場の主張を考える事で、自分

の本来の立場の主張の弱点を感じることができ、その点で議論に深みが出たと思う。しかし同時に自分の考える力不足も感じた。ペアの一衆が相手の主張の弱点を瞬時に見出し論破するところを見て、彼のディベートへの慣れ以上に考える力の大切さを考えた。主張を聞いて賛成するだけではなく、同じ立場の意見であったとしても、その主張の弱点を考える事は、自分と異なる主張をする相手の立場の理解にも繋がる。ディベートはディスカッションのトレーニングにもなる為、これからRT内でも練習したいと思う。（岡崎栞）

正直に言って、英語でのディベートでは毎回自分の力不足を痛感するのですが、今回は特に感じました。相手の言っていることをしっかりと理解し、要点をノートにとり、的確に反論していくというディベートの基本的な姿勢が僕にはまだ身についていないことがわかりました。また知識量の点でも、まだ立派な議論をできるレベルにないことが分かりました。そして普段から自分の頭で何も考えずに、情報を鵜呑みにする姿勢を改める良い機会でした。以上のことから、僕にとっては英語でディベートをすることは確かに毎回凹むのですが、同時に力不足を真摯に受け止め、行動を改める良い機会となるので、今後ともぜひ機会を設けていただきたいと思います。（近藤直佑）



勉強会

■直前合宿

日時：2013年8月1日（金）、8月2日（土）
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

アメリカへ旅立つ最後の事前活動としての直前合宿。ここでは、これまで日本側で準備してきたことや本会議に向けた意気込みの共有の場となった。初日は、本会議の概要説明、アメリカ側との文化交流の一環でもあるスキットの練習、本会議を想定した国内最後の分科会発表を行った。また、アラムナイの方々から激励のお言葉を頂戴し、この伝統ある会議の意義をそれぞれが心に留めた。翌日、日本人側のみとしては最後のリフレクションを行い、本会議への期待や不安、情熱を語り合い、全員で成田空港から第一開催地のデモインへ出発した。

第4章
本会議・サイト活動

デモイン（8月2日〜8月6日）

■コーディネーター

大沼　雄貴

関口　響

Anna Zeng

Sharon Lu

■概要

アイオワ州の州都デモインは、大統領選挙において党員集会が全米で最初に開かれる都市であり、数々の歴史的演説を見届けてきた。オバマ大統領が”CHANGE”という言葉を掲げてこの地の予備選に圧勝したことも記憶に新しい。金融、保険の街としても知られ、有名保険会社の本社が立ち並ぶ一方、郊外に出れば巨大なトウモロコシ畑が広がっている。かつては先住民が居住し、その後ヨーロッパからの入植者が炭鉱開発や鉄道敷設を進めたが、製造業の衰退に伴い、今日では第三次産業を中心とした地域経済へと移行した。都市美運動によって建てられたボザール様式と呼ばれるヨーロッパ風の建築も目を引く。こうした政治、産業、歴史、文化の諸相は、他の地方都市にも共通して見られ、この地はアメリカの典型的な地域コミュニティーであると言えよう。

■スケジュール

8月2日（日）

日本側代表団デモイン到着

8月3日（月）

開会式、スキット、分科会活動

8月4日（火）

メスクワキセトルメント訪問、分科会活動

8月5日（水）

ワールドフードプライズ訪問、Agricultural Forum、デモイン市内観光

8月6日（水）

Atomic Bomb フォーラム、サンフランシスコへ移動

■具体的な活動

開会式

忘れることのできない様々な思い出と経験を得た夏の始まりは、デモインの落ち着いた景色をバックに木の温もりを感じるホールでの開会式だった。スーツに身を包み、少しそわそわしつつ、着席していたことを今でも鮮明に覚えている。いよいよこの夏が始まるにあたってのお言葉をお聴きしつつ、高揚した雰囲気が場を包んでいた。誰もの瞳がこれから始まるJASCへの希望でキラキラと輝いてみえた。今までこの夏のために取り組んできたことが無駄にならないように、精一杯頑張りたいと心を引き締めた開会式であった。（上島万波）

スキット

“It was the best skit I have seen ever.”スキットが開催された翌日、もらった手紙に記されたこの言葉、多種多様なキャラクターを演じるジャパデリの輝いた表情、そしてアメデリからあがる歓喜と賞賛の声が、スキットの成功にかけた私たちにとって忘れられない贈り物となった。しかし、この成功はジャパデリたちの十人十色に光る個性なくしてはありえなかっただろう。スキット係は、彼らの個性が輝く舞台と、観客の高揚を誘う音楽、そして彼らの個性をさらに引き出すちょっとした小道具を用意したに過ぎない。強烈なキャラクターが次々と登場し舞台を席巻する物語は、今思えば、いつも仲間たちの誰かを想定して紡がれた。その物語を想像以上に魅力的に語ってくれた仲間たちに感謝したい。（板倉美聡）

メスクワキセトルメント訪問：農場と昼食

私たちは、メスクワキ（アメリカの先住民族）の人々が営んでいる農場を見学させていただいた。メスクワキの人々は、先祖代々から伝わる作法や考えを受け継いで作物を栽培されていた。中でも印象に残っているのが、全てのものには魂がこもっているという考えである。彼らは自分たちが栽培している作物にも魂が宿っていると考えて、感謝の気持ちをもって食すことと作物に敬意を払うことを忘れずに生活を送っているとのことである。また、彼らが、全ての物は自然に帰るという考えを持っているのも興味深かった。このような考えは、私たち日本人と共通する考えではないかと実感した。アメリカの多様性に改めて垣間見る良い機会だった。（澤隼）

メスクワキセトルメント訪問：歴史博物館

ネイティブアメリカンの人たちが生活を営むエリアであるメスクワキセトルメントを訪問したこの日の午後は、彼らの歴史に関する博物館を見学した。かつて彼らが迫害された過程を、アメリカ大陸の地図を前にしながら１時間以上に渡って、ネイティブアメリカンのガイドの方から説明を受けた。その説明は非常に感情的で、当時の西欧人に対して敵対心をあらわにするものであり、とても印象に残っている。個人的に興味深かったのが、人のhomeの定義に関する説明である。ガイドは先祖の土地が人のhomeであると定義していた。しかしこれに従うと混血である私のhomeは定まらなくなる。彼らのように文化を共有する集団があれば先祖の土地をhomeとして共有できるのかもしれないが、私のように同族コミ

ュニティーを持たない孤独なマイノリティーはどうすればよいのだろうか。非常に考えさせられるツアーであった。（矢島ショーン）

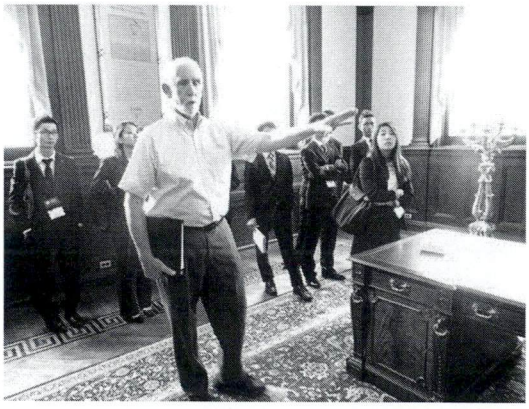
メスクワキセトルメント内の農場

ワールドフードプライズ訪問

World Food Prize では農業や食糧生産技術、特に「緑の革命」と呼ばれる化学肥料を用いた生産効率の大きな向上とその功罪について学んだ。更にそれに関連して遺伝子組み換え食品や、より高位の概念である「食の安全」についてなど、食にまつわる様々な事柄について考察を深めた。私たちの環境分科会には、農業のプロフェッショナルともいえるメンバーがいたため、彼からも有益な話を聞くことができた。化学肥料の使用は、土壌の荒廃のみならず土壌汚染や地下水の汚染をもたらす。人口爆発による食糧不足が懸念されるなか、食糧増産のみにスポットライトが当てられがちだが、それがもたらす影の部分についても、否定肯定に関わらず目を向けることが必要であると感じた。（池田耕一）

Agricultural Forum

Agricultural forum では農業や食品に関する問題について、専門家をお呼びし、パネルディスカッションを行った。特に遺伝子組み換え食品についてのディスカッションが印象に残った。遺伝子組み換え食品により、気候の変化にも強い食物を大量生産できるので、これからの人口増加に伴う食糧不足問題の解決と発展途上国への支援、また農業に携わる人の数を減らすことにより、他の分野に貢献する人が増え、それが社会の発展につながったりと、今までは遺伝子組み換え食品の安全面ばかり注目し、欠点しかあまり見てこなかったので、とても勉強になった。（松井友紀）



ワールドフードプライズでのレクチャー

■サイトコーディネーター後記

第66回日米学生会議の幕開けとなったアイオワ州デモイン市。地方都市でありながら、政治や文化、農業において大きな存在感を持つこの地で、代表団が何を学ぶことができるのかを念頭に置いてサイトの準備と運営に取り組んできた。

私たちが滞在したグリネル大学は自然に溢れる美しいキャンパスで、関東や関西などの都市部出身の多い日本側代表団は会議の始まりをこの素晴らしいキャンパスで始めることに多くの喜びを感じていた。同時に、ここアイオワでは、私たちが普段の大学の授業では学ぶことができない知見を、様々な機会を通じて学ぶことができた。アメリカ原住民の文化や習慣が残されているメスクワキセトルメントでは、実際に原住民の方々と交流を持つ機会に恵まれた。民族博物館を管理する原住民の老人が200年近く前の欧州からの侵略に対する怨恨を、まるで昨日のことのように語る姿に多くの学生が衝撃を受けていた。アイオワと聞けば多くのアメリカ人が「広大なとうもろこし畑」を思い浮かべるが、その想像を超える景色を我々は直接目にすることもできた。視界の端から端まで、地平線の向こう側まで広がっているとうもろこし畑は、アメリカ大規模農業の強さを表していた。農場以外にも、農業に貢献した人々を讃える場であるワールドフードプライズへ訪問し、また広大な農場を経営する農業従事者や農作物に関する研究をしている教授とのシンポジウムでは、農業技術の革新と農業が持つ可能性も知ることができた。学生の中には、ただ講演者の話を聞くだけでなく、批判的に技術の危険性を主張するものも少なくなかったが、これは学生たちが農業にまつわる問題について真剣に考えていた表れであった。一週間弱のデモイン滞在であったが、日米両国の学生がそれぞれの観点を持って問題に取り組み、議論を尽くしてくれたことはサイトコーディネーターとして最大の喜びであった。また、素晴らしいサイト運営を実現するため、身を粉にして尽くしてくれたアメリカ側実行委員であるAnnaとSharonには心からの感謝を伝えたい。彼女達の情熱と努力がなければこの第一サイトの成功はなかっただろう。この場をお借りしてデモインサイト運営に協力してくださったすべての方々に感謝の意を伝え、サイト総括とさせて頂きます。(大沼雄貴、関口響)

サンフランシスコ（2014年8月6日〜8月13日）

■サイトコーディネーター

大西 由起

鈴木 健司

Quyen Nguyen

Ken Panis

■サイト概要

カリフォルニア州北部の湾岸に位置するサンフランシスコは、米国西海岸を代表する世界都市である。米国西海岸の経済、工業の中心地であり、金融センターとして重要な役割を果たしている。近くに位置するシリコンバレーでは技術研究や企業、貿易の中心として、優れた知性や起業家精神を持った人々が世界中から集う。近年にみられるシリコンバレーでの革新的な発展は、米国のみならず諸外国における技術進歩にも大きく貢献している。チャイナタウンやエンジェルアイランドを始めとする地域には多くのアジア系移民が居住している。またLGBTの発祥地とも知られ、非常に多様性に富んだ地域でもある。第2サイトでは技術やビジネスについて学ぶとともに、ホームステイでの経験を通して米国の文化や多様性について理解を深める。

■サイトスケジュール

8月6日（水）

サンフランシスコ到着

8月7日（木）

分科会活動、Diversity Symposium、タレントショー

8月8日（金）〜8月9日（土）

ホームステイ

8月10日（日）

ホームステイ、日米学生会議80周年式典

8月11日（月）

Hiro Ogawa氏宅にてバーベキュー、Google見学、Japanese Cultural Night

8月12日（火）

分科会活動、自由時間

8月13日（水）

第3サイトへ出発

■具体的な活動

Diversity Symposium：移民講演

アメリカの移民政策の歴史に関して、また日本の移民政策のこれからに関しての講演を頂いた。日本で生活する日系ブラジル人に関
するビデオがとても印象的で、日本が彼らに行っている状況を見るとまだまだ社会整備は勿論、人々の外国人に対する偏見、差別が色濃く残っていると痛感した。また移民のアイデンティティーが保存されるような政策を取るのか、或は、同化／統合政策を取るのかをはっきりさせなければ、アイデンティティークライシスに直面するのは移民世代ではなくその後の2世もしくは1.5世であることが参加者との質疑応答で分かった。講演者が日本人であった事も、純粋に嬉しく、このように世界で活躍される日本人がいる事を大変誇らしく感じた。（原田有理子）

Diversity Symposium：LGBTQ パネル

多様性パネルの中で、LGBT（性的少数派）に学ぶパネルが執り行われた。ご講話いただいたのはJASC アラムナイのお二人（ゲイ、バイセクシュアル）と、一方のご主人である。普段我々が考える機会のないトピックであり、彼らのお話は代表団一人ひとりの心に強く響いた。まず、アラムナイでバイセクシュアルのマデリンさんが、LGBT を取り巻く歴史と彼女の両性愛者としての人生、両親との関係についてお話しされた。次にアラムナイでゲイであるブリトンさんが、同じく自身のカミングアウトのエピソードや、同性愛者と公表してからの大学から、友人からのいじめなど辛い経験を教えてくださった。そして社会的なLGBT へのいじめや差別についてお話をいただいた。最後にブリトンさんのご主人のジョシュさんから、同じくゲイとしての生き方や、彼らの結婚生活などについてご講話いただいた。多くのメンバーが彼らに質問を投げかけ、LGBT という一つの人権問題にたいし全員が知識を得たことは、とても意義のあったことだったと思う。（野間雄大）

タレントショー

サンフランシスコでは、有志で歌やダンスを披露するタレントショーが開催された。タレントショーは単に出し物として盛り上がりを見せたのみならず、お互いの文化を通し相互理解を促進した。ブレイクダンスやアカペラ、能などが披露される中、特に印象に残っている演目はアメリカ側学生による落語の小話である。英語なまりの日本語で話される小話はとても新鮮で面白く、日本の伝統文化が日本以外の国で発展する可能性を見出すことができた。純粋にアメリカ側学生が日本の文化を好きでいてくれることを嬉しく思い、好感を覚えた。相手文化の理解に努めることは、相手を理解しようとする姿勢そのものである。そのような姿勢を見習いたい。（鈴木良祐）

ホームステイ

サンフランシスコでのホームステイは、JASC における最高の思い出の一つである。訪問先はJASC のアラムナイの一人である、Allen Miner さんのお宅であった。奥様のMichiko さん、息子さんのSage 君、娘さんの

Erica ちゃんの 4 人家族で、Allen さんの優しさと Michiko さんのエネルギッシュさが調和した心温まるご家族であった。そして様々な非日常的な体験をさせていただいた。初日の午後は日本の会社では考えられないような自由あふれる Facebook の本社、とても綺麗で趣あるスタンフォード大学のキャンパスに連れて行っていただいた。翌日は Golden Gate Bridge 周辺をハイキングした後、中華料理をいただき、サンフランシスコ市内観光を楽しんだ。最終日はなんと小型飛行機の操縦桿を握る機会をいただいた。一緒にホームステイをした Yohei, Minh ともたくさん話すことができ、すばらしい３日間であった。（矢島ショーン）

日米学生会議 80 周年式典

日米学生会議 80 周年を飾る Alumni Reception は 8 月 10 日、サンフランシスコ市内の Drake Hotel で華々しくとり行われた。80 周年記念式典とあって、会場には日米双方から錚々たる Alumni が顔を連ねた。伝統と OB との関係を重視する JASC ならではの行事であったが、Alumni の方々との交流を通して JASC の歴史はもとより、日米関係の歴史を垣間見ることができたことは意義深かった。中でも面白かったのが Alumni と同じ机上で議論をする Alumni Discussion である。これは Alumni からも、まるで古き日の再現のようだと好評であった。JASC で話し合われた内容も雰囲気も、時代背景を反映して変容してきたようである。知識や経験も浅く「現在」の状況にのみ視野が狭まりがちな私たち参加者にとって、特に初期の参加者からの言葉はまるで全く新しい視点をもたらしてくれるかのようで一つ一つが大変印象深かった。（小宮山宗）

アラムナイ RT 時間での一枚

Google 見学

Google での研修は本当に刺激的なものであった。私がビジネスに興味があるということもあり、本当に楽しみにしていた。当日はグループごとにビジネスアイデアを発表し、その後会社の敷地内を案内してもらった。ビジネスアイデアを話し合うときに意識したことが、時間内に必ず成果を上げるということであった。商学部に所属しており、大学の授業などでビジネスアイデアを発表することもあったが、大学ではあくまで口頭でアイデアを発表するのみであった。しかしグーグルでのワークショップでは、決められた時間内に紙やペンなどを使って完成図まで作成した。完成図まで作る目的は、ユーザーがそのサービスを使っているときのことを容易にイメージできるためとのことだった。さらに作り手も完成図を作る過程の中で、自身のアイデアの改善点がより明確になるというメリットもある。改めて完成図まで作りきることの重要性を確認した。その後、広大な敷地を見て回った。至る所ビリヤード台、バス

ケットコート、滑り台など、通常のオフィスでなかなか見受けられないものがたくさんあった。そのわけを尋ねたところ「イノベーションを引き出すために必要なんだ」とおっしゃっていた。確かに「イノベーティブなアイデアは仕事以外のところで生まれる」という話を聞いたことがあり、すごく腑に落ちた。人間は身近な環境に非常に強く影響されると言われているが、本当にその通りだと強く思った。（北原吉泰）

Hiro Ogawa 氏宅にてバーベキュー

私たちはAthertonにある小川様のご自宅に招待して頂き、お昼ご飯を頂いた。屋外で太陽の下、そよ風に吹かれながら食べたハンバーガーやアイスはとても美味しかった。また、小川様のご家族と共に、カラオケやスポーツも楽しんだ。タイトなスケジュールの多いJASC の中で、ゆったりと流れる時間を友人と共有出来たことはよい思い出となっている。会の終わりには、小川様が人生の先輩として、全ての人と対等に接することや夢を諦めないことの大切さを話して下さった。実際に社会で広く活躍されている小川様のお話に深く感銘を受けたことを今でも鮮明に覚えている。最後には全員で集合写真も撮り、温かなひと時となった。（朝倉咲希）

Japanese Cultural Night

午後のプログラムを終え、辺りが暗くなり始めた頃、見慣れた日本式庭園が見えた時はなんだか安心したのを今もよく覚えている。ハンバーガーとピザに飽き始めた舌は美味しい日本料理に歓喜し、まさかアメリカに来て習字までできるとは思ってもいなかった。このような場所にもJASC のつながりが脈打っていることに感動した一夜だった。座禅・おみくじ・短冊、流しそうめんと日本人でさえ最近はなかなか触れる機会のなかった文化に触れ、その良さに改めて気付いたのではないだろうか。同時に、個人的には米国側参加者、もちろん日本側参加者の JASCer とも多くの話を交わす機会となり、プログラムも中盤にさしかかろうとしている中で、親睦が一層深まった大事な機会であったように思う。（永澤拓也）

主催者の Allen Miner 氏と

自由時間／RT タイム

サンフランシスコでの最後の一日ということで、この日は自由に街を散策する事ができた。私はエンジェル島と中国人街を訪れた。太平洋からの移民の主な受け入れ先であったエンジェル島には興味があり、ここを訪れたいと前から思っていたのである。

主に中国系の移民を受け入れてきた歴史があり、島の資料館では彼らに着目した展示がほとんどであった。一時的に収容された場所とは言え、彼らが置かれた状況が劣悪だったということは、壁に彫られた詩が物語って

いた。後に彼らはサンフランシスコの街の発展に貢献し、次第に認められていったとは言え、ここでの歴史は決して風化することはないのでしょう。しかし、お互いの埋めがたい隔たりを自覚した上で共存していくこともまた不可能ではないようである。サンフランシスコで食べる中華料理というのも悪くない。（モンタニョミチェルルイス）

■サイトコーディネーター後記

第二サイトとであるサンフランシスコは、80周年を迎える日米学生会議にとって、また第66回会議参加者にとっても、記憶に残る大切なサイトであっただろう。8月6日から8月13日の8日間にわたって濃密な日々を過ごすことができた。始まりは、日本側代表団の飛行機の遅延からであった。現地の宿泊所であるUCバークレーの寮に着いたのは日付を回ってから。壮絶な第二サイトの幕開けとなった。だが、そんなことも忘れてしまうくらい、あっという間に過ぎていった。

サイトをコーディネートする上で、この都市を、そしてJASCを最大限に学び、経験し、楽しんでもらうことを心掛けた。アカデミックな面では、日本側代表団の有志による"Atomic Bomb Forum"やUCバークレーのDr. Keiko Yamanakaによる移民に関する講義とLGBTQ Panelで構成された"Diversity Symposium"の開催、さらにはGoogle見学を通して、サンフランシスコの特徴でもある「ダイバーシティ」と「アントレプレナーシップ」への理解を深めた。一方で、JASC伝統であるタレントショー、Hiro Ogawaさんのご自宅でのBBQ、Hakone Gardenで開催された"Japan Cultural Night"での日本文化体験、分科会ごとの自由時間では、互いの仲を深めると共に、楽しい時間を過ごすことができた。

そして、本サイトのメインとなっていたのが、アメリカ文化を体験できるホームステイとJASC80周年を記念したアラムナイイベントである。特に、ホームステイの企画・運営は私たちサイトコーディネーターにとって最大のチャレンジであった。アメリカ側実行委員のQuyenとKenが直前までホームステイを受け入れてくださるご家庭を探してくれたおかげで、代表団全員がホームステイを経験することができた。日本側実行委員として、できることが少なかったのが一つ心残りではあるが、皆それぞれのステイ先で貴重な体験をしたと聞くと、ホームステイを無事に実施でき、大変嬉しく思う。

80周年式典でも多くの方々にご参加頂き、縦のつながりの強さを改めて実感した。前半の分科会議論においては、先輩方からのフィードバックや新しい視点を伺い、その後の分科会活動に活かしている分科会もあった。また、後半のレセプションでも、積極的なネットワーキング活動が見受けられ、"JASC話"や将来の相談など、代表団にとって有意義な時間となり、日米学生会議の一員としての誇りを抱くことができたのではないだろうか。

タイトなスケジュールながら、充実したサイト運営ができたのも、多くの人々の多大なるご支援ご協力あってこそと、感謝している。とりわけ、私たちのパートナーであるQuyen NguyenとKen Panisなしではこのサイトの成功はなかったと感じている。ただただ感謝の気持ちでいっぱいだ。ありがとう。

最後に、この場をお借りして、サインフランシスコサイト開催に携わってくださった全ての方々に、改めて心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

（大西由起、鈴木健司）

Google のモニュメントを囲んで

ニューヨーク（2014年8月13日～18日）

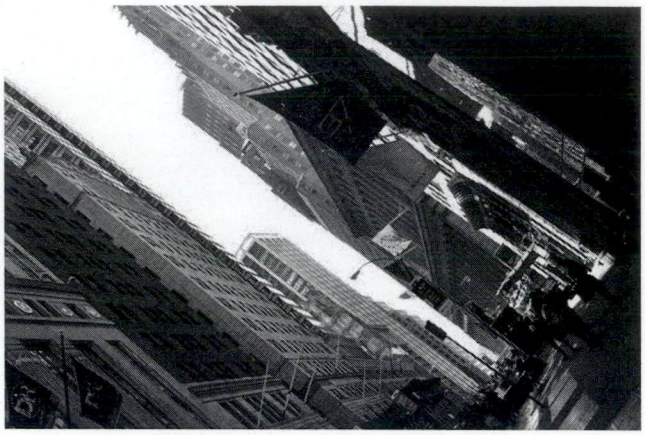
■サイトコーディネーター

小松崎遥平

古村大和

Jee Eun Choi

Norihito Naka



■サイト概要

ニューヨーク州はアメリカ大陸の北東に位置し、カナダとの間には世界最長の国境がのびる。中でもニューヨークシティは、世界で最も有名な都市と言っても過言ではない。世界市場の中心であるウォールストリートには三菱東京 UFJ 銀行、双日、伊藤園といった日本の大企業も軒を連ねる。そこで参加者は、第一線で活躍するビジネスパーソンと出会い、企業の社会的役割や自己の将来を熟考する機会を得る。また、この街は2001年に同時多発テロ事件、2012年にはハリケーン「サンディ」に襲われた。いまもなお残るテロの脅威を肌で感じ、国際社会の平和について考える。そして、東日本大震災を経験した我々とともに、天災への向き合い方を相互の体験から学ぶ。民族の多様性やエンターテイメントにも恵まれたこの地で過ごす時間は、忘れられない体験になるであろう。

■サイトスケジュール

8月13日（水）

ニューヨーク到着、分科会活動

8月14日（木）

9/11 Tribute Center、分科会活動、Career Fair

8月15日（金）

分科会活動、原爆フォーラム、日本語勉強会

8月16日（土）

エリス島、市内見学、分科会活動

8月17日（日）

ウォール街、Sarah LaFluer 氏講演

8月18日（月）

第4サイトへ移動

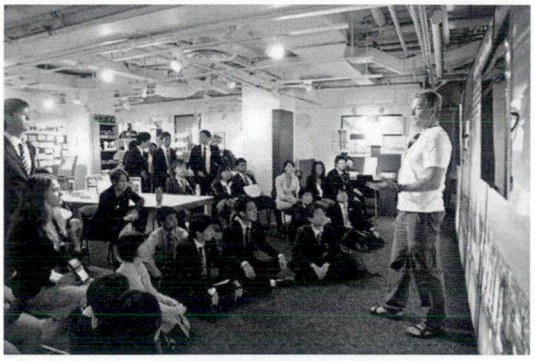
■具体的な活動

9/11 Tribute Center

「WTC を作り直したの？またテロの標的になるんじゃない？」「それがアメリカだよ」9.11 ツアーの日、JASCer の間でこのような会話が交わされた。

9.11 のテロが引き金となったイラク戦争では多くの人々が犠牲となったが、これが何かを解決したようには思えない。そもそも 9.11 が起こった原因は、湾岸戦争時に異教徒のアメリカ軍などがイスラム教の聖地を有するサウジアラビアに駐留したところにある。アメリカのイスラム圏への介入が恨みを買い、報復としてのテロが再びイスラム圏への介入をもたらす。この悪循環を断ち切らなければ犠牲者は増える一方だ。

現在も「イスラム国」との戦争状態をはじめとして対立は続く。キリスト教徒でもイスラム教徒でもない日本人として出来ることは何か、いま考えたいと思った。（辻村志帆）



9. 11 当時消防隊員をされていた方

Career Fair

伊藤園（北米）の企業関係担当上級副社長、Ms. Rona Tison のお話から始まった Career Fair。1 つのイベントや考え方に捉われず、柔軟に対応していくことの大切さなど、これから社会に出て働く私たちにとって重要なことを、Ms. Tina の実体験を交えて教えて頂いた。その後、2 つのパネルディスカッションが行われたが、特に今後のコミュニケーション方法についてのディスカッションが心に残った。技術の発展により場所や時間を問わず連絡を取ることが可能になったが、やはり対面で話し合うことが最も意思疎通が図れる方法だとパネリストが全員一致なさっていた。デジタル世代の私たちが働く上で、自分なりに技術と対面のコミュニケーションのバランスを探っていくことは欠かせないと改めて考えた。（光本愛理）

原爆フォーラム

3 部構成で構成したフォーラムは最終日を迎え、原子爆弾の未来に関して話し合いました。「原子力爆弾（核兵器）を他国からの攻撃を防ぐ為の抑止力として保持するのか、それとも世界全体で廃絶していくべきなのか」という、理想と現実が交差する議題を話し合いました。参加者の中で意見が五分五分に別れましたが、お互いの意見を尊重し合いながら考えを深めている様に感じました。この議題は、答えをまとまる事ができないのかもしれません。しかし、両者とも自分とは異なる考えの人の存在を知って、これからも考え続ける事が大切なのだと思いました。（小林勇貴）

被爆者ストーリー

私は広島出身であり、被爆者ストーリーを主催して下さった Japan ICU Foundation は自分の大学の組織だったこともあって、身近に感じつつまた非常に興味のあるイベントであった。このイベントでは、被爆者の一人がロンドンやニューヨークなど海外に行き体験談を語るというビデオを鑑賞した。原爆投下から 69 年、被爆者の高齢化は進み、私たちは彼らから直

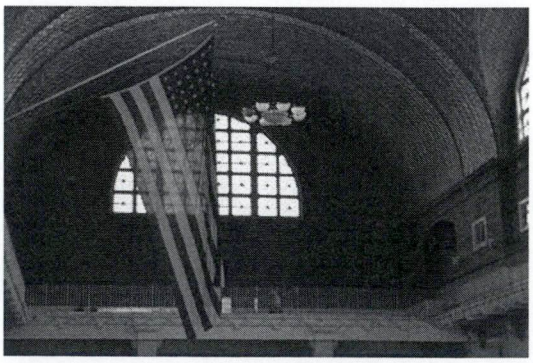
接話を聞くことのできる最後の世代だと言われている。原爆だけが69年前の戦争の全てではない。しかし日米学生会議として、日米を切っても切り離せない要因の一つになっている原爆を取り扱うことはやはり必要不可欠であるように私は思う。日米のみならず全ての国・人が二度と同じ悲劇を繰り返さないために、現在・未来につながる問題として過去を学ばなければならない、そう改めて感じた被爆者ストーリーであった。（村井咲絵）

日本語勉強会

本会議中、「NihonGo」と題し、アメデリと日本語で交流する企画を行いました。ニューヨークでは日本語のスキットと俳句講座を開講。スキットでは日本語での告白の仕方を紹介し、アメデリも少し緊張した面持ちで台詞に挑戦していました。俳句講座ではジャパデリや日本語が得意なアメデリの協力を得、チームごとにＪＡＳＣの思い出を句にしてもらいました。さらにワシントンで日本語勉強会を開催した際には、グループに分かれて即興でスキットを作りました。メンバーの個性を生かし、あるいはギャップを引き立て、名作の数々が誕生しました。アメデリにとっても刺激的な時間になったのではないかと思います。（東影喜子）

エリス島

エリス島―ヨーロッパからの移民の窓口であり、新たな生活に期待をふくらませる”Island of Hope”であると同時に、厳しい入国審査が待ち受ける”Island of Tears”でもある。私にとっては、3年前来た場所に再び来られたこと、また今回は移民分科会のメンバーとしてアメリカの移民の歴史を少々勉強した上での訪問であること、さらに、ヨーロッパからの移民を受け入れる東の門エリス島と対をなす、アジアからの移民の窓口となる西の門、サンフランシスコのエンジェル島を訪れた後の訪問であることが重なり、印象的な訪問となった。同じ移民博物館での展示を見ても、前回は、移民に対する非人道的ともいえる扱いや数々の検査の存在に驚き、移民の目線に立って審査を待つ厳しい生活環境や受け入れられなかった時の失望感を感じただけだった。しかし今回は、そのような厳しい審査を行い選別しなければならない政府の立場も理解できた。国家が、移民を社会の構成員や将来の国民と見なして受け入れるなら、やはり経済的利益をもたらす人、健康な人、英語のできる人を優先したいのは当然だ。同時に、現在の国民の生活を守るために国に負担をかけるような移民は受け入れられない。移民による労働力も必要だが、国民の利益を守る必要もある国家がどのように移民政策を進めるべきなのか、移民の国アメリカが試行錯誤してきた歴史を感じた。（竹内瑞希）



エリス島の移民博物館

ウォール街

ウォールストリートで感じた事は、「何のために働くのか」を胸に問い続ける重要性だ。率直に感想を述べると、冷たいコンクリートに囲まれたビル街という印象であった。確固たる目的がなく、ここで将来仕事がしたいと淡い理想を抱いていた自分に危機感を感じた。このような環境にいれば、往々にして権力欲・名誉欲にその精神を蝕まれる気がしたからだ。「何のために働くのか」という人生における重要な問いを、あたかも悟りきったかのように教示するビジネスマンには決してなりたくない。ウォールストリートを歩きながら、果たして今の自分が、ビジネスに携わる全ての人間に求められる「厳格な自己批判」を行えているのかを考えた。来春から常に謙虚な姿勢で仕事に臨まなくてはならず、それによって始めて超一流の人格を備えたビジネスマンになれると強く確信したひとときであった。（竹中智）

Sarah LaFleur 氏講演

JASC の偉大な OB 宮澤喜一首相のお孫さん、かつ JASC の OG でもある Ms. Sarah LaFleur。コンサルティング会社での経験を活かし、現在は M.M. LaFleur という独自のブランドを立ち上げ、働く女性向けの服を展開している。肩書きを見て尻込みしていたが、とても気さくな方で、自身の JASC の思い出から、起業のインスピレーションはアメリカにはないが、日本で育った彼女にとっては身近だった働く女性向けの日本雑誌にあったことまで様々なは全員が息をのみ、展示されていた犠牲者の写真や名前の中に彼らの生きた証を見て胸を詰まらせた。また、終戦記念日である 8 月 15 日は、原爆をテーマとしてレクチャーをうけつつ、代表団の一部が有志となって議論をファシリテートした。豊富な映像資料を通して

ことをお話してくださった。安倍政権により女性の活用推進の動きが強まっているが、Ms. Sarah LaFleur は企業や政府に頼らず、自ら女性としての力を最大限に使い挑戦していた。更にファッションにより働く他の女性までも輝かせる、まさに活躍する女性のロールモデルであり、男女ともに大きな刺激を受けた。（光本愛理）

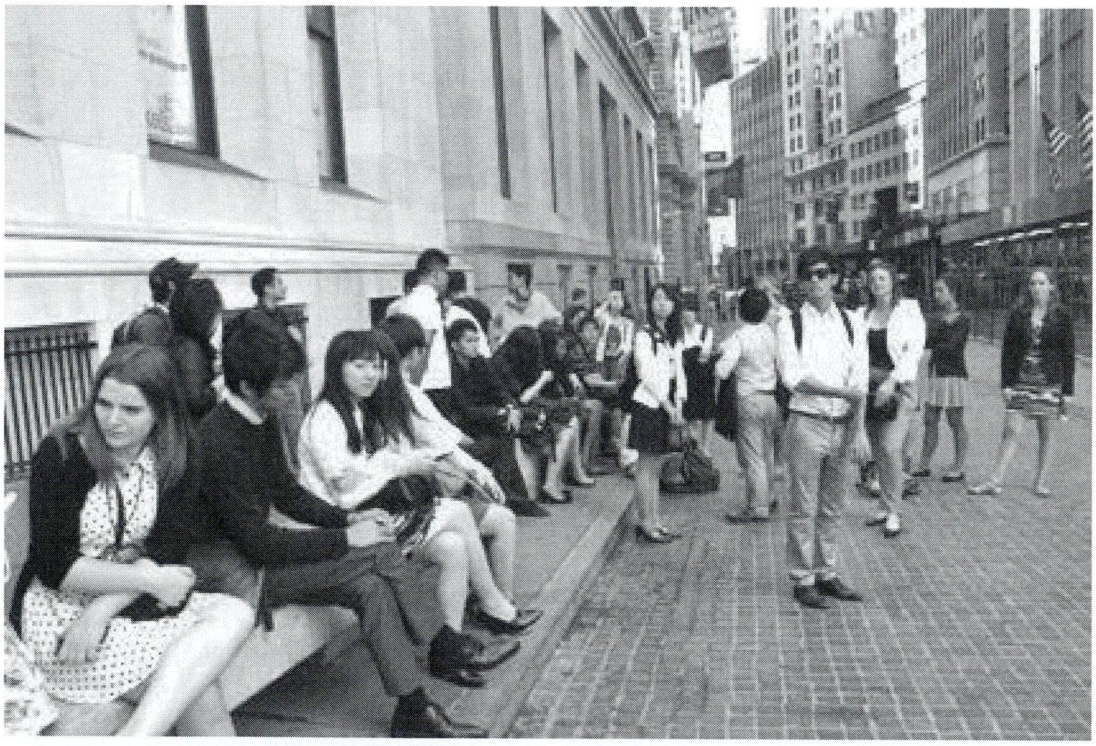
■サイトコーディネーター後記

第 3 開催地となるニューヨークでは、「平和と将来について日米の学生が考察し、議論する」という目的のもと日程をくみ上げた。なぜなら、相互理解を通して日米そして世界の平和の構築の一端を担うという日米学生会議の原則を具現化していくためには、戦争・テロと平和という問題をさけては通れないし、また、この会議で培ったリーダーシップを長期的に社会へ還元していくためには、自分や仲間の将来について考える時間が不可欠であると考えたからである。これから示していくように、このニューヨークという地はその二つの目的にとても親和性が高かった。

私たちは「911Tribute Center」という施設に訪れた。ここには四角くて大きな穴が二つある。どちらも覗き込むと深い二段になっており、無数の水滴が淵から内側へと涙のように流れ落ちていく。二機のビルが突っ込んで倒壊した、旧世界貿易センタービル跡である。当時現場に居合わせた生存者の生々しい話に

原爆の悲惨さを目の当たりにする一方で、具体的な安全保障政策を視野にいれて核兵器の現状とあるべき姿について考察した。こうしたリアルな体験を通して私たちは、終戦から70年を迎えんとする今もなお、自分たちはその過去を背負った当事者であるということを強烈に認識した。このリアルさと現在性こそ、平和構築のために不可欠な感覚であると思う。

また第二軸の将来については、まず各業界の代表を集めたパネルディスカッション、および学生と社会人とのネットワーキングからなるCareer Fairが開かれた。新卒一括採用制度を採る日本と中途採用が主流の米国、また日系企業の米国での活躍など、両国のコントラストに興味をもった学生が多かった。さらに、コンサルティングファーム等での勤務を経て現在は自身のブランドを手がけるSarah LaFleur氏の事務所を訪問した。日米学生会議の出身でもある彼女からは、ビジネスのリアルな最前線と、生き様や美学のようなものを感じさせて頂いた。こうしたコンテンツの随所で、学生同士が互いの夢について語り合う姿が多く見られた。思い思いに語り合い、認め合うその様子は、世界へ雄飛して活躍することを予感させた。そして改めて、私たちの目の前には文字通り無限の可能性があり、そこに不可能などありえないのだということを感じた。（小松崎遥平、古村大和）



ウォール街のツアーを終えて、小休止

ニューヨークの摩天楼を背景に

ワシントンD.C.（8月18日～8月24日）

■サイトコーディネーター

兼子　莉李那

木村　優吾

Ayaka Yoshida

Pramodh Ganapathy

■サイト概要

首都ワシントン D.C.は、アメリカ合衆国の三権機関の、大統領官邸、議会議事堂、連邦最高裁判所が集まっており、国内政治の中心地である。多数のシンクタンク、国際機関、大使館が集中しており、国際的にも強大な政治的影響力を持つ都市である。日本との関わりは強く、米日カウンシルなど多くの日米共同機関が拠点を構えている。毎年行われる桜祭りは、1912年に日本からアメリカへ桜が寄贈された記念に始まり、二国間の親密な友好関係を今も祝っている。参加者は躍動感溢れるこの世界都市で、アメリカの政治、歴史、国際関係、日米関係について肌で感じて学ぶことができる。最終サイトでは、ファイナルフォーラムで分科会における議論や成果を社会に発信する。会議はここワシントンD.C.にて刺激的な一夏を締めくくられる。

■サイトスケジュール

8月18日（月）

ワシントン D.C.到着、ジョージタウン観光、ボーク邸レセプション、ニューヨークサイトリフレクション

8月19日（火）

ファイナルフォーラムリハーサル

8月20日（水）

ファイナルフォーラム、ファイナルレセプション

8月21日（木）

戦時中の日系アメリカ人の歴史講演、次期実行委員会選挙

8月22日（金）

JASC OBの川口さんによるご講演、日米関係に関するパネル

8月23日（土）

ワシントンD.C.観光

8月24日（日）　日本へ帰国

■具体的な活動

ボーク邸レセプション

第4サイト初日に訪れたボーク邸はジョージタウンの閑静な住宅街に家を構え、ボーク夫妻とそのお嬢様が72名の学生を笑顔で出迎えてくれた。アートコレクターでもいらっしゃるボーク夫人が収集した絵画が壁に掛けられており、レセプションルームはカラフルで華やかな空間となっていた。ボーク夫妻はサイト間移動で疲れていた私達を温かくもてなしてくださり、とてもリラックスした時間を過ごすことができた。また、ボーク氏は現在Skye LLCという民間投資会社のトップを務めながら、アフリカなどの発展途上国への支援にもご尽力なさっており、変化する国際情勢のもとで我々が考えなければいけない点についてボーク氏の様々な経験に基づいて興味深い話をしてくださった。（森鞠乃）

ボーク邸の裏庭にて

ファイナルフォーラムリハーサル

翌日に日米学生会議を締めくくる一大イベントであるファイナルフォーラムを控え、会議初日以来の緊迫感に包まれた雰囲気の中、リハーサルは行われました。それまでのミーティングでの白熱した議論をひとつのプレゼンとして、まとめることは容易でなく、多くの班が何とか間に合わせたプレゼンを手に、リハーサルに挑みました。私の所属していたスマートパワーでは、白熱した議論はそれまであったものの、プレゼンにまとめる作業は比較的に円滑に進み、余裕を持ってリハーサルに挑みました。しかし、リハーサルでは日米学生会議らしく容赦の無い反論、疑問を投げかけられ、その後プレゼンを仕上げるために再度集合し、話し合ったのを覚えています。本番ではリハーサルのお陰で、納得のいく完成度のプレゼンを発表することができたので、フィードバックの重要性に改めて気づかされました。（近藤直佑）

ファイナルフォーラム

事前期間3ヶ月と本会議1ヶ月の議論の集大成、ファイナルフォーラム。10分という短い時間で今までの葛藤や議論を全てまとめることなど到底出来るはずもなく、多くの分科会がファイナルフォーラムをどういった形にするか思い悩んだはずだ。倫理観がぶつかり合い、1つの結論に至らなかった私たちは、なぜその問題が難しい問題なのか、なぜぶつかり合うのかをありのままに発表し、聞く側に判断を委ねるという選択をした。分科会によって色はそれぞれあったが、本会議中、さまざまな葛藤があったであろう分科会の発表を1つ1つ見ていると、議論の結果ももちろん大事であるが、自分たちにしか分からない議論の過程全てに意味がある事を思わずにいられず、JASCer全員に心からの拍手を送った。この方のようにJASCのOBとして立派に戻っ

てきたいと思った。長い歴史を持つJASCは多くのアラムナイを始めとする賛助団体や関係各位のご支援の下で活動できていると改めて感じた。ここに改めて感謝申し上げます。（岡崎栞）

ファイナルレセプション

ファイナルフォーラム終了後、在米日本大使館のご好意でファイナルレセプションが執り行われた。美味しいお寿司を振舞って頂き、参加者は互いにファイナルフォーラムの労をねぎらった。また外交の最前線で働く大使館の方々との交流では、日米学生会議が日米相互理解を促進していると激励を頂き、自分たちの活動に誇りを持つことができた。レセプション開催のために、第59回日米学生会議の実行委員長であり、大使館職員である川口さんにご尽力を頂いた。私も川口さんのように会議を終え社会人になっても、次の世代が作るこの素晴らしい会議に貢献できるような社会人になりたいと思えるレセプションであった。（鈴木良祐）

戦時中の日系アメリカ人の歴史講演

多くの日系移民が戦時中、差別や排除の対象となった。これは私がJASCに参加し、移民分科会の一員となるまで知らなかったことであった。彼らがどのような生活を強いられ、どのようにアメリカ社会で生き残って来たのか直接お話を伺う事が出来た。日本の教育はこれを教えないが、彼らが現在の日米関係の向上に寄与した事は明白である。差別を受けながらも勤勉に働き成功した日本人が沢山いる事は尊敬に値する事は勿論、あの時代により良い生活、即ちAmerican Dreamを夢見て渡米するのは勇気のいることであろう。同時に見習うべきは、アメリカ政府がこの過去を違憲とし、日系移民に対する賠償を比較的早く行った事であり、このような姿勢は日本政府に欠けていると思う。（原田有理子）

テリー・シマ氏、メリー・ムラカミ氏を囲んで

JASCアラムナイの川口さんによるご講演

若手現役外交官で第59回日米学生会議実行委員長の川口さんからのお話は、67回実行委員、特に実行委員長に選任された私にとり、大変刺激的なものとなった。この強固な日米関係を、なぜ、今、見直すのか。これは実行委員にとって永遠の課題である。しかし、その問いを熟慮し、メッセージを伝え続けることの重要性を、ご自身の体験を元にお話ししてくださった。また、どんなに理不尽なことや壁に直面したときも、「チーム」でなら乗り越えられるということ。そして、「リーダーに必要なこと」に対しては、「尊敬されること」という言葉を、頂いた。来年度の実行委員会を率いていく私にとり、チームの大切さを改めて学び、初心を忘れず、今後もそのことを心していきたいと感じた。(松居純平)

日米関係に関するパネル

日米学生会議を締めくくるにあたり、日米関係を再度振り返るために専門家によるパネルディスカッションをCapital Hillで開催した。招かれたのは国務省経済問題担当特別次官補や米国国家問題安全会議国際経済問題シニア・ディレクターを歴任し、現在ジョージワシントン大学教授のヘンリー・ナウ博士を始め、ザック・クーパー氏などの専門家が日米関係及びそれを取り巻く問題について言及していった。スマート・パワー分科会は本討論会の前にナウ博士と面談する時間を得て、彼の著作である「Conservative Internationalism」（自由主義の拡大、武力外交、国家主権の保全）を含めてナウ博士の考える外交策について聞くことができた。冷戦を振りかえり、国家主権を守ることや自由を拡大する上で、強い武力が無ければ交渉できなかったと主張。武力・外交・妥協を使いこなすことが外交の秘訣であり、今後の日本にも求められるものだと結論づけた。（藤井一衆）

日米関係パネリストを囲んで

ワシントンD.C.観光

それぞれの都市が違う顔を持つアメリカだが、ワシントンはどことなく品があり落ち着いた雰囲気を持った場所であった。ジョージタウン大学周辺は小さなかわいらしい店が軒を連ね、そんな街並みを有名なカップケーキを食べながらぶらぶらと散歩した。ナショナルパークにはスミソニアン博物館を初めとした多くの博物館、美術館が立ち並んでおり、建物の外観一つとっても様々な彫刻が施されておりおしゃれである。また、キング牧師による“I have a dream”の演説が行われた場所としても知られているこの地は一段と威厳を放っていた。古い建物ときれいな緑が広がる街並みの中をJASCerと和気藹々と歩いている時間の流れをついつい忘れてしまうほどであった。（奥谷紘子）

サイトコーディネーター後記

第66回日米学生会議はアメリカ合衆国の首都であるワシントンDCで閉会することとなった。最終サイトはこの第66回日米学生会議を締めくくる文字通り最後の数日間であり、ファイナルフォーラムという本会議を締めくくる重要な舞台があると同時に、来年の第67回会議実行委員選挙といったバトンタッチの場でもあった。

第66回ワシントンDCサイトでは、ファイナルフォーラム前日を終日分科会準備時間と通しリハーサルとする等ファイナルフォーラムに向けた準備期間を多く設けたり、第67回実行委員選挙の日程を例年より数日前倒しすることで次期実行委員が日本側、米国側全員そろった状態で議論出来る時間を多く設ける等、参加者が持てる力を全て発揮できるよう配慮した日程となった。

ファイナルフォーラムでは、それぞれの分

科会が本会議での議論の成果を堂々とプレゼンテーションし、他の学生からも活発に質問が飛び、日米代表団全員が連日の厳しいスケジュールによる疲れの色も見せず、生き生きしていたことが非常に印象的であった。翌日行われた第67回実行委員選挙では、立候補した学生一人ひとりが日米学生会議に掛ける熱い思いを語り、当選した学生、落選した学生、立候補しなかった学生全員が、来年の日米学生会議に向けて真剣に考える姿が見られ、参加者全員が80周年から81年目へと続いていく日米学生会議の歴史の重みを実感する機会となった。

同時に、サイト初日のボーク宅でのレセプション、ファイナルフォーラムでの元アメリカ合衆国国家情報長官のデニス・C・ブレア氏による基調講演、駐米日本大使館主催のファイナルレセプション、テリー・シマ氏、メアリー・ムラカミ氏による日系アメリカ人に関する講演、米国キャピトル訪問、第59回日米学生会議日本側実行委員長で駐米日本大使館で活躍されている川口耕一朗氏による講演、日米関係におけるパネルディスカッション等、日米学生会議ならではの「日米関係」を強く意識した、貴重なプログラムを多く実現する事が出来た。

本会議最終夜に行われた最後のリフレクションでは多くの参加者が本会議を通して経験した苦労や喜びを語り、その後も夜遅くまで共に時間を過ごし、日本側代表団が出発する朝にはいつまでも別れを惜しむ姿は、第66回日米学生会議が全ての参加者にとって有意義なものであり、成功のうちに幕を下ろした事を物語っていた。

ワシントンDCサイトでのすべてのプログラムを実現させる為にこの一年間遠く離れた米国で懸命に活動してくれた米国側サイトコーディネーターのPramodhとAyakaに敬意と感謝の意を表したい。

最後に、第66回日米学生会議ワシントンDCサイト運営にあたりご協力いただきました日米両国の全ての方々に、心から御礼申し上げます。誠に有難うございました。（兼子莉李那、木村優吾）

襷は第67回実行委員へと渡された

第5章
分科会活動

芸術とアイデンティティ
Art and Identity

■分科会メンバー

関口響*
鈴木良祐
東影喜子
光本愛理
森鞠乃
Jee Eun Choi*
Benjamin Sussman
Christina Cheadle
Jason Kim
Naomi Cormier
（＊分科会コーディネーター）

■分科会概要

古来より人類は芸術を通して自己表現を行ってきた。芸術の形態は絵画のみならず、音楽や建築、衣服や演劇、文学や映像と多岐に渡る。作品を創り上げる表現者が人である以上、作品には人々の思想や文化、宗教などが投影される。法隆寺建立の背景には当時大陸から伝わった仏教を信ずる者がおり、その宗教観は建築様式にも影響している。日本人の自然を愛する心は、織物や焼き物、屏風や絵画に花や鳥を描くことで表出され、「侘び寂び」の精神は龍安寺の庭園に枯山水を以て表現された。そして、「作品」は相互に影響し合い、また新たな「作品」を生む。アメリカの代表的な音楽であるブルースも、元を辿ると黒人霊歌と欧州から白人が持ち込んだ西洋音楽が融合する中で生まれた。当分科会では、芸術作品の背景にある文化的アイデンティティやその歴史を考察し、「芸術」と「人間」の関係を多角的な見地から再考することにより、芸術の社会的役割とその価値がいかなるものかを模索する。

■事前活動

春合宿

大きく二つ、(1) RT の雰囲気について (2) RT の議論の内容について振り返りたい。(1) RT の雰囲気が素晴らしかった。どの分科会も素敵なメンバーが集まっているが、個人的には、芸術分科会のメンバーを最も誇りに思う。それは実行委員の皆さんの見事な采配あってこそのものだと思う。専門的な知識が豊富なメンバー、リーダーシップを発揮してくれるメンバー、議論の組立がうまいメンバーといったように、それぞれの個性を生かせるメン

バー構成であった。なにより、いつもサム（関口）が冷静に見守ってくれいている安心感。これがとても大きかった。(2) 本題、議論の内容についてだと、それぞれ素晴らしいアイディアはあるものの共通の土壌を見つけるのに時間がかかったかな、と思う。ただこれらは、今後話し合いを重ねる上で十分明確化していけると考える。あとは芸術、アイデンティティという概念・言葉の定義には手こずってしまったが、これらも今後のMTGで共通見解を見出していけるだろう。（東影喜子）

定例ミーティング

私たちの分科会では隔週ごとに議題を決め、すべての分科会メンバーがその議題について事前にリサーチをし、当日一人ずつ5~10分ほどのプレゼンを行った。その後、ディスカッショントピックを決め、各自のプレゼン内容をもとに議論をするという形をとった。本会議が近くなると、英語でのディスカッションも行い、英語力向上にも努めた。忙しい毎日を過ごすなかでの毎週のプレゼン準備は分科会メンバーにとって決して簡単なものではなかった。しかし、この準備期間を通して芸術やアイデンティティに関する資料に触れる機会が多くあり、知識を深めることができたと同時に、フィールドトリップでお会いした方の話の基礎となる部分もメンバー同士で話し合うことができた点において、非常に有意義な時間になったと思う。お互いの意見を知ることで、彼らの考えやアイデンティティも理解することができて、さらに分科会としての団結力が深まったと感じた。（森鞠乃）

防衛大学校研修

防衛大学生とのディスカッションの際に、彼らの学ぶ意欲に刺激され、涙が出てしまったほどであった。私は、今まで難関大学に入り、よい職業を得て社会に貢献する、活躍するのが社会的に最もよいことだと思ってきた。しかし、私の描いていた社会貢献と彼らの社会貢献の形は全く異なり、また勉強する意味も想像以上に異なっていた。自分の価値観をがらっと変える、本当に良い経験となった。（光本愛理）

防衛大学校の学生と共に

文部科学省

大臣官房国際課長　今里譲様

今回、実際に文化の発信という仕事を行っている文科省職員の方にお話を伺うことができたことは、講演会や書籍などから得た理論的な知識を、現場で働く方の視点から「芸術」「アイデンティティ」という抽象的なトピックを具体化させて分析できたことにより、分科会での議論をさらに深める上でとても有意義な体験であった。

今里様からのお話で印象に残ったのは、「文化を発信することの意義について」である。相互理解を進め、相手と違う考えをもってい

ることを理解し共存することで文化の多様性が生まれるのだという今里様の考えは日米学生会議の存在意義を再認識するとともに、私達の分科会において、アイデンティティというだれもが異なる性質を探るうえで、人間の「違い」を理解することは基礎となる考えであると実感し、今後議論を進めるうえで胸にとどめておくべき言葉であると思った。その他にも、日米の芸術教育や文化の多様性条約、文化保護の重要性など、大変参考になるお話をいただいた。（森鞠乃）

独立行政法人　日本芸術文化振興会
理事　関裕行様

概要：文部科学省で文化財部長を務められた後、芸術文化振興会の理事としてご活躍の、関裕行様にお話を伺った。独立行政法人という立場から行う、古典芸能の保存・公開、伝承者の養成、公演のための調査研究という三位一体の文化保護活動について学んだ。感想：Q なぜ国が文化芸術を保護するのか、その意義とは？A ①予算も体制も整っている、国家側だからこそできることがあるから②豊かな人間性の育成や、世界平和の礎となるから③フランスに代表される文化保護の考え方に、日本も倣うべきだし、近いと思うから。といった返答を頂いた。採算や収益に必ずしも囚われない保護は、国家だからこそできるものだと思う。伝統芸能の側も存続の努力は続けなければならないが、保護の手がなければ限界がある。国家が固有の文化芸術を保護することは、自国の高い文化水準を他国に示すことにも繋がり、最終的には国益につながると、私は考える。（東影喜子）

関理事と分科会メンバー

浮世絵木版画彫摺技術保存協会
彫師　石井寅男様

東京の浅草近辺に住む浮世絵保存協会理事の石井さんのアパートを訪ねた。20 年以上改築していない木造建築の部屋には、様々な版画が壁に飾られていたり、作業場の机に置いてあったりと、普段見ることのできない光景がまず私を出迎えてくれた。

現在、利便性を追い求める日本においては、絵や資料を複製するならばコピー機を利用することが当然となっている。利便性を追い求める社会の中で、自分の手で版画を掘り、紙に刷り、複製するという手間のかかる作業を20 年以上も生業として行ってきた石井さんは、まさに利益よりも手でモノを作り出すための技を追求する職人であった。残念ながら、石井さんのような職人は関東では 10 名ほどしかいないそうで、版画に用いる材料も質が変わってきている。世の中が変化し、浮世絵の現状も変化している中で、時間をかけて繊細な版画を作り上げていく日本ならではの伝統文化の価値を見直すことができ、貴重な経験をさせていただいた。（森鞠乃）

独立行政法人 国際交流基金

国際交流基金の訪問で得たことは計り知れない。大きく二つに分類すると、アイデンティティと芸術の関わりについて、またアートプロジェクトの実態について、ということになると思う。はじめに、私たちは職員の佐藤様からインドにおけるカメラを使った若者との交流のお話を伺った。彼らが切り取ってきた写真の多くは、日頃大切にしている家族や自然の姿を映しており、私はそこに彼らのアイデンティティが現れていることに感動した。「言語化されていない感情、普段意識の底にあるアイデンティティを、芸術を通して顕在化することができる。」という佐藤様の言葉が忘れられない。また職員の原様からは被災地におけるアートプロジェクトの事例を拝聴し、アートがアイデンティティや自信を取り戻すきっかけとなりうるということを学んだ。同時にアートプロジェクトを成功させる道のりの険しさについても考えさせられ、今後のアートについての議論が浮いたものにならないよう反省した機会でもあった。（東影喜子）

立教大学
現代心理学部映像身体学科　松原大輔様

立教大学現代心理学部映像身体学科に所属する松原大輔さんにお話を伺った。松原さんは大学で身体芸術を学び、その傍らサークル活動として病院や学校を訪問し、クラウン（道化師）として人々を楽しませている。

私が松原さんのお話を伺う中で感じたことは主に二つある。一つ目は、クラウンのような身体芸術はお年寄りや子供、障碍を持つ方など幅広い層の人々を楽しませる素地を持っているということである。複雑な芸術を理解することが難しい人々でも、クラウンのようなわかりやすいエンターテイメントであれば楽しむことが可能であり、より多くの人に楽しみを届けるという意味で身体芸術の可能性を感じた。

二つ目は、日本とヨーロッパにおける芸術に対する意識の違いである。ヨーロッパでは大道芸やストリートアートが盛んであり、それに対してお金を払う人々も多い。対して日本ではストリートアートにお金を払う人は少ない。この違いは寄付文化の有無という要因が考えられるが、一番大きな要因は芸術に対しての価値認識の違いではないだろうか。日本では皆が認めるものは素晴らしいと認識されており、有名なオーケストラがやってきたら高いお金を払ってでも見に行く。一方ヨーロッパでは、自分が素晴らしいと思ったものは素晴らしいのであり、それに対してお金を払う。日本で芸術、特にストリート芸術が活発にならないのは、日本人の他人の目を気にする文化が強く根ざしているように感じた。（鈴木良祐）

東京藝術大学教授
音楽部音楽環境創造科　熊倉純子教授

アートプロジェクトの第一人者である、東京藝術大学音楽環境創造科教授の熊倉純子先生からお話を伺った。アートプロジェクトとはアートやアートに関わるイベントを用いて地域活性化などに貢献することである。

熊倉先生のお話を伺う中で、アートプロジェクトが日本社会において果たす役割と、その可能性の大きさを知ることができた。アー

トプロジェクトは地域活性化に貢献できるだけではなく、日本のアートシーンにも貢献できる可能性がある。大多数の日本人にとって、アートという言葉を聞いたときにまず思い浮かべるものは、絵画や彫刻作品であると思う。それはホワイトキューブと呼ばれる、美術館の真っ白な壁に飾られたアート。それはとても格式が高く感じられるかもしれない。この展示方法は、自然を恐れ隔絶しようとしてきた西洋社会で生まれたもので、日本人の自然と調和する感性とそぐわない可能性がある。

アートプロジェクトにおいて芸術はむしろ街の中に存在する。その展示形態は様々であるが、民家を改造してアートにしたり、工場そのものをアートに作り変えたりと、アートプロジェクトにおいては日常にアートを組み込むことができる。この日常とアートという形態が日本人のアートへの関心を掻き立て、アートが地域社会に貢献できるのではないだろうか。（鈴木良祐）

東京財団 福島安紀子様

国際関係論の専門でいらっしゃる福島様には、今回、文化外交を通したアートの意義についてのお話を伺うことができた。共感するものばかりであった福島様のお話のなかで、対立の壁を越えた人物交流の実現という、アートだからこそ可能になる平和構築という点は特に印象深い話であった。ユーゴスラビアやイスラム地域で民族が入り混じったオーケストラが結成され、「民族」というアイデンティティではなく、「音楽家」というアイデンティティを通して一つの音楽を作り上げることができたのはその一例である。たとえ対立している民族であったとしても、一人のアーティストとして相手のアイデンティティを受け入れ理解しようとする気持ちは、音楽という一つの文化活動を通して生まれてきたものである。もちろん直接的には紛争解決につながることは難しいかもしれないが、相手を知ろうという気持ちが少しでも湧いてくるのは、アートが社会に果たす役割の一つであると実感した。（鈴木良祐）

直前合宿

RT ペーパー、定例 MTG、FT で「芸術とアイデンティティ」に関して、様々なトピックを議論してきたが、その成果を 10 分でまとめて発表するのは非常に困難であった。しかし、春合宿で定めた「芸術の社会的役割を探る」という目標に戻って考えることで、芸術はなくても生きていけるものかもしれないが、実はアイデンティティと相互作用をなす社会生活の中で重要な役割をなしていると再認識できた。また、3 カ月の準備を振り返ることで、大学・学部・バックグラウンドの異なる 5 人がそれぞれの能力や経験を活かし協力したからこそ、多角的な視点から学びを深めることができたのだと実感した。同時に、FT で色々な事を教えてくださった方々への感謝の気持ちでいっぱいになった。ここで改めて、FT でお世話になった方々に御礼申し上げたい。（光本愛理）

■本会議中の活動

第1サイト　デモイン

八月二日から六日の四日間、私たちはアイオワ州に滞在した。宿泊先はグリネルカレッ

ジ。到着時のアメリカ側の熱い歓迎に胸を高鳴らせながら、本会議のスタートを切った。グリネルカレッジでは市長やアイオワ州立大学のプロフェッサーの講演を拝聴。アメリカのハートランドと呼ばれ農業経済の中心地でもあるアイオワ州だが、なかなか訪れる機会にも恵まれないのが現実だ。講演を通してアイオワへの理解を深めたところで、翌日は先住民族マスクワキ族の集落へ。芸術とアイデンティティ分科会として、マイノリティアイデンティティについて深く考えさせられた。その後世界食糧賞ツアーや農業フォーラムでの研修を終え、第一サイトはあっという間に幕を閉じる。また、このサイトでのもう一つの収穫はアメデリとの交流だった。早速意気投合したアメデリとのしばしの別れを惜しみながら、一路空港へ。こうして一ヶ月の熱い夏が本格的に始動した。（東影喜子）

デモイン　分科会メンバーと共に

第2サイト　サンフランシスコ

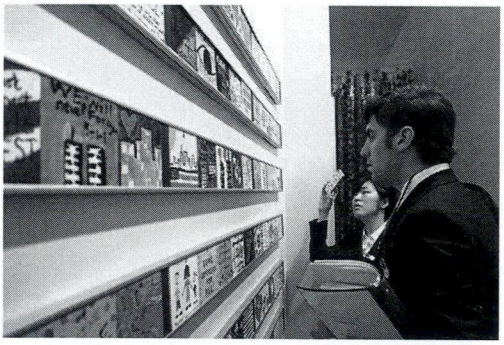
多様性の街、サンフランシスコは芸術とアイデンティティを議論するにはうってつけの場所であった。多様な文化が混在するこの街では、自己表現の自由が認められ、その表象としてのアートが数多く見られた。歩いているだけで様々なタイプのストリートパフォーマーに出会い、壁に描かれたグラフィックアートの数々は、建物も芸術の一部であることを再認識させてくれた。前のサイトでは、皆の興味・関心が様々で議論の題材選びに苦戦していたが、サンフランシスコ・アジア美術館を訪れることで議論の方向性を見出すことができた。そこで出会ったある絵画を通して、日米両国のジェンダーに関する認識の違いを発見した。一見作者の個性に見える作風は、その芸術の背景にある時代的、地理的、文化的要因に大きく左右されているという点を共有できたことは大きな前進であり、芸術が社会を表象するものとして、深く人間の生活と関わっているということが実感でき、その後の議論を進める上での大前提となった。（鈴木良祐）

第3サイト　ニューヨーク

NY は歩いている人のファッション、Broadway の看板、ストリートパフォーマーなど、日常生活に「アート」が溶け込んだ場所であった。9.11 メモリアルを訪れた際には、日本から送られた平和を願う千羽鶴や噴水のモニュメントを見ることで、「芸術」のなす役割についてアメデリと意見を交わした。また、9.11 Memorial Museum という存在自体が「アイデンティティ」の中で重要なナショナリズムを掻き立てているか否かについても議論を行い、すぐに互いの考えを問うアメリカの文化に驚いた。

一方で、ファイナルフォーラムへの焦りから、第3サイトで初めて RT 内で意見が対立してしまった。そんな中、NY のハーレム等を中

心に暴力と社会、芸術の関係を研究なさっている多摩美術大学の中村教授からお話を伺う機会に恵まれた。中村教授は沢山のことを教えてくださったが、そもそも日米の違いを発見した後で、その違いにどのように向き合っていくべきなのか、という重要な問いも投げかけてくだった。見落としていた重要課題に気付いた私たちは、それを含めて改めてディスカッションし、またメンバー1人1人を理解しようと努力することで意見の衝突を乗り越えることができた。最終的に、私達はAsian Art Museumで見つけた森村泰昌氏の絵画を使用し、近年のジェンダーに対する考えの変化、日米のジェンダーの違いを探ることで、日米の違いにどのように向き合うかに繋げて考えることとした。（光本愛理）



ワールドトレードセンターを描いた絵葉書を前に

第4サイト　ワシントンD.C.

第4サイトの初日は、次の日に開催される最終発表に向けて一日かけて準備をする時間となった。第3サイトで「ジェンダーとセクシュアリティ」について話し合った内容をプレゼン用にまとめるという作業を何回も練習を重ねながら行ったことは大変であったと同時に本番への意欲を高めることにもつながったと思う。特に日本とアメリカの理想の女性像についての比較の明確化や、このテーマをなぜJASCで行うのかという結論部分を煮詰め、聞き手に伝わりやすいまとめ方や話し方を模索した。また、プレゼンは視覚的にインパクトのあるものにしたいという考えのもと、「Prezi」と呼ばれるプレゼンソフトを使用し、一分間の動画も作成するなど発表方法にも工夫をした。こうして臨んだ三週間の議論の集大成ともいえるファイナルフォーラムは無事成功し、本会議最後の夜には分科会メンバー一人一人の笑顔を見渡し、残り十数時間と迫る別れを惜しんで泣きながら円陣を組んだことは忘れられない思い出の一つとなった。（森鞠乃）

ファイナルフォーラム

「芸術とアイデンティティ」分科会は発表順番が最初であったため、まだ会場の空気が十分に温まっていない中でスピーチをはじめることとなった。そのような緊張した空気に圧され、動揺を隠しきれないまま私の順番がまわってきてしまった。しかし、笑顔を忘れないでいようという分科会メンバーとの約束をふと思い出し、すぐに切り替え、短い持ち時間の中でも私達が感じたテーマへの熱い思いを届けることができた。特に私の担当箇所は日本の絵画からみる理想の日本人女性という内容であったために、日本画について話す機会を得たことは、日本の文化をアメリカ側に少しでも知ってもらうきっかけとなり日本側参加者として貢献できた部分ではないかと思う。プレゼン終了後には大きな達成感とメンバーに対する感謝の気持ちが私の胸を熱くさせた。大きな困難を乗り越えたからこそ湧

き上がってきた感情であったのだと思う。
（森鞠乃）

■分科会感想

鈴木良祐

相互理解。その言葉が指す意味は日米学生会議に参加する前にイメージしていたものとは大きく異なる。相手の考えを理解し、同調すること。それが相互理解の真の意味だと考えていた。しかしながら芸術とアイデンティティ分科会で直面したのは、いくら話し合っても埋まらないお互いの根本的な考え方の違いであった。そこで至った結論は、相互理解とは同調ではない。お互いが異なるということを認識し、その違いの存在を認めるということである。価値観や意見が異なっていても、そこに真の相互理解があれば友情関係は生まれる、そう学んだ分科会活動であった。個性的なメンバーが集まった当分科会は、第一サイトから考え方の違いに直面した。ある者は日本の茶道に興味を持ち、ある者はブレイクダンス、またある者は外交政策など、お互いの興味関心は異なっていた。私は皆の満足度を高めるため方向性を決めることなく、それぞれのトピックを自由に話し合うべきだと主張した。しかし、アメリカ人学生の一人は発表に向けて取捨選択をし、ある程度トピックは切り捨てるべきだと主張。この考え方の溝が埋まらぬまま時間ばかりがすぎ、第三サイト ニューヨークでお互いの不満が爆発。お互いの意見が異なる理由を正直に話し合った。そこでやっと気づいたことは、私が友情関係をつくるために会議に参加したのに対し、アメデリの一人の女性は、芸術というトピックを追究するために会議に参加したという事実である。日米学生会議の主眼は友情関係にあると思っていた私にとって、彼女の発言は思いもよらぬものであった。正直に気持ちを打ち明けることの大切さを学んだ瞬間である。今でも自分の主張が間違っていたとは思わない。しかし今までの私と異なることは、違いを認識し認めているということ。彼女には彼女の考えがあり、そう考える理由がある。全く異なる考えを持つがそこには強い友情が存在する。これこそ真の相互理解ではないだろうか。

東影喜子

芸術とアイデンティティ分科会はその性質上、政策提言や問題解決、といった明確な目標を立てにくい立場にありました。すぐに導ける答えや価値とは異なるものを目指したいという思いの一方で、芸術が果たす社会的役割を可視化し、他分野のエキスパートにも強く訴えたいという葛藤が、タイムリミットとの戦いをより激しいものにしました。しかし、芸術とは何か、アイデンティティとは何かといった問いに、真正面から立ち向かったこと自体が、メンバー全員にとって貴重な体験になったのではないかと思います。

そんな中、分科会の大きなターニングポイントとなったのは森村泰昌の作品との出会いでした。サンフランシスコのアジアンアートミュージアムに展示されているこの作品は『肖像（双子）』と題されたポートレートで、私たちがトランスジェンダーと向き合う契機となりました。ここにおいて、私たちは芸術の力を確信しました。一つの作品に啓発され、

新たな視点・発想を持つこと。個人単位での感動が押し広げられていったとき、芸術は社会に新たな視点を生み出すことに成功するのではないか。社会が人の集合体である限り、人によって生み出される芸術は社会を反映し、社会に声を上げ、また癒し、新たな地平を示しながら発展していくのではないでしょうか。

ファイナルフォーラムでは森村の作品を中心に性に焦点をあて、芸術とアイデンティティの双方向での影響を明らかにしました。日米という異なるアイデンティティの交差点で、芸術の可能性を真剣に議論した一ヶ月。この時間がそれぞれの胸に消えぬ火となって残ることが、当分科会の最大の収穫の一つであると思います。

最後に当分科会にご協力いただいた全ての方に感謝の気持ちを表して、分科会感想文としたいと思います。

光本愛理

法学部で勉強している私にとって、「芸術とアイデンティティ」という分科会は困難であった。この分科会に入る前まで、どちらかというと文化や芸術には興味が全くなく、むしろあまり意味のないものだと思っていたほどだからである。しかし、分科会でディスカッションを重ねるうちに、芸術が歴史的・世界的になす役割について理解を深め、またアイデンティティの観点から日本人とアメリカ人の違いを探り、日米学生会議の目的である相互理科についてもよく考えることができたのではないかと感じている。

一方で、JASCの醍醐味のひとつは、二カ国間の学生が大学や学部を超えて議論することにあるので、法学部で得た知識を活かし、分科会の議論に貢献する事も常に意識した。具体的には、法律の観点から芸術の著作権をどのように守っていくべきか、またCool Japanといった日本の文化外交についてよく調べることで、グループに知識を共有した。その過程で確信したことは、文化はソフト面に加えて、経済といったハード面でも大きな役割をなし、特に日本は今後、その文化を世界に発信していくことが求められているということである。JASCを始めて以来、日本という国について真剣に考えたが、そこで直面したのは日本の国力低下という問題であった。その低下は、経済や人口といった実際のデータからも明らかであるが、JASCのアメリカでの知名度が下がっているという事実からも肌で実感した。中国やインドを始めとするアジアの国々のパワーが強まっている現在、資源のない日本は今後どのような道を歩むべきなのだろうか。その1つの答えと成りうるのが、日本の文化、芸術なのではないかと考える。2020年の東京オリンピックも視野に入れながら、日本の文化を世界に発信していくことこそが、経済的効果も生み出し、また他国からの日本文化への人気によるプレゼンスの回復に繋がっていくと思う。確かに、文化のみで様々な問題を解決することは不可能である。しかし、JASCのアメリカ側参加者が日本に興味を持ったきっかけの多くはアニメといった日本の文化であり、改めて文化や芸術の持つパワーを実感した。今後も自国の文化にしっかりと向き合っていきたい。

森鞠乃

芸術のことを英語で話し合うなんて楽しそう。分科会の紹介文を一読したときに率直に感じたことであった。そんな胸の高鳴りを感じたことをきっかけに私は日米学生会議に応募した。それから約三か月後に届いた合格通知のメールに、この分科会の一員として参加が決定したと記載された文面を読んだときの興奮を今でもよく覚えている。こうして始まった本会議までの準備期間は、想像以上に充実していた日々であった。「芸術」や「アイデンティティ」に関する資料や本、自分が聴いた講演会の内容をメンバー内で共有することで、お互いのメンバーの知的好奇心を刺激し合い、分科会テーマへの関心意欲を高めていった。またフィールドトリップも多く行い、専門家からの意見を聞くことで知識を深めると同時に、大学生なりの意見を提示し疑問をぶつけるという、学ぶ積極性を追求する非常に価値のある経験となった。

本会議が始まってからは、語学力不足に落ち込んだり意見の相違による衝突など困難な時を過ごしたりと、常に前向きになれず苦しむ自分もいた。しかし、興味分野が多様であったからこそ私達の分科会は個性に溢れユーモアにも富んでおり、メンバーのおかげで多くの楽しい時間を過ごすことができたのも事実である。決して平坦ではない道を戸惑いながらも根気強く歩き続けたことで、相手と向き合い、考えを尊重することの難しさと重要性を強く感じた。

この分科会に参加し、アカデミックな点において芸術の社会的役割やアイデンティティの構成や複合性など様々な知識を深めることができたと同時に、学ぶ積極性という自らの学びに対する姿勢への成長も感じ、「違いを知る」ことの大切さも強く実感した。この貴重な経験は実行委員やアラムナイ、フィールドトリップを快く承諾してくださった方々、そしていつもサポートし、分科会について共に真剣に考えたメンバーがいたからこそ実現できたものである。感謝の気持ちを胸に、自分の可能性を信じてこれからも歩んでいきたい。

■分科会総括

関口響

当分科会「芸術とアイデンティティ」設立の背景には、私の個人的な問題意識があった。当会議が芸術の価値を軽んじてはないだろうか、という問題意識である。日米学生会議の理念が「日米の平和を通した世界平和」である以上、平和を目指すための実効的な手段としての経済・軍事力といったハード面を学生が議論することにはもちろん大きな意義があると思う。実際に、日米安全保障問題を扱う分科会は過去数十年と毎年設立されている。しかし、平和への手段として、芸術が果たし得る役割はないと言えるのだろうか。私は、人間個人レベルでの相互理解から平和を目指していくという、ソフトなアプローチも重要だと考え、個々人のアイデンティティが反映される創作物、つまり「芸術」を通して相互理解を図ることも平和に繋がるのではないかと信じ、当分科会の設立に至った。

春合宿にて、日本側分科会員たちは初めて顔を合わせた。大学・学年・専攻も異なる者同士で初めは緊張の色を残しつつも、ひとたび議論を始めると、各々は自身が持つ熱い想

いを言葉に変え積極的に意見交換を行っていった。議論において、リーダーシップをとる者やアイディア・知識を共有する者など、分科会員が自然と役割分担を行っている様子を傍目から見守りながら、「このメンバーなら4ヶ月間協力して頑張れるだろう」と自然と笑みがこぼれた記憶がある。結果的な分科会の指針は、「芸術の社会的価値と役割を模索する」ことに帰結。この指針の基に、春合宿以降の事前準備活動では毎週の定例ディスカッションとフィールドトリップを行っていった。分科会員の関心軸は伝統芸術や俳句、文化外交など多岐に渡ったが、だからこそお互いの視点を尊重し、議論の切り口として活用していった。

本会議は、事前準備とは比にならないほど濃密であった。日本側分科会員は米国という環境変化をむしろ楽しんでいる様子で、米国側分科会員と毎日の議論を積極的に行っていた。日米両国の学生が持つアイデンティティ観の意見交換や、広い意味での文化芸術の可能性に関して議論をした。最終的にファイナルフォーラムでは、トランスジェンダーアイデンティティが投影された絵画を事例に、芸術を通して相互理解を行うことの可能性を発表した。

一夏を終え、分科会員に感想を聞くと「お互いの違いを認識して、それを受け入れられるようになった。」という答えが返ってきた。非常にシンプルな学びだが、それは長期間真摯に他者と向き合い、衝突し、それでもなお歩み寄った経験がなければ得られるものではない。分科会設立の背景に立ち返るとすれば、こうした個人レベルでの他者理解の姿勢、相互理解を目指していくことが平和に通じていくという考えが基であったので、その意味では、当分科会が達成すべき意義は果たせたのではないかと感じる。

分科会員一人一人が異なる彩を持っていたからこそ、当分科会は美しい一枚画を描けたように感じる。学生時代に描いたその画は、色褪せることなく心に宿り続けるだろう。

当分科会にご協力いただいた全ての皆様に、心よりの感謝を申し上げ、総括とさせていただきます。

ワシントン D.C. にて別れ際の一枚

サンフランシスコにて書道体験

環境問題における国家、企業、市民の役割

Environmental Initiatives for a Sustainable Future

■分科会メンバー

兼子莉李那*
朝倉咲希
池田耕一
永澤拓也
Quyen Nguyen*
Ken Covey
Anna Miyajima
Alicia (Qinwen) Jiang
Masaki Yamashita
（*は分科会リーダー）

■分科会概要

現代社会には様々な環境問題が存在する。1997 年に京都議定書が採択され、各国は温暖化防止に取組んできた。日本では近年、環境に優しい車や家電製品が開発され、政府は減税や補助金によってそれを推奨した。街中では廃棄時に有害となるレジ袋の使用を削減するためエコバッグ利用者に特典を設ける店も増えている。このように市民は政府や企業の取組に誘発され、エコ活動に取組むようになった。しかし温暖化の進行を抑制できないまま事態は深刻さを増し、頻発する異常気象は各地に被害をもたらし、海面上昇により水没が予想される国や地域もある。温暖化を防止するためには、これまでの国際的枠組みの水準を見直し新たな数値目標を導入するなど、政府、企業、市民が一丸となってより効果的な対策を講じる必要がある。当分科会では温暖化に限らず自然破壊や放射能汚染などの諸問題も考察し、これらの問題を解決するため、日米両国の政府、企業、市民がどのような役割を果たすべきか模索する。

■事前活動

春合宿

春合宿でのRTを思い返すと二つの感情が浮かぶ。一つめは単純に「楽しかった」ということだ。自己紹介に始まり、日常的な話から将来の夢まで何でも話した。自分が興味を持っていることを一言話せば、みんなが関連する情報や意見をどんどん返してくれるという状況は非常に刺激的で濃いものであった。二つめは自分にとって未知な分野を「苦い」と感じたことだ。環境問題の中であまり興味を持ってこなかった分野についてこれから調べ

ていくことに、正直最初は気が進まなかった。今まで、「つまんなそう」となんとなくの印象で避け続けてきたことだからだ。しかし、みんなと話しているうちに、自分の興味をより深く理解するためにもこれらは必要不可欠だと理解した。今、春合宿を終えて自分にとっての新たな分野を調べている最中である。思っていたよりも数百倍面白い。これから、「苦い」と感じた未知の分野を学ぶことを「楽しい」に変えていければいいと思う。（朝倉咲希）

春合宿解散前の様子

定例ミーティング

環境分科会に関しては、定例ミーティングの実施とそれを通しての本会議に向けた準備は上手くいったとは言い難い。私がそう断定する理由としては、まず一つ目にミーティングの頻度が圧倒的に少なかったこと。定期的にミーティングをし始めたのはテストの近づく七月に入ってからであり、情報のシェアや本会議における方向性の決定を怠ったことは否定できない。二つ目に、春合宿の時点から、個人作業に依る面が大きすぎたこと。お互いにはっきりとタスクを振り分けて、その結果のみをシェアする形にしたことで逆にチーム内の団結を削いでしまった。確かに三年・三年・四年というチーム編成で、それぞれが留学、就活、院試などで忙しかった。皆に明確な目標があり、それに向かって一意専心する中で、日米学生会議に集中する余裕はなかったろう。しかしながら、その中でも空き時間をぬってミーティングを行うことはできたはずであり、全力を尽くしたとは言えないと私は考えている。（池田耕一）

防衛大学校研修

環境問題にもともと関心のある学生とない学生どちらもいたため、逆に新鮮な意見をたくさん得られて有意義であった。JASC側は環境問題に関してかなり調べているため、一般感覚からの環境問題というものが見えにくくなっていることに間接的に気付いた。分科会の中で一つ出てきている環境教育を深めるためには、一般感覚でとらえる環境問題に関する関心は重要であるので、それに気付いたことは重要となる。マチコンをゴミコンにすればいいのでは？という考え（ゴミ拾いする出会いの場）はパッと出てきた意見ではあったが、JASC側からは出ない考え方だろう。環境問題という少し専門的な内容だったからか、調べてきているJASC側が議論を進め、話し続け、防衛大生の意見が出にくくなっていたように思ったので、そこが反省点である。最初から、入り込んだ複雑な問題よりも、とっつきやすい問題で議論するなどにしたほうがよかった。（永澤拓也）

千葉大学植物工場訪問

RTメンバーの一人が所属する千葉大学内の

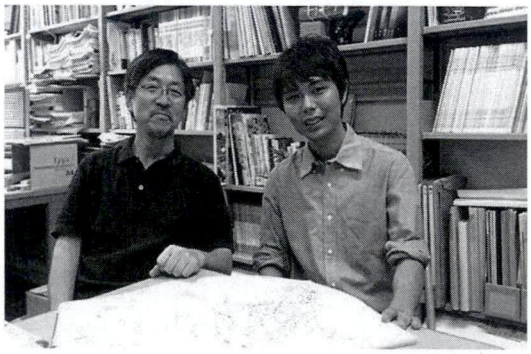
植物工場を訪問した。この工場では太陽光や水、土地をより効率的に使えるよう植物の配置の工夫やデータ管理、貯水槽の設置、肥料の再利用などを行っていた。私は普段の生活で農業を目にすることがないので、実際にその最先端の技術・工夫を見られたことは非常に新鮮であった。植物工場の運営面としては、工場内をいくつかのエリアに分類し、それぞれのエリアで別々の企業が農場を管理していたことが印象に残っている。これにより展示会のように、企業間の間に“競争状態”が保たれており、外部の人への宣伝としても役立っているという。以前から、環境問題の解決策としての企業の役割は大きいと考えていたので、今回環境問題に取り組む企業の活躍を感じることが出来たことは非常に有意義であった。

お土産に頂いた工場内で育てたというトマトが非常に甘く美味しかった。環境への配慮と商品としての質の高さとを両立している良い例であると感じた。今回頂いた貴重なFTの機会をアメリカ側の参加者にも伝えていきたい。（朝倉咲希）

千葉大学植物工場にて

立教大学 大山利男准教授訪問

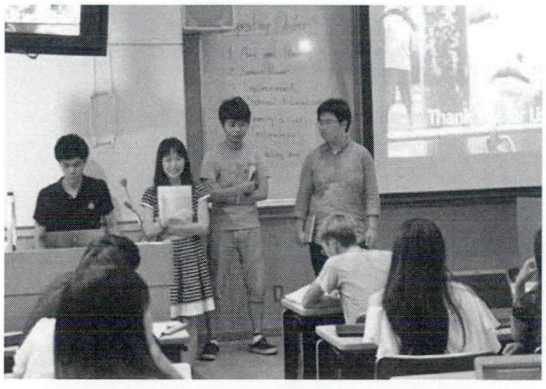
千葉大学での「環境保全型農業の展望」の特別講義に参加したきっかけから、大山先生に直接お話しを伺う機会を得た。有機農業研究を中心にいかにして環境配慮型の農業が発展し、導入が図られているかアメリカ・スイスを中心に研究所や大学で教えていらっしゃった先生であり、今回の訪問でも、日本と比較した欧米諸国の環境政策の違いや特徴についてお聞きすることができた。先生は日米学生会議についてはご存じで、環境問題のみならず、近年の大学生とグローバリズムの中で学生会議のもたらす意義とはなにかといった内容まで様々なご意見をいただいた。その中で、「一般論ではなんとでも言える。具体性が必要である」という言葉はとても共感した。メンバー間でも、環境問題という広過ぎるテーマの中で学生である私達が議論を行う必要性はなにか？を苦慮していた背景がある。テーマが広いからこそ、それぞれの経験や志向、メジャーを元に具体的な議論を展開し、議論に具体性を持たす必要がある、その際日本の政策や事例などを知っておく必要がある、そのような「気づき」を得た大事なＦＴとなった。（永澤拓也）



大山利男先生と

直前合宿

直前合宿の初日にメンバーで顔を合わせた際、いよいよ本会議が始まると期待に満ちた会話をしたことを今でも覚えている。直前合宿最後でのプレゼンテーションでは環境教育のあり方、原子力発電を中心としたエネルギー問題、水俣病を始めとする公害問題に関して、議論してきた内容についての発表を行った。また、RT での活動内容や本会議で何をなしたいのかについても発表をした。英語である程度の発表を行えたことは日本側のメンバーにとって多少の自信・達成感となった。また、挙がっていたどのテーマも面白く感じたため、本会議が非常に楽しみになった。しかし一方で質疑応答の際などには、環境問題への理解や英語力の不足を感じたのも事実である。これからも環境問題について考えを深める必要があることや、もっと積極的に議論に参加する姿勢が必要であると改めてメンバーで話し合った。反省点も多かったが、総じて直前合宿は本会議に向けた士気を高めるよい場となった。（朝倉咲希）



直前合宿で発表するデリ

■本会議中の活動

<u>第1サイト デモイン</u>

第一サイトのアイオワは、全体として日本代表とアメリカ代表間のアイスブレイクの時期であったといえよう。そして農業に関するテーマが多かったことから、環境分科会としては最も自分たちのテーマに関連する講演が多い時期であった。特に私の印象に残ったのは、メスクワキセトルメントにおける有機農業コミュニティである。以前から、農業や漁業などの一次産業に携わることが環境意識の向上につながると考えていた私は、メスクワキを訪ねて更にその思いを強くした。その後に訪ねた World Food Prize では、講義をしてくださった方に、「自然との触れ合いと環境教育についての関連性」について質問した。その回答からも、アメリカの各地で行われているであろう多種多様な活動が、直接「環境保護」を謳っていなくとも役立ちうることが支持された。私の RT ペーパーの表題は「環境教育と地域活性化」であった。アイオワはまさにその関心に沿うものであり、個人としても分科会としても実り多いものであったと思う。（池田耕一）

<u>第2サイト サンフランシスコ</u>

サンフランシスコサイトでは、JASC のプログラム内でも扱った移民問題や LGBTQ フォーラムなど、広い意味での「多様性」について分科会内でも更に議論をし、日頃日本にいては触れることの少ないあらゆる多様性を様々なバックグラウンドを持つアメリカ側参加者と意見交換を行うことができたのは、とても興味深く、私自身の多様性への理解を更に深める重要なきっかけとなった。また、サ

ンフランシスコ滞在の後半では、ファイナルフォーラムという大きなゴールを見据えてどのように分科会を進めていくかについてとことん話し合ったことをよく覚えている。二つ目のサイトであったことからもアメリカ側参加者ともかなり打ち解けはじめ、そもそもJASCを何故知り、応募したのか、なども話すようになり、心から正直になって会話をすることで分科会での議論の質を高めていけたのはこのサイトだったのではないだろうかと思う。（永澤拓也）

第3サイト ニューヨーク

第三サイトでのRT活動はファイナルフォーラムに向けた準備であった。まず、私たちは聴く人たちに何を伝えたいのかということをみんなで話し合った。限られた発表の時間を意識することで更に、「環境問題に全世界で取り組むためには、はじめの一歩としてひとりひとりの行動が大事である」というメッセージは必ず伝えたいとグループ全員が深く感じることが出来た。その後、発表の場で誰が何を話すのかを決め、それぞれ作業を進めた。ファイナルフォーラムが近づいてくると、焦りや不安を感じながら深夜遅くまで作業をするメンバーの姿が増えた。しかし、これまでRTで多くの時間を過ごしてきたため、互いの性格や考えを尊重し合いながら、自然と助け合うことが出来た。今思い返すと、第三サイトは私たちのRTにとって精神的にも体力的にも一番負担の多いサイトであった。しかし、だからこそこのサイトを乗り越えたことで、私たちRTの友情は深くなったと感じている。（朝倉咲希）

第4サイト ワシントンD.C.

第四サイトのワシントンD.C.は、これまでの議論や講演で得たものをまとめ、ファイナルフォーラムで発表するための場であった。私たち環境分科会は、第一サイトから何をテーマにプレゼンテーションを行うかを予め決めていたので、紆余曲折あったとはいえ、比較的スムーズにリハーサルに望むことができたと思う。しかしながら、リハーサルをしてみて、自分たちが抱いた感想。それは、一言でいうと「つまらない」であった。言いたいことを伝えきれていない、肝心のプランも曖昧すぎて具体性がつかめない、本当に退屈するものであった。故に私たちは大きな方針変更を本番前日に行った。ゼロから新しいアイデアを組み立てるのではなく、既存の環境教育プログラムを紹介する。それによって、具体的なイメージをオーディエンスに持たせることができた。フォーラム後の数日はあっという間に過ぎ、気が付くと別れの時がきていた。会議全体を通して、環境RTは仲のいい和やかな分科会であった。最後は皆気宇なく、自分の力を出し切れたのではないかと思う。（池田耕一）

ファイナルフォーラム

10分間プラス質疑応答、プログラム後半は毎日夜遅くまで準備をしていた、ファイナルフォーラムであった。とても10分では伝えきれない、というのが純粋な葛藤であり、不満でもあった。ただその中でなにをいかにして伝えるか、ファイナルフォーラムそのものの重要性とは何か、そういったことまで議論し

て作り上げた。個人的には、担当していたパートに対して予想外に質問が集まり、これまでになく焦った。オフィシャルな場での英語での質疑応答という慣れない環境に声が震えたが、伝えるべき点はきちんと伝え応答できたように思う。それも万が一質問が来てもいいように同じパート担当だったメンバーと丁寧に予想できる質問とその回答などと準備していたおかげだった。同時に、質問を答える上で中核となった考えは春合宿で議論を通して得た考えだったことからも、私一人では到底答えられなかったことである。これまでの議論や努力を上手くアウトプットできたことが、私にとっては一番うれしく、大きな達成感を得ることができた。（永澤拓也）

分科会討論の様子

■分科会感想

朝倉　咲希

RTでの議論は決して全て順調ではなかった。議論を進めれば進めるほど、環境問題の広さと自分たちの専門知識の不足を感じ、どうアプローチをしていけばいいのか分からず立ち止まってしまった。そこである晩、私たちは一度個々のトピックに対する議論を中断し、もう一度メンバーがJASCや環境RTに来た目的を共有した後、全体での目標や方向性を確認した。ここでようやく「自分たちに何ができるのか」に焦点を当てるということが決まり、日々の議論からファイナルフォーラムまでの道筋を決めることが出来た。また、これまでバラバラに話してきたトピックごとのつながりも見えた。長い話し合いの末、ようやく全員が議論の意義を見出せるようになったときの感動は非常に大きいものであった。それからは、メンバー全員が同じ方向を見てリサーチや発表準備を意欲的に進めることが出来た。

それぞれのメンバーがどういう議論・行動をしたくてその場にいるのかを共有し、グループで何を目指していくのかをまず考え抜くことは、グループで有意義な時間を過ごすために非常に重要な一歩であると今回実感することが出来た。このRTで共に考え抜き議論をした過程を思いかえすと、グループだからこそ比較し補い合いながら出せた視点が非常に多かった。また、観光やRT後の時間で環境問題のみならず普段の生活や将来についてなど話したことも忘れ難い思い出となっている。今回、RTで得た様々な視点や心温まる思い出は今後も必ず自分の人生に生きてくると確信している。多くの時間をこのRTで過ごせたことに感謝すると共に、これからもRTで得た友情を大切にしていきたい。

池田　耕一

日米学生会議の三週間は、本当に本当に特別な時間であった。言葉にはできない、けれどもかけがえのない「何か」を得た、と誰もが思っているのではないか。私が本会議中ずっと思っていたこと。「自分はここにいる資格があるのか」、その答えは今も出ていない。しかしながら分科会活動においては、全体としては自分が望んだ方向に議論が進んだし、皆が自分の案に同意してくれたことは非常に嬉しかった。その一方で、調べれば調べるほど、自分たちにできることの限界が浮き彫りになった。本当にこのテーマで良いプレゼンが作れるのか、分科会内の誰もが疑問視したこともあった。そして、議論の方向性以外にも、「日本」と「アメリカ」という二国の関係について考えさせられる機会が多くあった。環境分科会においては、アメデリの殆どが日本に関わる何らかのバックグランドを持っていた。だからこそ起こったコンフリクトが、私たちの分科会を時に苦しめた。第一サイトのアイオワにおける最初のRTタイム。そこで何気なくアメデリから言われた一言、「日本語使ってもいいよ」。そこからすべてが始まった。第二サイトのサンフランシスコにて、いよいよ私たちの中で疑問が噴出することになった。公用語が英語である意味とはなにか。日本人であるとは何か。アメリカ人であるとはどういうことか。日米学生会議は本当に有意義なものなのか。疑問は尽きなかった。第三サイトのニューヨークでは、私たちの中で溜まっていたフラストレーションが、いよいよ爆発した、という印象を受けた。誰もが言いようのない苛立ちを、悲しみを、悩みを、吐き出し、共有した。それによって、ほんの少しだけお互いに分かり合うことができたのだろうか。ワシントンの別れの際には、心なしか「やりきった」という思いがあった。それはファイナルフォーラムが満足いくものだったからというだけではない。「私たちは語るべきことを語った」と、少なくとも私はそう考えている。大切な仲間たちが、みなそう思っていることを、私は心から願っている。

永澤　拓也

約三週間という長いようで驚くほど短かった米国滞在であるが、とにかく色んな物を自分で見て、考えに触れて、多くのことを学んだ濃密な三週間であったことは間違いないだろう。三週間毎日別のストーリーがあり、新たな発見があり、それぞれにこのレポートを書くことができるが、分科会にスポットをあてて全体の感想文を残したいと思う。分科会で話し合う時間はそれぞれのサイトであったが、サンフランシスコでの分科会が大きな転換期だったように思う。渡米する前からも環境問題という広いテーマを前にてして学生である自分たちが何をどのように議論を進めていくかという大きな問題意識があったが、更にはファイナルフォーラムに向けて何をするか、それをサンフランシスコでは追求することができた。まずは各メンバーがJASCそのものに何を期待して参加を決めたのか、何をファイナルフォーラムという機会を使って残したいのか、こういった個人のExpectationを吐露し、共有し、話し合うことができたのがサンフランシスコでの一夜であり、最も重要な時間であったように思う。ここに来て、みんなが同じ方向を向きながら議論が進められる

ようになったと感じている。次に印象的なのはファイナルフォーラム前夜である。ここまで日が経ってくると、別の分科会の様子や方針も見えるようになり、隣の芝生は青いともいうが、お互いの分科会同士が気になってきたりするものだ。そんな中で環境問題RTは周りの意見や別分科会の価値観にふりまわされることなく、環境問題RTが重視してきたこと、やり方を大事にして最後までできたように思う。「環境問題RTは他のどの分科会とも違うし、今までやってきたことを出して頑張ろう！」と言って鼓舞し合えた前夜、メンバー同士結束できていたことを改めて感じ、鳥肌が立った。それは、フォーラムでそのようなアウトプットをしたか、よりもずっと重要なことだったように思う。

■分科会総括

兼子　莉李那

環境問題を扱う分科会は、日米学生会議の長い歴史を見てもほぼ毎年設置されている。毎年日米の学生が環境問題に関して議論をしていれば、当然、学生に議論出来る内容は限られており、似たような結論にたどり着いてしまうであろうことは容易に予想できた。そこで今年度の第66回会議では、終わりの見えない環境問題に立ち向かうべく、国家単位の政策に捕らわれず、国民一人一人が、また企業一つ一つが、其々の目線で環境問題を見つめ、問題を改善する為に出来ることとして、「環境問題における国家、企業、市民の役割」という分科会名とした。

事前活動の際は、環境問題よりも発展途上国に関する問題に話が進んでしまい、環境問題に関する議論が十分に成されず、分科会リーダーが軌道修正する場面も多々見られたが、デリ其々が温暖化、東日本大震災、環境汚染等とテーマを定めて調査し、其々のテーマに関して英語での勉強会を設けることにより、知識を深めると同時に英語での議論に慣れる機会を設け、徐々に環境問題からそれることなく議論出来るようになった。

当分科会では、デリの希望から定例ミーティングは設定せず、分科会リーダーから課題を出すこともしなかったが、会う機会が極端に少なくなり、互いの興味分野がわからない等の準備不足が懸念された為、7月初旬に定例会議設定を提案し、二度実施した。しかし、「メンバー其々が自分の場所で考えて行動しているから、議題を設定せず自由に議論したい」というデリの強い希望を受け、敢えて議題を設定することはなく、世間話に終始することも多かった。また、英語力不足が懸念されていた当分科会であったが、デリの「英語力に関しても不安は感じない」という意見を受け、勉強会以降英語の練習をすることもなくなった。

本会議ではアメデリが全員日本語を理解出来たこと、またジャパデリの英語力不足から、議論の大部分が日本語で行われ、米国側分科会リーダーが一人取り残されてしまう事態が起こったが、ファイナルフォーラム等の公の場ではジャパデリも英語で話す努力をし、無事に乗り越えることが出来た。

当分科会は英語よりも日本語が共通語となったためか、例年会議で見られるジャパデリが英語力不足により自分の意見を上手く伝えられないという葛藤も比較的少なく、環境教

育という一つの大きなテーマに沿って全員が一致団結し、その結果分科会テーマ以外でもデリ同士が腹を割って話す姿もよく見られ、大変仲の良い分科会となった。本会議を通して、良い時も辛い時も共に切磋琢磨した仲間を今後も大切にし、分科会としても今後も繋がっていくことを願っている。

第65回会議終了直後から共にこの分科会を作り上げてきた米国側分科会リーダーのQuyenに、感謝と敬意の意を表したい。

最後に、当分科会活動において多大なるご協力を頂いた皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

グーグル本社にて集合写真

分科会での昼食の様子

移民の功罪と展望

Immigration in the Modern Era

■分科会メンバー

鈴木健司*
竹内瑞希
原田有理子
松居純平
モンタニョミチェルルイス
Ayaka Yoshida*
Ashley Davis-Reed
Beatrice Visconti
Sakura Takahashi
Takuo Koyama
（*は分科会リーダー）

■分科会概要

現在世界各地には約2億人以上もの人々が移民として居住している。 日本は明治以降、米国や南米諸国へ移民を送り出してきた。しかし今日では少子高齢化に伴い生産労働人口が減少し、移民受入れについての議論が活発化している。また移民により建国された米国は、現在でも年間およそ 70 万人の移民を受け入れている。しかし不法移民が1千万人以上滞在している中、不法滞在者に合法化の道を開く移民改革法案の是非が問われている。 移民が増加する背景には、受入れ側が単なる労働力の確保だけではなく、今や成長の原動力として高度人材を求めること、また送出し側の雇用機会が不足し、就業機会を国外へ求めることなどがある。一方移民の受入れによる犯罪率増加や送出しによる優秀な人材の海外流出など負の影響もある。当分科会では、移民を受入れ側と送出し側の双方から考察し、受入れに伴う功罪を踏まえ、日米両国が今後どのように移民と向き合うべきなのか模索していく。

■事前活動

<u>春合宿</u>

4 月に今年の参加者が決まり、5 月の春合宿までの間に様々な書類の提出に追われたりしたが、その一方では参加者を載せた自己紹介冊子も配られ、私は春合宿までの間に繰り返し読み込む事とした。多種多様な参加者が集まったことに驚いたが、とりわけ関東の大学出身の参加者たちの多さに驚くとともに、彼らとの交流が楽しみだった。

私の分科会は私を含め、関西、九州、そして関東からの人が集まったバランスの良い分科会だった。皆の性格もまたそれぞれ異なり、かつ強烈だった事もあり、私たちの分科会は多様性とエネルギーに満ちていた。

春合宿ではそれぞれの参加の動機と移民に対する立場、そして今後の活動の方針についても話した。時間が限られている中で最大限の成果を得られるようにと協力した結果、一方では議論が白熱しながらも最後はちゃんと一つの合意にたどり着く事もできた。これからの分科会活動に期待を膨らませるような結果となった。（モンタニョミチェルルイス）

定例ミーティング

移民RTでは、5月から7月にかけて事前準備の一環として週一回程度の定例ミーティングを行った。私たちは、春合宿にて、本会議のファイナルフォーラムで政策提言をしたいと漠然と考えていたため、ミーティングの開催と本会議までに調べたいことや、やりたいことをリストアップし、ミーティングを進めながら少しずつ議題を変えていった。5、6月は国内外の移民問題に関して調べたことを共有するのが目的で、それに加えて賛否が分かれる議題について日本語や英語で議論し本会議に備えた。6月後半にはRT paper執筆に伴い、それぞれのメンバーが自分の最も興味がある移民問題に特化して、リサーチ結果を共有したりフィールドトリップの報告をしたりした。その後、その四分野について、日本政府が現在行っている在住外国人への政策に対しての政策提言を簡単にまとめた。結果的にファイナルフォーラムで政策提言をすることはなかったものの、政策提言を考える程度に移民政策に関する知識を集めたことは、本会議での充実した議論の土台となり、有意義な定例ミーティングを重ねることができたと感じた。（竹内瑞希）

防衛大学校研修

印象としては、非常に勤勉で教養があるということでした。移民受入れに関する議論においても、保守的な立場を崩さず他国の近年の動向や自国の歴史などを建設的に例示しながら意見を述べて下さっていたので、非常に濃い議論ができました。また、保守的とは言ったものの、このような考え方は日本の人には一般的に受入れられているような気がすると感じた意見もありました。加えて、日本の国籍制度のあり方に関しても考え直す意義があるように感じるに至りました。日本国籍であるが、血筋に少しでも緊張関係にある外国の血が入っている人に対して、自衛隊では昇級が一定のところまでしか出来ないという現実も初めて知り、考えれば考える程深い問題だと感じました。（松居純平）

■フィールドトリップ

国家公務員　新井田理恵氏

私たちの分科会は国家公務員でいらっしゃる新井田さんと話す機会を得た。新井田さんは私の大学の先輩という事もあり、今回は座談会の形式を取りながら彼女が在留外国人に関する業務を担当しながら得た知見や所感について話してもらった。

初めに、新井田さんが国家公務員を志望さ

れた理由をお聞きした。日本に滞在している外国人、とりわけ社会的に弱い立場にある外国人の方々にとっても生きやすい社会を実現したいという思いから現在の仕事を希望されたとのことだった。日本における外国人政策はまだまだこれから成長していく分野であることから、古い慣例に縛られることなく仕事ができるという期待も同じくあったとのことである。

しかしながら、現在の行政、さらに言えば今の日本社会が移民の受け入れに対して厳しい姿勢を貫いている現状を踏まえると、行える行政の範囲もまた限られてきているという示唆を頂き、移民政策もまた官界の論理からは逃れられないということを痛感致した。

「日本人」ではない移民に対して行政が支援を施す際にはそれ相応の論拠が求められる。そのためには移民もまた法律上「正規」な存在にならなければならないわけだが、弱者である事の多い移民に対して「正規」な存在となるよう求める事が果たして公平といえるのかを考えさせられた。結局のところ社会的弱者というのは、行政による支援によってではなく、市民の理解と思いやりにより救われるものかもしれない。

（モンタニョミチェルルイス）

新井田さんとの対談の様子

福岡県庁　国際交流課

福岡県庁を訪問させて頂き、地方行政レベルで行われている取り組みに関して話を聞いた。日本語教室、各国の言語に対応した取り組み、NGO や NPO との連携等、教えて頂いた。地方行政だから出来る事がある一方で、制限もあり、それをどのようにして補っていくのかが課題となるであろう。今回は日米学生会議で移民分科会だからこその訪問であったが、市民一人一人が外国人労働者に対してより関心を持つ事が必要だと考える。その興味が理解へと、そして豊かな多文化共生に繋がるのではなかろうか。そのためには、日本人と外国人間の草の根レベルでの交流がもっと活発に行われる必要があり、これからの取り組みに期待している。（原田有理子）

多文化まちづくり工房

「多文化共生ってことば、なんとなく苦手なんだよね。」

多文化まちづくり工房の代表、早川さんの衝撃のことばである。団体名に多文化ということばを使っていることを指摘すると「そう。だから共生は使わなかった。」とおっしゃった。「移民を受け入れることによって新たな問題が起きるのか、それとも、今の日本社会にすでに存在している問題が、外国人が入ってくることで顕在化するのか。だから、まちづくりに着目してそこに住む人々とのつながりを大事にしているんです。」

7月19日、在留外国人の住民が多く集中する横浜市泉区と大和市にまたがる県営団地、いちょう団地を中心に活動されている、多文化まちづくり工房を訪ねた。日本語教室のお

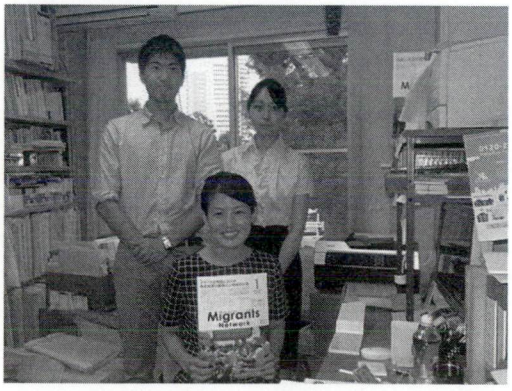
手伝いをさせていただき、その後一時間以上にわたり夜遅くまで代表の早川さんにお話を伺った。外国人をどのように受け入れるか、いかに日本社会での生活をサポートすべきか、問題点は尽きないので割愛する代わりに、私が今回のＦＴで強く感じたことを挙げる。

それは、想像よりも、「ふつうの」人々の団体であったことである。移民を助けたい、という大きな志を持った人や日本語を教える講習をきちんと受けた人が活動されているのかと思いきや、ちょっと興味がある、人と話すのが好きという人や、コミュニケーションの苦手な人、ただここにいるのが楽しい、という若い世代も見られた。彼らに共通しているのは、そこが彼らの居場所であり、早川さんにとっては「生活」そのものなのだという。多文化まちづくり工房の大きな特色としてその活動の継続性が挙げられるが、逆に高すぎる理想は継続を阻むものなのかもしれない。目の前に外国人が来て、となりに住む○○さんと何とかご近所づきあいしていかないといけない、という状況下では、広く緩やかな人間関係で人々のつながりを保ち続けることが、長期的に在留外国人が日本社会に根を下ろすサポートをするうえで、最も大切なことだと感じた。（竹内瑞希）

多文化まちづくり工房訪問の様子

移住労働者と連帯する全国ネットワーク

「移住労働者・外国籍市民とともに多民族・多文化共存社会の創出をめざすNGO」と掲げる移住連ネットワークのホームページを見つけ、すぐさま連絡を取り、良い返事を頂けた。「多文化共生社会」なんて、日本で実現できるのか。そんな疑問を持ちつつ事務所に向かった。しかし、お話を伺う中で、私の疑問は悉く打ち砕かれた。「80年代から、日本は既に多文化共生が始まっている。現実を直視していないだけ。」15万人の技能実習生に、留学生や永住者等、確かに近年、外国籍の人は多いように感じる。「共存している事実に目を向け、差別をなくし、人権を保護しようとする視点が必要。移民の受入れの議論の前に、日本は外国人の方々に対する考え方を変えていかないといけない。」今年7月18日には、最高裁にて生活保護が外国人の権利ではない、と判決が下された。それら外国人の人権を考える上で不可欠な論点についても、具体的にお話を頂いた。渡米前に、移民の問題を考える上で重要な視点を養うことができ、非常にハッとさせられる濃厚な時間となった。（松居純平）



移住連訪問の様子

直前合宿

渡米を目前に控え、全員の士気が高まる中での直前合宿であった。毎週事前準備の為に連絡をしていたが、やはりFace to Faceでの議論は楽しく、心行くまで討論できるこの環境がとても心地よく感じた。

分科会活動も、これまでの活動のまとめを行い本会議に向けて最終調整を行った。渡航前最終プレゼンとして移民分科会では日本政府に対する政策提言を人権、教育、国籍、国際協力としての受け入れという4つの観点から行った。春合宿で決めた「渡航前までに日本の移民政策に精通し、問題点を見いだし、政策提言を行う」という目標が達成できた瞬間であった。

またプレゼン後に行った分科会リフレクションでは、各々、本会議に対する決意を共有した。人生でたった一度のJASC、どのようなLife Changing Experienceが待っているのか心躍る直前合宿であった。（原田有理子）

■本会議中の活動

第1サイト　デモイン

第66回日米学生会議の4つある開催地のうち、最初の開催地はアイオワ州のデモインだった。他の開催地に比べてあまり有名な街ではないにせよ、アイオワ州はアメリカの一次産業を代表する州である事から「農業」をテーマとした数々のイベントが行われた。

そして農業をテーマに据えながらも「最新技術を活かした農業」と「従来の伝統を重んじた農業」の二つの側面に着目したイベントが多かったように思う。

農業の在り方を通してアメリカという国の「食」に対する考え方が理解できたのはとても興味深く、大量生産と揶揄される農業のありかたにも一理があることを納得させられた。しかし、だからと言ってこれまで培われてきたそれぞれの食文化を無視した形での農業が進められてもいいというわけにもいかず、世界の食料問題を最新の農業で解決しなければならない一方でそれぞれの食文化を守るにはどうすればいいのかと考えさせられた。

大方の問題は技術の発展により解決できると考えるアメリカの主張にも筋は通っていると理解した上で、それでもなお自分たちの食文化の保護に固執しなければならないのだと反論するのはそう簡単な事ではないようだ。（モンタニョミチェルルイス）

第2サイト　サンフランシスコ

サンフランシスコは移民RTの転機となった場所である。第2サイト初のRT Timeはホームステイ直後のJASC Alumniを交えてのものだった。そこで、私たちは一人の衝撃的な先輩に出会った。彼は、「そもそも移民を受け入れる必要はあるのか」という質問を私たちに投げかけたのだ。しかし、移民問題から派生する多くの問題に目を向けようとするあまりこの根本的な質問を見失っていた私たちは、誰一人としてその質問に意見を述べることが出来なかった。さらに、他の先輩方からも、移民問題には他の様々な問題が絡み合っており国の仕組み自体を考え直さなければならない、学生は議論を楽しむべきだ、等の意見をいただき、今まで私たちが重ねて

きたRT Timeが、情報の共有にすぎず表面的な意見交換だけに終始していたことが露呈したAlumni Meetingだった。

その後、私たちは今までのRT Timeの使い方を見直し、それぞれが達成したいことは何なのか、どのような方法を取ればそれが達成できるのかを話し合い、政策提言にこだわらず、徹底的に議論を楽しむことに決めた。各々が興味のあるYes-No Questionをあげ、8つの議題について事前のリサーチ等で負担をかけることなく、互いの意見をぶつけ合うことにしたのだ。この機にそれまでの不満や違和感、ファイナルフォーラムへの不安を正直に口にできた自分に驚いたとともに、それを受け入れ一緒に代替策を考えてくれた他の全メンバーに非常に驚いた。このRT reflectionが、個人の興味も移民問題に関する知識量もバラバラなメンバーが初めて互いに歩み寄ろうとした瞬間だったのではないか。（竹内瑞希）

第3サイト　ニューヨーク

終戦記念日の講演では原子爆弾の事を、9.11メモリアルでは起こった事実を、涙を流しながら語られるアメリカ人講演者の姿を見て、改めて人の命の尊さはいつの時代も、どの人種も同じであることを再認識した。同時に日本は、第二次世界大戦で被害者のみではなく加害者であったという認識を、事実の歴史教育を強化する必要があると感じた。

また国連で臨床心理士として働かれている方とお話をする機会を頂き、国際機関／草の根で働く事の各々の長所と短所を実感し、自分の将来に関して考える良い機会となった。

移民分科会としては、主にヨーロッパ系移民の受け入れを行っていたElis Islandへの訪問があった。アメリカが移民国家である事を再認識し、彼らのアイデンティティーを一つにして大国になったアメリカは純粋にすごいと思うと同時に、これから日本が受け入れる移民に対して同化／統合のどちらを推進するのか、理想とする多文化共生は何なのかを考えるようになった。（原田有理子）

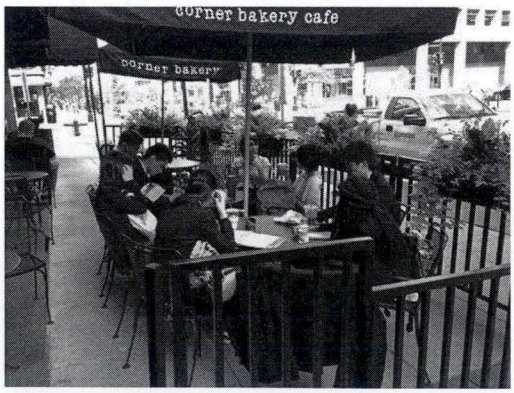
第4サイト　ワシントンD.C.

最終サイトでの滞在は、私にとって期せずして最も濃縮された時間となった。まず、ファイナルフォーラムでは、移民に関する議論の過程で発見した各々の「問い」を、観客に問いかける形式でプレゼンをしたが、一人1分にまとめ、短く自分の問題意識を発表することの難しさを痛感した。そして、私が直前まで出馬を悩みに悩んだ実行委員選挙。大学院進学を検討していたので初めは考えていなかったのだが、会議を通して発見した日米学生会議への愛情から、出馬したいという気持ちが最高潮に達した。蓋を開けてみると、私は第67回日米学生会議の実行委員長に選ばれていた。その後帰国までの二日間は、真夜中の3時まで続く新実行委員会での怒涛の会議。それと同時に舞い込んできた第66回会議参加者との別れ。だが、帰国日には別れを惜しむという感覚はなかった。Once a JASCer, Always a JASCer.耳にタコが出来たが、ここで育んだ友情は、これからも生涯続くと感じている。（松居純平）

ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムでは8つの議論を紹介するとともに、移民 RT が本会議の途中で議論の方向性を大きく変えたこと、そしてその転換から学んだことを発表した。

リハーサルの時点から、これほど多くの議題を羅列すると一つ一つの議論の内容が薄くなりまとまりもない、といった批判が寄せられた。確かに、多くの RT は一つのゴールに向かって議論をつなげており、発表を聞く側から見れば私たちの議題間のつながりは感じられなかったかもしれない。しかし、私たちにとって一番重要なことは1つの大結論をだすことではない。移民問題に関する議論を通して得られた相互理解の鍵である。このような RT は異例だっただろうが、お互いに意見をぶつけ合い、充実した議論の進め方を模索したという点においては、他の RT に負けないと自信を持って言える。なぜなら、前日から Memorization Contest をやるほど入念に準備し、当日の質問にも互いにフォローし合いながら答えることのできたメンバーたちが、ファイナルフォーラム後そろって達成感や満足感を口にしていたからだ。（竹内瑞希）



ファイナルフォーラム直前の打ち合わせの様子

■分科会感想

竹内瑞希

私が本会議前から、日本側の参加者との RT Time で感じていた違和感が二つある。一つ目は、論点が議論中に大きくずれ、しまいには今自分たちが何を議論しているのかわからない脱落者が続出することである。議論の進め方も、必要な情報を共有した後好き勝手発言を始めることが多かったのだ。お互いが話しているときは尊重して聞きあうし、わからないことがあれば質問もすぐにできる雰囲気であるにも関わらず、なぜこんなに議論が迷走するのか全く分からなかった。

二つ目は、春合宿から本会議の途中まで、方法論ばかり早く決めて内容の議論にたどり着く前にプレゼン発表の準備を始めようとする点である。方法をしっかりと固めることも大切だとは思うが、フレームワークが終わったら議論それ自体に熱を入れたかった私にとって中身を置き去りにして表面だけ形があるかのように取り繕った春合宿や直前合宿のプレゼン、アイオワサイトでの RT Time は納得のいくものとは言えなかった。

サンフランシスコで、他のメンバーたちが、今までの自分たちの RT Time の進め方に疑問を持ったことは、私にとって大きな好機であった。今までの不満や、とにかく議論がしたい、みんなの意見を聞きたいという思いをぶつけると、私以外にもそのような不満を持っていた人が何人もいた。そこからの RT reflection の時間を私は絶対に忘れないだろう。議論を進め整理する人がいない、各々の興味のある分野を議題にしてファシリテイター—を順番に務めよう、ディスカッション形

式だけでなくディベート形式でやっても面白いのではないか・・・RT で話し合ううちに、それまでもやもやとしていた違和感が明白な問題点として浮かび上がり、それに対する解決策がどんどん提案された、言いだしっぺの私の予想をはるかに超えるすばらしい時間だった。

その後は、議論をリードすることの難しさに直面しながらも、大いに対立意見を戦わせ、ときにばちばちと白熱する議論を楽しむことができた。また、順番に議論をリードする役を務めることで、議論全体がうまく回るようになったり、話し合っているうちに論点が明確になっていったりした。同時に、議論が不十分でさらに深く議論したいときはそれを素直に言い出せる雰囲気、そしてその人を尊重して限られた時間の中で精一杯議論しようという雰囲気が生まれたように感じた。

RT を通して、もちろん日本とアメリカ、さらに他の国々の移民政策や移民の人々の置かれている状況に関心を持つようになったが、それ以上に、今自分が目の前で接している人とどのような姿勢で関わっていくべきかを大いに学ばせられた。アメリカ側の参加者だけでなく、日本側の参加者同士も、お互いに全く違う背景を持っていた。ハンドサイン等を駆使して積極的に相手を理解しようという姿勢、そして自分の思いを正直に伝えようという思いがつながって初めて相互理解の第一歩となるのではないかと感じた。

原田有理子

全く異なる人生を歩んで来た移民分科会のメンバーの人生が JASC を通じて交わり、お互いを刺激し合い、己の道へと戻り、邁進していく。彼らの人生に関われた事は私の誇りであり、私の人生に大きな隕石を落とした彼らと出会えた事は、私の財産である。

他の分科会と比較して、移民分科会内では衝突が少なかったように思う。これは「相互理解」が案外簡単であったという事ではない。私たち分科会には相手を尊重する事、お互いに正直である事が最も重要であるという認識があった。例えば、議論と、それ以外の時間の区別が明確に出来ていた事や、全員の意見が出るまでは決して次の議題には移らないという暗黙の了解があった。それはサンフランシスコでお会いしたアラムナイの方が、私たちの議論内容に関して厳しい指摘を下さり、早い段階で自然と全員が一つになれたのだと思う。

個人的には、将来国際協力分野を志望しているため、移民の受け入れが支援の一つのあり方になり得るのかという私の興味に関して議論を出来た事が印象に残っている。単なる途上国支援ではなく外交手段としての国際協力を行う際に、日本人技術者を現地に派遣するのみではなく彼らを移民として日本に受け入れ、教育することも ODA の一つになり得ると考えている。

最後に、完全な相互理解は不可能に近いと思う。自分自身の行動でも理解できない時があるのだから当たり前であろう。しかし、相手のことを知ろうと興味を持ち、歩みよる事で相手の事は勿論、自己への理解に繋がるのであろう。最後に、移民分科会として活動できたこの数ヶ月は確実に私の人生の糧となる経験であった。ありがとう。

松居純平

「移民の功罪と展望」分科会は、私の第一希望だった。大学で国際法と人権を専攻している私は、日米の移民問題に対し、「学生が考え出し得る最善の政策提言を、日本とアメリカ両国に対して提出する」という目標を掲げ、日米学生会議に応募した。移民の勉強に関しては、日本側の参加者たちと、渡米前の3か月で多読や専門家の方々との対話を通じて、念入りに行った。渡米直前には、実際に日本に対する政策提言書の原案の作成をした。そして、待望の渡米に臨んだ。アメリカに対する政策提言をしようと…。しかし、到着して唖然とした。アメリカ側参加者は、アメリカではなく、日本の移民問題により関心を示していたのだ。始めは、何をしに渡米したのか、分からなくなった。そんな状態で、3週間という限られた時間で、政策提言に向けた議論のみをするのは、生産的ではない。しかし、そこで落ち込むのではなく、我々は今、この貴重な有限な時間の中で最大限出来る何かを探した。そうして、我々は、今、お互いが話せる議論をしようという結論になった。そもそも、非正規移民が永住権を得る余地はあってしかるべきなのか、移民に対しても本国の義務教育を適用するべきなのか？永住者に選挙権は認められるべきなのか、認められるべきなら、選挙だけでなく、出馬する権利はどうか。「そもそも論」を議論した。つまりは、理想論である。当初の目標が達成できなかったという点で、私にとって悔いは残っている。しかし、それ以上の発見があった。何の利害も考えずに、「どういう世界が良いのか」という、ある種の「夢」や「理想」を語る貴重な時間。腹を割って話し、自分とは全く異なる視点を持つ相手の意見も尊重する。時に全く異なる論点で意見の食い違いがあったり、相手の意図が見えず苛立ったり。議論では、常に「衝突」があったが、互いに尊重し合い、学び合う姿勢からそれぞれが「調整型指導力」をとり、自分が出来る最善を尽くすことができた。ここで発見した「問い」を、今後も考え続けていこうと思う。

モンタニョミチェルルイス

この分科会は私の第一志望だったこともあり、皆と本音の議論が出来て良かったと思っている。時として正確でない議論を行う事があったとしても、話し合う事を通してそれぞれの考え方に触れる事が出来たのは刺激的であった。

この分科会を志望した理由というのも、移民政策を難しく論じたかったからというわけではなく、単純に移民について話し合う事を通して「人が人を選ぶ事は果たして可能なのか」という、人間にとって普遍的な問いに正面から向き合いたかったからである。

春に東京で集まって以降、毎週ミーティングを行ってそれぞれが調べてきた内容をもとに議論したり、時には専門家に意見を伺ったりと、本会議に向けて勉強を重ねた。日本での最後の発表会ではそれぞれが考えついた政策を披露するなど学生ながら生意気なこともしたが、発表に至るまでの過程でそれぞれの考えがより明確になった事の方が大事だったと思う。

渡米してからの日々はなおさら刺激的だった。日本にいる時は議論も理想論に陥りが

鈴木健司

ちであったが、移民問題の解決が急務であるアメリカにおいてではより具体的な解決策についての議論が中心だった。アメリカでは移民が生活している風景が当たり前であり、街によってはスペイン語が「準公用語」として機能しているくらいである。アメリカの学生たちの意見は鋭いだけでなく、当事者しか抱けない熱い思いがこもっていた。

一方は理想論を語り、他方は具体策を議論してと、日米の学生の双方の微妙な違いは面白く、おかげで最後の発表もエネルギーに満ちたものとなった。発表を準備する過程において、そもそも人を選ぶ事は可能か、可能だとしたらどのような条件を課していいのか、受け入れる側になぜ人を選ぶ資格があるのかなどといった、青臭いが本質を突いた議論が出来たことは極めて有意義だったと思う。程度の差はあれ、私たちにもまた人を選択する場面が訪れるかもしれない事を考えると、物事の本質から逃げずに向き合う事は何より大事なはずなのだ。そのような機会を与えてくれたこの分科会には感謝の気持ちでいっぱいである。この分科会に参加できて本当に良かった。

■分科会総括

出した。3 週間あまりという制約された時間と日々の凝縮されたプログラムの中で、各々が新たなメンバーと打ち解け、議論を深め、ファイナルフォーラムでの発表の準備に迫られた。新たな米国側の意見や視点に触れ、会議中にはそれまでの日本側で形成してきた考えは揺らぎ、葛藤した。会議中盤には、それまで議論してきたことを一から見直す「移民」という側面から物事を捉えることで、「異なる文化を有する人々が共生するとは」、「人の移動が規制されるのは何故か」等といった根本的な問いに日米両学生に自由に議論して欲しいという願いからこの分科会は発足した。

そして、この議題を議論するにまさに相応しい4名の日本側代表が当分科会メンバーとして5月の春合宿において初めて顔を合わせた。当初は、分かり易い指標として、政策提言ができる程度の知識を基礎から蓄積しようと活動した。各々の居住地も異なるなかで、殆ど毎週インターネットを介して長時間のミィーティングを行った。時にはフィールドトリップも行った。4 名のメンバー全員が少なくとも 1 度は自身で企画し、実際に実行した事実は当分科会メンバーの自主性や意気込みを表していたように思う。とはいっても、5 月に初めて出会った 4 名が 1 つの分科会として活動する中では、自身の願望と分科会全体の意見との折り合いや地理的距離による葛藤等があったに違いない。それでも皆、本会議に向けての準備に懸命に取り組んだ。

そして瞬く間に本会議は始まり、新たに米国側代表 4 名を迎え新たな分科会として動き必要にも迫られた。しかしこの機会を経て、各々が会議を通して抱いていた不安や疑問、それぞれの葛藤などを共有することができた。その作業を通して分科会の関係性はより深いものになったように思う。そして、ファイナルフォーラムでは全員で話し合い、日本側の当初目指した政策提言ではなく本会議の中で議論した内容、そしてそこから学んだ

ことを発表した。

この分科会の特徴は、話し合う姿勢にあったと思う。象徴的であったのは、会議中盤で一から方向性を見直す必要性に迫られた際であった。それまでの自分たちの活動を否定するような作業を要するなかで、直ちに全員での話し合いを促すメンバー、率直な自身の葛藤を共有するメンバー、自由時間にも相手の意見を聞き出そうとするメンバー、分科会内の関係性の維持にそれとなく努めるメンバーがみられた。逃げ出したくなるような状況の中でも、各々が自分の果たすべきことを考え行動していたようにみえた。そして最後まで一人も欠かさずに、分科会活動をやりきった。最終的には、政策提言のような分かり易い成果をファイナルフォーラムでは発表できなかったかもしれない。しかし、日米の学生が互いに率直な意見交換を行い、そこからお互いが納得できるまで議論をするといった姿勢は、1つの日米学生会議らしさを体現したと自負している。

最後に、当分科会メンバーである Ashley, Beatrice, Jumpei, Luis, Mizuki, Sakura, Takuo, Yuriko の8名に感謝を述べたい。RT コーディネーターとして未熟であった自分をいつも暖かく迎えてくれた。米国側 RT コーディネーターの Ayaka Yoshida にも同様に感謝したい。忙しい中でも決して見捨てること無く自分をサポートしてくれた。そして、当分科会に関わってくださった全ての方々に感謝申し上げます。様々な方々からのご支援なくして当分科会は成り立つことはありませんでした。有り難うございました。

ワシントンD.C.にて全員の集合写真

現代における歴史教育とその社会的影響

Modern Consequences of Historical Education

■分科会メンバー

大沼雄貴*
板倉美聡
小宮山宗
辻村志帆
矢島ショーン
Pramodh Ganapathy *
Amelia Loew
Risa (Lisa) Kanai
Sungwoo Park
Yang Liu
（＊分科会リーダー）

■分科会概要

歴史教育は国民の帰属意識、愛国心を育む。歴史教育によって培われた歴史認識の差異が、朝鮮従軍慰安婦問題や尖閣諸島問題など国家間、民族間対立を生み出している。日米両国は太平洋戦争にそれぞれ異なった評価をしているが、真珠湾攻撃、戦時中の日系アメリカ人強制収容所や原爆投下、そして極東国際軍事裁判などの過去に起きた事実をどのように捉え、国民に教育すべきなのか。アメリカではヒスパニック、ネイティブアメリカンなど多くのエスニシティや移民が混在する中、どのような視座で公平な歴史教育を行うかが議論されている。

当分科会では、グローバル化が進み民族や文化が複雑に交差する現代社会において、歴史とは何かを再考察し、すべての国家や民族にとって公平な歴史教育を実現することが困難な中、歴史上の事実をどのように教育すべきなのかを模索する。

■事前活動

<u>春合宿</u>

分科会は春合宿で圧倒的に多くの時間を過ごした場所である。やる気のある人たちと興味のあるトピックを議論するのは楽しく有意義な時間であった。分科会のメンバーは自分に比べて熱意にあふれ目的意識が強かった。今までに様々な経験をしている人、アカデミックな分野に力を入れていて多くの知識を持つ人、プレゼンやディスカッション進行のノウハウを有する人などそれぞれが強みを持っており、自分がこの分科会で今後どういった

役割を果たし貢献してゆけばよいのか不安になった。分科会の反省点も見つかった。歴史教育というトピックの性質上、議論が現在の政治・社会問題の方に流れてしまいそこに多くの時間を使いすぎてしまい、それ故に最終プレゼンの準備が遅れてしまい持ち時間を大きくオーバーしたまとまりのないものになった。今後の教訓にしたい。（矢島ショーン）

定例ミーティング

私たちの分科会はメンバーが関東と関西で分かれていたため、なかなか5人が対面で集まることはできなかったが、スカイプなどを利用して定例MTGを行った。まず初めに、どんな分科会にしたいのかということを話し合い、「妥協なきRT」というスローガンを設定した。これは、英語で自分の意見を伝えきることや、本会議でベストを尽くすこと、そしてそのための準備をぬかりなく行うことなどを念頭に置いたスローガンである。次に、これを達成するためには何が必要かということを話し合い、定期的に振り返りをするべきだということになった。特に本会議では時間があっという間に過ぎてしまうことが予想されたため、サイトごとにRTリフレクションを行い、反省点を改善していくことにした。目標設定後の定例MTGでは、各自が興味のあるトピックについて調査し、プレゼンを行って、そのプレゼンをもとにディスカッションを英語で行い本会議への準備とした。（辻村志帆）

防衛大学校研修

歴史問題がテーマだったので、防大生側からは過激な意見が多く聞かれると予想していたが、そうではなかった。軍と民間の考えていることは違うそうで、どの学生の意見も現実的な発想に基づいたものであった。歴史認識問題については、戦後日本の教育は自虐史観に基づくものだとし、太平洋戦争の正当性も含めて教育すべきだという意見も多かったのに加え、日本の行った悪い行為はそれはそれできちんと教えるべきということだった。現在対立が鮮明化している韓国については、士官学校間での交流があるようで、大事な同盟国として関係を改善しなければならないといったような声も聞かれた。話は集団的自衛権にまで及んだが、防大生は、程度に制限は設けつつも、集団的自衛権の容認には積極的なようであった。議論はとても充実したもので、意見は尽きなかったので、もっと時間があったらよかったのにと皆言っていた。（小宮山宗）

議論を重ねた防衛大学生と

直前合宿

直前合宿で最も反省すべき点は、プレゼンテーション発表準備のための議論となってしまい、本会議のRTタイムをどう運営していくかという建設的かつ実質的な議論ができなか

ったことにある。「直前合宿を自分たちの RT タイムのなかでどう位置づけるか。」という点において、十分に思考がなされていなかったことが原因と考えられる。もちろん、「準備期間の集大成を外部に発表すること。」に焦点をあて、その準備に資することも有意義であるが、それだけではあまりにも形式的な議論しか出来得ない。そうではなく、実際に本会議のRTタイムの限られた時間をどう使っていくのか、いままで準備してきたことをどう本会議で扱うのか。本会議で時間不足に悩まされある程度の"妥協"が生じてしまったのは、直前合宿において以上に述べたような実際的な議論が足りず、本会議に持ち越してしまったことに端を発しているのではないかと、悔やまれてならない。(板倉美聡)

■本会議中の活動

第1サイト　デモイン

アイオワの牧歌的な空気の中で、RT タイムも穏やかに進んでいった。わたしたちは各自の RT ペーパーについて発表をし、これに対する質疑応答と簡単なディスカッションを行って、お互いを知るところから始めた。歴史教育といっても、その言葉から想像するものも、関心を持つテーマも全く異なっており、新鮮だった。私たちの分科会には中国と韓国から来た学生がいたため、それぞれがもつ歴史観も大変興味深いものだった。出会ったばかりということで遠慮はあったものの、RT タイム以外の時間も活かして、だんだんと距離を縮めていくことができたように思う。特にサンフランシスコで行われるタレントショーに向けた練習では、仲を深めることができた。LGBT プログラムに向けたディスカッションでは、分科会のテーマから離れているにもかかわらず、白熱した議論となり、歴史教育以外に関しても各自の考え方を知ることができた良い機会だった。ここで相互理解を深められたことで、第二サイト以降のディスカッションがやりやすくなったように思う。(辻村志帆)

第2サイト　サンフランシスコ

第2サイトはサンフランシスコで行われた。第2サイトでの拠点はカリフォルニア大学バークレー校であり、間にホームステイを挟んだため、RT タイムはあまり取れなかったが、合間をぬってディスカッションをした。率直に述べて、サンフランシスコは私たちの分科会にとって最も困難な時期であったと思う。主に話し合われた議題は分科会のスケジュールとストラクチャーであったが、日本側英語力が不十分なことや、メンバーにまとまりが欠けていたため、話し合いに折り合いがつかなかった。結局ここで決まったのは、日本における超国粋主義運動を題材として扱い、分科会の名前に従って、社会的影響、その原因、その解決策という構成で調べを進めていこうというものであった。第2サイトが終わり、全日程の半分が終わった時点で構成やスケジュールの話ばかりしていて本題に全く触れていなかったのは不安であったが、他の分科会も言語の問題や意見の調整に苦慮し、同じような状況だったようであったことから、無意味に時間を費やしたのではなく、JASC の分科会にとっては必要な時間だったのかもしれない。(小宮山宗)

第３サイト　ニューヨーク

慢性的な睡眠不足とオーバーワークと、そして迫り来る分科会発表への重圧にもまれた第３サイトでの思い出は、苦くて濃い。ある程度の一貫性の求められるパワーポイントの作成に関しては、誰かが情報を統合し構成を組み立てる作業を管轄する必要があり、その分野で経験のあった自分が担当することになった。しかし、自分の英語力のなさから伝えられない、聞いてもらえないことによる深刻なミスコミュニケーションがおき、自分への不甲斐なさとメンバーへの憤怒に揉まれながら、人気のなくなったラウンジで朝の５時までパソコンに向かい続けたこともあった。ただ悔しく、腹立たしく、そしてどこか虚しく、しかし全ては自分の無力さに帰するのだと思うと感情のやり場さえ見失われ、目の前のタスクに全力を注いで今後の努力と成長を誓うほかなかった。（板倉美聡）

第４サイト　ワシントン D.C.

第４サイトであるワシントン D.C.のプログラムの目玉は、もちろんファイナルフォーラムである。ファイナルフォーラムでは、各分科会がプレゼンに１０分、質疑応答に５分という与えられた時間の中で、三週間に渡る議論の成果を発表する。いわば JASC のメインのひとつである分科会活動の集大成である。ワシントン D.C.到着の翌日がリハーサルであり、この時点でプレゼンが出来上がっていなければならない。各分科会は第３サイトであるニューヨークの終盤からその準備に終われ、焦り始める。我が分科会も例外ではなかったが、日本側参加者の一人が徹夜でパワーポイントを仕上げてくれたこともあり、到着後すぐにプレゼン原稿の作成、暗記に取りかかることが出来た。幾度となく練習を重ねたにもかかわらず、いよいよ発表を迎えるとみな極度に緊張していた。終わってみると、発表自体は成功したと感じた。それまでの議論が充実したものであったこと、ほかのメンバーが優秀で理解があったこと、そして何よりメンバーの仲がとても良かったことのおかげである。(矢島ショーン)

ファイナルフォーラム

多くの困難があったが何とかファイナルフォーラムまでこぎつけ、結果的には評価の高いプレゼンテーションを作る事が出来た。その要因は、各人の長所を生かした役割分担をして全員で協力するスタイルをとったからであると思う。ディスカッションは当初の予定通り「現代における影響」から始まり「その影響」を議論していたところであったが、「解決策」の部分に関しては全体で議論をする時間がなかった。社会人に比べて自由に議論ができる「学生会議」においては解決策の提案こそ最も闊達に議論するべきところだと考えていたが、時間の制約で、個人の提案のレベルにとどまってしまったのは残念である。それでもプレゼンテーションにまとまりがあったのは、皮肉にもそれまでに嫌ほど構成についての議論を重ねていたことの賜物である。準備においてはアメリカ人が日本人の英作文を添削するなどして、文字通り協力し合い、深夜まで練習した。歴史教育分科会ではフォーラムのトリの大役を任されていたので重圧

も大きかったが、終わった後の達成感も一入だった。（小宮山宗）

■分科会感想

板倉美聡

試練や障害を乗り越える上で非常に重要なことは、それらが自分の人生におけるほんのステップにすぎないととらえることであると言える。JASCのその先にあるものが見えている者にとっては、JASCで経験する痛みも虚しさも、すべて成長への布石と変わる。

始まる前から自明だったことではあるが、やはり分科会においては自分の思考力と思考の結果を表現する力のギャップに苦しむことになった。発言の質とは、アイディアの質と表現力の掛け算によって決定されると思う。すばらしいアイディアもゼロの表現力では外部に発信されることはなく、もちろんどんなに表現力があろうともアイディアの質がゼロでは相手にされない。「アメデリとジャパデリの議論は、大人と小学生が議論しているようなものだって言われたけど、そうじゃないでしょ。小学生は小学生の思考力と表現力で議論するから苦しまないけど、私たちは思考力と発言力の差に苦しんでいるんでしょう。でもそんなのわかってたやん。アイディアは自分のなかにあるんだから、それを表現する練習と挑戦のために。ここにきてるんじゃないの。」と、空港で泣き出した仲間にかけた言葉は、本会議が始まってからずっと自分にむかって言い続けた言葉だった。

伝えられない、聞いてもらえない悔しい思いも、投げ出したくなる衝動も数多く経験した。しかし、同時に、「Someday, I wanna be a hardworking student like you!」「I think you are one of the most hardworking people I know and more important, you always have a positive and friendly attitude. I know that you will be successful in whatever you do in the future, and you will go on to help many people. I think that you are inspirational to a lot of people and feel lucky to have met you.」というアメデリからもらった言葉は、私の成果と努力を象徴する大切な財産となった。「自分が人一倍努力することで、周りに『自分も頑張ろう！』というインスピレーションを与えること」という、個人的な目標は一部達成されたといっても過言ではないだろう。

小宮山宗

そもそもこの分科会への参加を決定したのは東アジアの歴史問題に関心があり、アメリカの学生と議論することによってその解決への手掛かりを得ることができないかという動機によるものだった。そのため、分科会で取り扱った日本の超国粋主義運動とは正に興味のある分野であり、教育という観点から解決策まで導き出せたことから、個人的には有意義であった。今回は分科会の誰しも当該分野の専門家ではなく、自分の知識不足も露呈したが、それはそれで今後の糧として活かしていきたい。「妥協なきRT」という目標が6月の東京ミーティングで決定されていたようである。しかしむしろ本会議を通して私が学んだのは、「チームとして大きな目標を達成するためには、小さな妥協をすることを厭ってはならない。」ということである。だから、妥協なきRTという当初の標語は良し悪しだと思うに

至った。共に分科会で活動した超高学歴の人たちの、こだわりが強くて全てに妥協しない姿勢には感銘を受けた。しかしそれは裏を返せば自我が強く頑固なのであり、集団の中では協調性のなさということにもつながりかねなかった。チームとして一つの物を目指していたはずなのに、つい視野が狭くなって自分の意見を押し通すことが主眼になってはいまいか。特にサンフランシスコサイトあたりまではその傾向が顕著で、誰か一人が取り仕切ったり、頑なに意見を押し通したりすることでディスカッションが行き詰っていた。NYサイト以降アメリカ側がファイナルフォーラムに向けて本気で動き出してからは全員参加型となり、ようやく分科会の活動が前に進みだした。その際に個人の意見を重視した丁寧な議論ではなく、多少強引にも作業を前に進めてしまったともいえるが、時間や言語的な制約を踏まえ、チーム全体の事を考えると適切な判断であったと思う。ゆえに「妥協しない」というのは、個々人が頑なに我を通すというではなく、チーム全体での成果に向けて妥協しないという意味であるべきであって、その大きな目的を達成するためには些細な事にはうまいこと妥協を重ねていかないといけないのである。つまり、JASCのような分科会の活動においては、いかにうまく妥協するかというスキルこそ問われているのだと思った。厄介な問題ではあるが、集団の中において個人は自分の役割を自覚し、何が目的なのかを常に問いかけ、適宜バランスを取らねばならないということを痛感した。

辻村志帆

私たちの分科会はエクストラ RT タイムを多くとった分科会だったと思う。ファイナルフォーラムが近づく以前から、夜のフリータイムを使うなどして議論を深められたため、本会議を通して有意義な RT の活動ができた。RT リフレクションでは、ファイナルフォーラムのために議論するのか、それとも、目に見える結論を求めずに議論をするのかという点で、意見の相違がみられたことも印象に残っている。結局この点に関して結論は出なかったが、問題を抱えながらもファイナルフォーラムを一丸となって成功させられたことは、良い経験になった。歴史教育という分科会のトピックに関しては、日中韓の学生がいたにも関わらず、とても穏便に議論を進めることができた。ただ、本音でディスカッションができたかと聞かれれば、そこには疑問が残る。互いに遠慮があったことは否めない。この原因の一部を、第二言語でディスカッションをしているという事実が担っているかもしれない。私たちの分科会には、英語が第一言語である学生が少なかった。程度の差こそあれ、第二言語である英語でディスカッションをすることの難しさを、各自が感じていたと思う。というのも、歴史教育というセンシティブなトピックでは、小さな誤解が大きな衝突を招くことがあるからだ。アメリカ側参加者は日本人の英語力に気を配って話してくれ、それはありがたいことであったが、同時に悔しくもあった。特にこちらがうまく説明できない時に、「日本語で話していいよ」と Translation を促されることは屈辱であり、絶対に英語で伝えようと思うとともに、自分の準備の足りなさを後悔し、今後

の英語学習への良い励みとなった。

矢島ショーン

第一サイト、アイオワ州デモインに近いGrinnell Collegeでの初顔合わせの瞬間が今でも忘れられない。初めて会ったのであるから、当然のようにみな少々固くなりながら、共に分科会を作り上げてゆくメンバーの様子をうかがっていた。分科会の活動は、各々が本会議に先立って書き上げたRT paperと呼ばれる報告書の内容の共有から始まった。それぞれが自分の興味分野について書いた報告書を元に議論を戦わせるのは、考え方の違いに触れることが出来、刺激的であった。一方で第一サイトのすべてをこれに費やしてしまい、ニューヨークにおいて時間に追われる原因になってしまった。時間が十分にある時こそ時間の使い方に気をつけなければならないと学んだ。第二サイトのサンフランシスコではホームステイやレセプション、シンポジウムなどに時間を取られ、分科会の時間を十分にとれず、最終発表のトピックを決めるまでにしか至らなかった。そんな状態で始まったのが最も過酷な第三サイト、ニューヨークであった。時間に追われる中で、パワーポイントや構造といった発表自体の準備と発表内容の議論が同時平行で進められ、公式プログラムが終わった後に深夜まで話し合うことが続いた。こうして、ほかのメンバーの大きな献身のおかげもあり、ワシントンD.C.での最終発表に間に合った。発表はプレゼン、質疑応答共にスムーズに行われ、成功に終わった。

私たちの分科会の最大の特徴は、本当に仲がよく、互いに信頼し合っていた点である。数週間前に初めて出会ったとは思えないほどである。これは二人のコーディネーターがいつもRTに情熱と愛を注ぎ、そして彼らが慎重に選んだメンバーそれぞれが愛すべきユニークなキャラクターを持ち、お互いを理解し合っていたからに他ならない。JASCで得たものは他にもたくさんあるが、この分科会に所属し、メンバーと時間を過ごせたことだけでも会議に参加した価値があった。そういっても過言ではないほど、最高の分科会であった。

■分科会総括

大沼　雄貴

「現代における歴史教育とその社会的影響」分科会は、昨年に日本にて開催された第65回会議中に在日アメリカ大使館で行われた歴史問題の議論から誕生した分科会である。日本が位置する北東アジア地域には尖閣諸島問題や従軍慰安婦問題など、国家関係を不安定化する原因となる歴史認識問題が未解決のままである。日米の学生が歴史問題について議論することで、問題解決のための糸口やきっかけを作りたいとの思いから分科会活動に取り組んだ。

幸いなことに、分科会の構成員は日本人、帰国子女、中国人、韓国人、ヨーロッパ系アメリカ人、アジア系アメリカ人、と素晴らしい多様性、そしてグループが多様にも関わらず素晴らしいチームワークや他者への気遣いをもつことのできるメンバーに恵まれた。この分科会での議論は、歴史教育やそれによって生じた問題に対して、出身のみの視点ではなく、国際的な視座を含めた多様なアプローチから取り組むことができたが、答えの出な

い問題に対して議論は一筋縄では行かなかった。議論の内容のみならず、分科会としてのゴールや議論の進め方でも衝突があった。それでもファイナルフォーラムと目の前に立ちふさがる問題に向かって、メンバー全員が深夜まで議論に取り組む姿を見て、歴史問題を引き起こす要因である国家や人種の枠を超えた「相互理解」を目にすることができた。多種多様な１人１人の人間とその数だけある価値観が、時に衝突し、時に共鳴できること、そして素直な自分を見せることができるのはJASCの最も素晴らしいことであり、そういった分科会を形作ることに寄与できたことは素直に嬉しかった。

南京出身のバックグラウンドと豊富な知識持って議論に大きく貢献し、常にみんなを和ませてくれたYang、異なる文化や考えによって衝突しても、その度に謙虚になって成長していったAmelia、その独特な雰囲気と冷静な視点で議論を良い方向に進めてくれたSung、いつも笑顔でみんなを癒して、日本側代表団とアメリカ側代表団の架け橋になってくれたLisa、議論での鋭い指摘とともに、いつも周りをよく見てみんなを気遣ってくれた志帆、歴史問題に対し強い危機感と熱意を持って議論に取り組んでくれた宗、困難に直面しても努力し続け、いつも最後まで寝ないでプレゼンや議論の準備をしてくれた美聡、素直に自分の持っているもの全てを注いでくれたショーン、そして分科会をいつも一番に考え、共に素晴らしい分科会をつくりあげたパートナーであるPramodh。このメンバーだからこそ大きな衝突を越え、忘れられない夏を実現できたと思う。

最後になりましたが分科会活動にご協力、ご指導してくださった皆様に心からの感謝を申し上げ、分科会総括とさせていただきます。本当にありがとうございました。

ワシントンD.C.での別れ際

正義と道徳

Morality and Justice

■分科会メンバー

古村大和*
上島万波
奥谷紘子
竹中智
野間雄大
Ken Panis *
Eliora Yokanan
Kasumi Kanetaka
Vanessa Cheuk
Yogeeta Chatoredussy
（＊分科会リーダー）

■分科会概要

人々の価値観は地域や文化、宗教など様々な要因によって形成され、それぞれの価値観により多様な正義が存在する。1994 年にルワンダで発生した大量虐殺が、深刻な人権侵害であるとの認識は各国一致していた。しかし人道的介入とは言え、軍事力を用いて解決することの是非については見解が分かれた。1 人の生命を犠牲にしても、多数の命が助かれば、その殺人は正当化されるのか。海難事故によって食料を長らく絶たれた 4 人は、その 1 人を殺害し遺体を食べ、3 人が生き延びた。そのまま 4 人が餓死するより、3 人が生き残ったことを評価する正義がある一方で、その行為を批難する正義もある。同じ事象でも、価値観が異なれば正義も異なる。これに対して、道徳は善悪を判断する規範として、誰もが共有できる普遍的な価値観たり得るのか。当分科会では、価値観を形成する諸要因を考察しながら、果たして相異なる正義が共存できるのか、道徳は普遍的に共有できるのか模索する。

■事前活動

<u>春合宿</u>

5 月に行われた 2 泊 3 日の春合宿。第 66 回日米学生会議日本代表団の一人として選ばれてから、初めてのイベントだった。会場へ向かう道中、これからどんな夢や情熱にあふれた人たちに会うのだろうと胸を躍らせながらも、自分の力がどこまで通用するのか、不安を感じつつこの先ともに精進していく仲間たちと顔を合わせた。自己紹介などを経て分科会の時間になり、より深くお互いのことを話していくと、今まで出会ったことのないような向上心と夢への情熱にあふれたメンバーに大きな衝撃を受けた。合宿中行われたアラム

ナイの方々との懇親会では、日米学生会議に参加したことで人生が変わり、現在グローバルな舞台で活躍するリーダーとなっていることを改めて知り、この伝統ある日米学生会議の一員となれたことをとても誇りに感じた。合宿を通して分科会で議論した「正義と道徳」の議論は、とても抽象的なトピックであったこと、自分たちの英語力の不足から、満足のいく発表を最終日にすることはできなかった。その後の活動へ向けて、強く決意を固めた機会となった春合宿だった。（野間雄大）

定例ミーティング

私達のRTメンバーは全国各地に散らばっており、ミーティングは全てオンライン上で行われた。その状況の中で、限られた時間の中で議論を如何に意味あるものにするか、そのためにはどのような事前準備がミーティングまでに必要かを考えることが非常に重要であったように思う。実際にとった手法としては、各々のトピックを設定し、各担当者が自分の担当分のプレゼンテーションを英語で行い論点を提示。その動画に対し他のメンバーがレポートを書いて共有しておき、その上でオンラインミーティングにて議論を行うという手筈であった。ミーティング後にはフィードバックレポートも共有した。（上島万波）

防衛大学校研修

多角的な視野を持つことの重要性」を感じた。特に防衛大学生との議論の際にそれを強く感じた。たとえばDefense Effortsに関しても、「誰の目線に立つか」によって、意見が180度異なる。防衛大学校の学生の目線に立てば、個人差はあるとは思うが「わが国の平和と国民の生命と財産を守るため」に、Defense effortsを増加させるべきと考えるのが自然だ。一方で、護憲派を始めとする反対派の目線と主張も把握しておかなければならない。また日本に限らずアジアそして世界に視野を広げてみれば、韓国や中国の批判、アメリカの思惑をも的確に理解しておかなければならない。このように、常に多角的な視点で議論を行うことで、より有意義な結論がでることを、防衛大学校生との議論を通して学んだ。これにより本会議においても、日本の視点に留まらず、米国側の視点や主張を深く理解しお互いの共通点を紡ぎだすことで価値的な議論をすることを心がけることができた。（竹中智）

直前合宿

分科会のメンバー全員が一堂に会するのは、春合宿以来のことであった。日本全国津々浦々、散り散りとなっていた仲間と再会する喜びを強く感じた日である。しかし、本会議は目の前にまで迫っており、悠長に近況報告をしている時間などない。対面で話し合えていなかった遅れを取り返すよう努めた。

直前合宿では事前の準備期間で議論した四つの論題を整理し、本会議に向けた計画表を策定した。それまではインターネット上で会議をしていたため、様々な困難があった。人数が増えれば回線は重くなり、そのスピードの遅さには苛つくことも多々あった。表情や微妙な声色の変化などが察知し難い環境であると、相手の気持ちが読みにくい。情報技術が大幅な進化を遂げる時代に、日米の学生が顔を合わせて寝食を共にする本会議。スカイ

プなどの情報技術を駆使したところで得られない付加価値があるからこそ、日米学生会議は代々続いていることを再確認する契機となった。（古村大和）

■本会議中の活動

第1サイト　デモイン

正直にいえば、みんな探り探りで何処かよそよそしい雰囲気が漂っていた第一サイトであった。仲良くなりたいけれど、どう仲良くなっていけば良いのかわからず模索しているような感じである。それも当然だろう。初めて会った人達と初めての環境でディスカッション。ましてや、違うバックグラウンド同士。議論以前にどう理解していけばよいのか分からぬままに、とりあえず議論をしてみるものの前途多難。方向性を模索し直す。そうこうする間にアイオワとお別れの日が来たといった所感である。しかしながら、私は第一サイトで私達が時間を無駄にしたとは思わない。恐らくどのRTも模索していたはずで、この模索こそが実はこの会議の醍醐味の始まりであったのではないかと思う。もちろん上手くいかなければ焦りや辛い気持ちを感じることもあるが、だからといって上辺だけで会話していては何の意味もない。アイオワの緩やかな風に吹かれつつ、今後の方向性に不安を覚えなくもなかった第一サイトではあったが、相互理解への挑戦への始まりであったと言えると思う。しいて言うならば、早い段階でもっと議論以外で互いを知る機会をしっかり作れたらよかった。（上島万波）

第2サイト　サンフランシスコ

本会議第2サイト、カリフォルニア州サンフランシスコ。移民やLGBTの全米でも最大のコミュニティがあり、多様性の町として知られる。私たちは、多様性パネルとして移民とLGBTについて学んだ。移民の講義では、主にアジア系移民を取り巻く歴史や新2世について学び、LGBTパネルでは、バイセクシュアルと、ゲイでありサンフランシスコにて同性婚をした本会議アラムナイとそのご主人を招き、カミングアウトや恋愛、家族との関係など彼らのLGBTとしての生き方と、LGBTがいかに現在の米国での権利を得たのか学んだ。普段学ぶことのないトピックであるため、各々が大きな印象を受けたように思う。現地の家庭でのホームステイも行われた。私はLGBTパネルで登壇されたアラムナイの方の家庭に滞在した。私は以前からLGBT問題に興味があり、自分なりに活動をしてきたが、同性婚を想像するのは難しかった。だが彼らと生活することで、結婚が平等であるべきだと改めて強く感じた。ホームステイ明けには、日米学生会議80周年レセプションが執り行われ、再び世界で活躍するアラムナイにお会いし、分科会の議論に参加していただいた。第2サイトでは分科会の課題・反省点も見え、後半へ向けて気持ちを引き締める機会となったと感じる。（野間雄大）

第3サイト　ニューヨーク

JASCの折り返し時点であった、ニューヨークサイト。私の分科会での議論も白熱し、仲が深まったからこそ深刻な亀裂も起こり始めた頃であった。私自身も、なかなか自分の意

見を、みなに上手く伝えられないもどかしさに悔しさを感じていた。そんな時、分科会ミーティングの前後において、他のメンバーと眠たい目をこすりながらそれぞれの率直な思いを共有することができ、改めて仲間の存在に感謝をした。特に、一人のメンバーとは、分科会内での人間関係において同じような悩みを抱えていたこともあり、じっくり話をすることができた。それまで自分の視野でしか、問題を把握できていなかったが、そのメンバーの話を聞く事によって、客観的に自分の置かれている状況を理解する事ができた。また、その時間によって、これまで知らなかったその友人の一面も垣間みる事ができた。(竹中智)

デモインのレストランで小休止

第4サイト　ワシントンD.C.

本会議を締めくくる場所はワシントン DC。大きな節目となるファイナルフォーラムを目前に、最後の追い込みを仲間たちと取り組んだ。心体ともに疲弊している中で、夜な夜な議論を交わす分科会。その姿を見守り、昨年の自分と重ね合わせた。参加者として臨んだ日米学生会議から早一年が経過し、自分はどこまで成長したのか。実行委員としての活動を振り返る契機となった。

ファイナルフォーラムを乗り越えた分科会の面々、その顔は晴れやかであった。ある種の義務を果たし、責任から解放されることによって肩の荷が下りたのであろう。たくさんの問題を抱えた分科会であったからこそ、心から「お疲れ様」と伝えたかった。それからの数日間、各々が自由に交流する光景が見られた。分科会の垣根を超えて、気の合う仲間と、関心のある話題を、徹底的に突き詰める時間。残された僅かな時間を最大限に活用し、悔いを残さないよう抗う様は最終サイトならではの「JASC らしさ」であった。(古村大和)

ファイナルフォーラム

当分科会において、ファイナルフォーラムは重圧以外の何者でもなかった。本会議の序盤は「正義と道徳」の抽象性に混乱し、議論の方向性を定められずにいた。中盤では、個々人の衝突や体調不良によって、十分に話し合う時間を持てなかった。全員で力を合わせ、前進を始めたのが相対的に遅かったように振り返る。そのため、日に日に迫る発表の機会は私たちを焦らせ、追い込んだ。しかし、それに必死に立ち向かった。

一丸となり、睡眠時間を削りながら議論を交わした。日米の道徳教育について見聞を深め、それぞれの正義感をぶつけ合った。誰かが倒れたときは、それを全員で補った。不器用ながらに、全力で駆け抜けた分科会の姿が思い出される。最終的には、きちんとファイナルフォーラムの舞台に立ち、各々が情熱に満ちた眼差しで発信する様子が見られた。平

坦な道のりではなかった。それでも最後まで諦めず、重圧に抗いながらやり遂げた当分科会の面々を誇りに思う。（古村大和）

■　分科会感想

上島万波

正直にいって、私達のRTは他の何処のRTよりの問題を抱えたと思う。しかしながら、同時に何処のRTよりも心の底からメンバーと向き合おうともがき続けたと言えるとも思っている。その証拠に、議論に苦しみ続けていても、最終サイトDCにつくころにはすっかりみんな仲良くなって、ファイナルフォーラム後には確かに絆を感じたからである。

話を戻そう。私達が今回の会議でまずぶつかったこと。それは、正義と道徳というトピックの議論の難しさである。春合宿でまず、正義と道徳とはそもそも何なのかを頭が沸騰しそうなほど考え議論し、如何にこのトピックにおける議論が難しいかを実感した。私達は皆、専門知識を持たない学生である。そんな私達がどう議論を展開したら、より意味のあるものになるのか。その答えを出し切れぬ中でも事前準備及び議論を重ねて、本番に挑んだ。

日本人同士の議論でも難しいこのトピック、当然本番も方向性を決めるのに大変難航した。結果的に、道徳概念を形作る重要なファクターに教育があると考え、日米の道徳教育を比較する形で議論を進めた。その際実際の道徳教育の現状を知ることは欠かせなかったため、文献を読み、現状を知り、そこから議論を深めていった。方向性が定まったことにより議論における共通意識が生まれ、ニューヨークサイト以降毎日深夜に及んだ議論は深く意味のあるものになっていったと思う。他のRTとはタイプの違った議論であったとは思うが、その内容ややり方は、議論点を何処まででも掘り下げ、面白かった。

私自身が一番直面した問題は、語学及びそれに伴う相互理解の難しさである。皆が議論に苦しみ続ける中で何とか自分の役割を見出さなければならないと思えば思うほどドツボにはまっていった感が強く、会議が終わりしばらくたった今でも自分の現時点の能力を持ってして、どうRTと向き合うのがベストだったかを判断できないでいる。

今振り返って、正義と道徳RTでの議論は、辛いことも苦しいことも悩んだことも沢山あったけが、だからこそ学んだことも多く、自分を、周りを、社会を、実に様々なことを考えさせられる大変良い機会であった。この経験を今後に生かすと心に誓った。

野間雄大

遡れば、日本側参加者たちは春合宿から本格的に分科会活動を始めてきた。私の所属した分科会は「正義と道徳」。非常に抽象的であり、ある意味あらゆるトピックについて議論できるものである。このトピックの議論の難しさに春合宿で気づき、それぞれが議論したい正義と道徳に関わる例を挙げるという方向性を見出したが、アメリカ側メンバーと合流し、議論を始めることで、また議論の方向性を見失うこととなった。

まず我々は死刑制度について、賛成反対に分かれディベートを行った。このようなトピックについて英語で議論するのは初めてでも

あり、やはりアメリカ側メンバーの方が議論では言葉の面で優位になるため、議論についていくのが難しく、議論が十分に理解できていない状態では自分の意見を議論の流れから整理し発言するのは難しいことだった。自分の英語力の不足にフラストレーションを持った状態でサンフランシスコへ移った。

サンフランシスコでは自身の分科会へのコミットメントが足りないことに気づきつつも、どうしたらいいのか、言葉の壁に苦しめられ、そのほかの分科会の課題も浮き彫りとなり、分科会リフレクションを行った。それまで本音をぶつけることを避けていたが、その時はそれぞれが正直になり、本音をぶつけ合い、分科会の課題について考えた。その結果、議論の質も以前と比べて良くなり、見えずにいた分科会のゴールを「道徳教育」という形で見出すことができた。

ニューヨークでは、ファイナルフォーラムが近づいてゆく少ない時間の中で、夜も遅くまで議論は続いた。皆が体調を崩しがちになったのもこの時期で、お互いカバーしつつ、協力してファイナルフォーラムへと着実に進んでいった。

最終サイトのワシントン DC では、ついに「理想的な道徳教育」を提案する形で分科会活動の集大成を終えることができ、全員で一丸となって、葛藤や対立などたくさんの辛いこともあったが、一つの目標に向けて支えあったことで、強い絆を構築することができたと実感した。

竹中智

「意見を発する勇気」と「意見を受け入れる思いやり」をこれでもかという程問われた1ヶ月間であった。語弊を恐れずに言えば、留学時代や就職活動を含む、今まで経験したどのグループワークよりも難しく、フラストレーションがたまり、苦労をした。しかし言い換えれば来春からの社会人生活を直前にして、このような「挫折経験」をすることができたことが、何よりの財産であるとも思う。

まず「意見を発する勇気」についてである。アメリカ側の参加者と議論する際に常に求められた事は、私にしか持ち得ない意見を、勇気を持って主張する事だ。これに関して、渡米前から頭では分かっていたつもりだが、いざ本番となるとほぼ全くできず悔しい思いをした。意見の根拠や裏付けを論理的に説明する事ができない、つまり感情しか伝える事のできない幼稚な英語力も確かに問題である。しかしそれ以上に、いかなる時も自分の意見に自信を持って、それを堂々と他者に伝えるという基本的な姿勢ができていなかったことを痛感した。ただ、この1ヶ月で嫌という程、その勇気を試される環境に身を置けた事で、今後の仕事においては必ず改善していけると確信する。

次に「意見を受け入れる思いやり」だ。私は、人の意見を相手の立場に立って聞けるようになる事を、JASC における一つのゴールと定めていた。しかしその達成には想像以上の努力が必要であった。10 人の分科会メンバーがいれば、10 通りのコミュニケーションの形がある。例えば、アメリカ側の一人のメンバーは私に対して、冗談まじりに分科会に対する不安や不満を直接相談してくれていた。しかし私は個人の課題に四苦八苦していたこともあり、彼女のうわべの笑顔やジョークだけ

を信じ込み、思いやりを持って接する事ができなかった。そして最終的に彼女の感情の爆発を招く結果となった。この経験から、どのような意見であっても、それを発する側の意図と隠された本音を想像しながら話を聞く姿勢を学んだ。

このように私の JASC は決して順風満帆なものではなかった。しかしだからこそ、そこから反省をし、来るべき次の機会までに徹底的に努力をする原点となったと考える。

■分科会総括

古村大和

正義と道徳分科会の本会議を一言で表現するならば「波乱万丈」が最も適切であろう。当分科会は不器用に、しかし、全力で抽象性の高い論題と向き合ったと誇りを持って振り返る。

分科会発足当初から「正義と道徳」と言った抽象的な単語に頭を悩ませた。両単語の定義は日本人間でも多種多様であり、文化の異なる米国では尚更千差万別の答えが予想される。共通の意味を見出せない言葉について、果たして深みのある議論が可能なのか。本会議前の準備期間はせめて、日本側の代表団だけでも共通の解を見出せないか模索した。

しかし、この過程もまた困難の連続で、結局渡米するまでに「正義と道徳」と言った概念の確固たる理解には至れなかった。

そして、迎えた本会議。死刑制度の議論から幕を開けた当分科会は、一見順調に進むかのように思えた。しかし、議論は次第に「人を殺してはいけない」など、当たり前で空虚な結論に辿り着いては思考が停止していた。一歩先に進むためには、その常識を破ってでも守りたい感情や信念について語ることが必要であった。がしかし、それを語り合うには強固な信頼関係が不可欠であり、本会議の前半にそれはまだ醸成されていなかった。核心に触れない、どこかもどかしい議論を一週間続けたメンバーは「日米の道徳教育」と言う新たな議題を設定し、方向性を固める。両国の道徳教育を通じて、お互いの価値観の根底にある「正義と道徳」を考察する狙いだ。

ようやく議論も活発してきた会議も終盤、今度は議論の内容のみならず、その方法、また各構成員の態度について不満が続出した。皆が皆、己の主張を貫こうとするあまり、分科会の中で正義の衝突が起きていた。しかし、怒りの告白や涙の話し合いを経て、一つにまとまろうと藻掻く姿にこそ、私は正義と道徳分科会の真価を確かめたと感じている。最終的にはファイナルフォーラムの発表を通じて一体感を強め、一つの組織として機能することができたように思う。

衝突なき相互理解は当然理想的である。しかし、異なる価値観を理解し、心から受け入れることは容易いことではない。日米学生会議発足当時からの理念である相互理解を実現すべく、本気の対話という困難に立ち向かった分科会メンバーを私は誇りに思う。順風満帆に進まない議論もまた、相互理解を目指す日米学生会議の醍醐味であり、学生らしい分科会であったと言える。円滑な話し合いではなく、大人ぶって譲歩することもなく、とことん互いに組み合った経験は、正義と道徳分科会の全員を大きく成長させたと確信している。

ワシントン DC にて、将来の活躍を誓う

日米関係におけるスマートパワー

Smart Power in US – Japan Relations

■分科会メンバー

大西由起*

近藤直佑

澤隼

藤井一衆

村井咲絵

Norihito Naka*

Eve Gillison

Hannah Jun

Isaac Min

Takeshi Hidaka

(*は分科会リーダー)

■分科会概要

世界のパワーバランスは急激に変化している。アジア太平洋地域では、中国の軍事的台頭と海洋進出により、南シナ海における領有権問題や尖閣諸島問題などの対立が顕在化し、政治的緊張が高まっている。こうした中、自国の文化や価値観、政策の魅力などで他国を味方につけ、自らが望む結果を獲得できる「ソフトパワー」が注目されている。しかし軍事力や経済力などの強制力を持つ「ハードパワー」も依然として無視できない。従って現実の国際社会では、ソフトパワーの限界を認識しつつも、両者を巧みに組み合わせた「スマートパワー」の活用が有効である。即ち相手から信頼や共感が得られるソフトと圧力をかけるハードの双方を、戦略的にバランスを取りながら行使することが重要となる。当分科会では、アジア太平洋地域の平和と安定のために、両国がどのようにスマートパワーを活用して日米安全保障体制の強化をはかるのか、そして経済連携や文化交流を推進していくのか考察する。

■事前活動

<u>春合宿</u>

自分たちのRTは最初から多くの情報のアウト

プットに力を入れた。スマートパワーは比較的新しい概念だということもあり、取っ付きにくい部分は当然あった。しかし、違う大学・学部・学年の者が集まり、それぞれの思いや考えを出し合うと話は進展するのだなと思った。周りと違う考えを持つことは大切であるが、それを活かさなくては意味がない。表現がうまい者、知識を持った者、これから何かを生み出す意欲のある者、追究心のある者などSPRTは多様な人々の集まりである。RTでは自分たちの知識に限界があり、壁に打ち当たった時も、視点を変えたり、発想を逆転したり、調べたりとアプローチを変えて話し続け合った。ただ立ち止まることを知らずにひたすらアイディアを考え、まとめ、次につなげられるように常に頭がフル回転していた。春合宿は時間的に余裕もあり、多くの話が展開され、多くの収穫があった（藤井一衆）

春合宿最初の集合写真

定例ミーティング

春合宿を終えて、二週間に一度のペースでミーティングをスカイプなどを通して行った。ミーティングで取り扱ったことは、フィールドトリップや防衛大学に向けての事前学習や各自が調べたことを共有するなど、多岐にわたった。幸いなことに、私たちの分科会はフィールドとリップに恵まれた分科会だったので、フィールドトリップに向けての事前準備に力を注いだ。フィールドトリップを行うことで、安全保障政策や外交政策に携わっておられる方々に、本会議に役立つアドバイスや知識を授かった。また、本会議が近づくにつれて、各自興味や関心がある分野について勉強して、ミーティングで発表する勉強会を定期的に行った。各自、太平洋の平和を模索した結果、欧州連合のようなアジア・太平洋の国際機関を設立することとパブリックディプロマシーを効果的に使用するなどという考えが浮上した。（澤隼）

防衛大学校研修

防衛大学校の学生とディスカッションをして一番驚いたことはJASCerとの「観点の違い」である。私達は「日米関係におけるスマートパワー」を考えていく上で、日本とアメリカの二国間におけるスマートパワーを考え、話を進めており、その中で日米同盟もパワーの一つになるという考えを持っていた。しかし防衛大学校の学生は、日本とアメリカが日米同盟をもって協力し、第三国との関係におけるスマートパワーという観点でプレゼンテーションをしてくれた。イラク戦争を例に、「日米同盟を組むことで、日米の二ヵ国がソフト

パワーとハードパワーをそれぞれ分担する事は可能か？」など新しい切り口でディスカッションができたのは大きな収穫だと思う。今まで自分達が持ってきた見方も大切にしながら、防衛大学校で得たもう一つの観点についても、もっと調べていきたいと思う。（村井咲絵）

防衛大学生との分科会討論

森本敏氏　元防衛大臣訪問

「安全保障政策は、他の学術分野と大きく異なる。リスクを取れない政策だ。」この言葉は、今講演会で最も印象に残っている言葉である。前防衛大臣として、日本の安全保障政策に携わられた森本先生から、日米同盟を中心とした米国の安全保障政策を伺った。米国はオバマ政権の外交政策である「リバランス政策」と米国内の財政的な理由により、アジア・太平洋における日本を始めとする米軍の再編を進めている。在日米軍基地の編成に伴って、我が国が担う役割も変わってくるだろう。不平等な同盟だと言われ続けている日米同盟を見直す転換期が来ているのかもしれない。現在、国会で集団的自衛権の行使の是非が審議されている。日本が集団的自衛権を行使できるようになれば、我が国はアジア・太平洋地域の平和により一層貢献できるだろう。また、本講演会を通して、日本が米国にとっていかに重要な国かということを痛感した。米国の同盟国として日本は、自由市場主義・民主主義といって価値を共有している。日本と米国が中心となることで、自由市場主義と民主主義といった価値観をアジア諸国に拡散できるだろう。森本先生の話を伺って、アジア・太平洋地域における日本と米国の影響力について理解が深まった。（澤隼）

細谷雄一氏　慶應義塾大学教授訪問

私が企画したＦＴの一環で、慶応大学三田キャンパスにて法学部政治学科の細谷雄一教授に小規模な講演を行ってもらった。参加者は私の他に小松崎、藤井、澤、岡崎、光本が参加した。講演では主に、ソフトパワーに対する考え、憲法九条改正の必要性、東アジア統合に対する見解、中国の台頭に対する日本のアプローチなどについて、話して頂いた。講演では、教授は理路整然と自らの考えを私たちに話してくださり、質問に対しても具体例を用いた明快な解答を下さり、参加者一同教授の考えをすっかり鵜呑みにしてしまった。そしてその後のRTミーティングでも教授の考えに何の疑問も持たずに準備を進めてしまった。しかし、本会議でアメデリと講演での内容を議論した際、アメデリの批判的な着眼点

や疑問により、自分たちジャパデリがいかに思考力に欠けていたのかを思い知らされた。どんなに分かり易く、理路整然とした主張にも、頭を使い批判的に捉えていくことで、より高度な議論ができるということを実感することができた。（近藤直佑）

田中均氏　日本総合研究所

七月中旬に SPRT(スマートパワー分科会)は外務省にてアジア太平洋局長や外務審議官などを歴任し、現在は国際戦略研究所事理長である、田中均先生による講演を聞くことができた。今回は主に SPRT 内で長らく話されていたアジア統合の実現可能性を主に聞くことで SPRT 内での議論がより発展することを可能とした。田中先生によると、アジアで共同体を創設することが難しいのは欧州連合とは異なり、各国の違いが多すぎる点を強調した。アジア地域共同体を達成するためにはその他に関税撤廃や経済統合、海賊やテロ予防などの非伝統的安全保障分野での協力関係が不可欠だと主張。更には東南アジア諸国連合(ASEAN)を中心とした、強国によらない運営体制でないと中国の協力が得られないとも加えて強調した。ハード又はソフトスタンスのみでは隣国との関係を築けないことを意識しなくてはならない。この講演後、私はスマートパワーが重要な対外政策であったとしても成功させるためには長期的な戦略と戦術、そして繊細が故に慎重な作戦と執行力が必要であることを改めて認識した。（藤井一衆）

直前合宿

五月に行われた春合宿から約三か月、二日後には渡米し本会議が始動するという緊張感の中、直前合宿は始まった。JASC 特有のハンドサインや会議でのふるまい方が分からず、また友達と言える友達もまだできていなかった春合宿とは打って変わり、直前合宿では本会議で全力を尽くすという共通の目標を胸に持ちつつも、打ち解けた雰囲気が漂っていた。合宿では各々の準備期間に行った研究、FT などをもとに議論を深め、プレゼンをし、質疑応答を行った。最終日のリフレクションでは各々の率直な思いをぶつけ、合宿を締めくくった。私が直前合宿で感じたことはただ一つ、参加者全員の知的好奇心の高さである。よそよそしい雰囲気の中行われた春合宿では見られなかったが、直前合宿ではみな準備期間に研究した事柄や、普段の学習について時間、場所を問わず（時には風呂場でも）積極的に議論していた。私はこんなに知的好奇心が旺盛でいつでも疑問に思ったことや興味を持ったことを真剣に話し合える環境にここから約一か月身を置けることに胸を躍らせていた。（近藤直佑）

■本会議中の活動

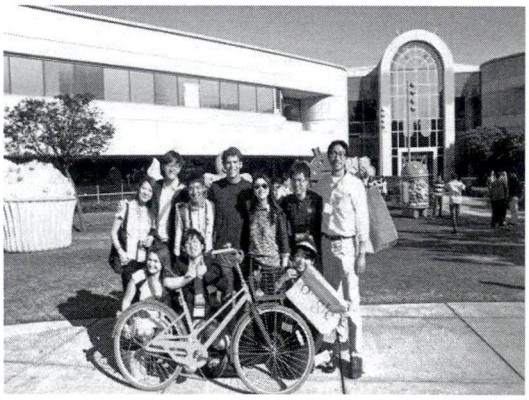
第1サイト　デモイン

本会議最初の開催場所はアイオワ州のデモインであった。このころはまだ日本側参加者

もアメリカ側参加者も完全に打ち解けることはできていなく、みな居心地の良い仲間と時間を過ごすか、無理をしてでも取り繕った笑顔で仲良くなろうと必死であった。RT ではまだお互いのことを知らないせいか、当初は活発な議論が起こらず、みな様子見というような形で、口数は少なかった。しかし、2，3 日も経てば、お互いの気心もそこそこ知れ、活発な議論が始まる準備が整っていた。このころになって私が気づいたことは、アメリカ側参加者の積極性である。アメリカ側参加者は日本側参加者と仲良くなり、ミーティングの回数をこなすにつれ、議論で自分の立場、見解を述べる姿勢が強くなっていった。しかし一方で日本側参加者の多くはその積極的な姿勢に圧倒され、口数は少ないままであった。この時私は自らの立場を主張することの必要性、そして日本人がいかにそのことに対して不慣れであるかを思い知らされたのである。（近藤直佑）

第2サイト　サンフランシスコ

サンフランシスコサイトは、ホームステイや企業訪問等も多くあり実際の分科会活動は限られていたが、ファイナルフォーラムの成功へ向けて、私達 SPRT にとっては重要なサイトとなった。前サイトでの分科会活動は主に「お互いに持っている情報の発信」を行っていたが、それが段々と「相手の持っている意見への賛同／反論」へ変わっていったことが当サイトでの最も大きな進歩であろう。しかし議論が白熱すると同時に、私個人としては英語力という大きな課題を突き付けられたサイトでもあった。また議論が議論らしくなるにつれ、お互いの考え方や前提の違いに気づき、なかなか前へ進まない時期もあった。そんな状況を打開するきっかけとなったのは、アラムナイ RT Time だった。分科会メンバーではなく第三者の立場から意見をもらうことで、自分達に見えているもの見えていないものがはっきりした。アラムナイ RT Time で議論した「2020 年東京オリンピックと対外関係」をファイナルフォーラムで扱ったことからも、結果としてこの RT Time は非常に有意義な時間であったように思う。（村井咲絵）



グーグルツアーでの集合写真

第3サイト　ニューヨーク

第三サイトのニューヨークは、分科会の時間が毎日設けられていた。分科会での議論は、ファイナルフォーラムをどのような内容で発表するのかについて多くの時間を費やした。

各分科会のメンバーが、本音や思いの丈をぶつけあった。本会議を振り返って、この第三サイトで、分科会のメンバーがお互いにどのような思いで日米学生会議に参加しているか、また、どのようなことについて焦点を当てて議論していきたいのかということについて理解が深まったように思える。最終的にファイナルフォーラムでは、東京オリンピックについて焦点を当てることにした。ファイナルフォーラムに向けて、日本側代表団とアメリカ側代表団一人ずつからなるグループを構成して、東京オリンピックが日米関係にどのような影響を与えるのかについて調べた。（澤隼）

第4サイト　ワシントンD.C.

私たちが第四サイトとして訪れたのはアメリカ合衆国の首都であり、第66回日米学生会議で訪れる最後の都でもワシントン D.C.である。この地で大詰めを迎えるにあたり、各分科会がその成果を外部へ発信する機会であるファイナルフォーラムが開催された。ソフトに始まった本会議は、中間で一時は緊迫した空気になりながらも、ファイナルフォーラムまで刻々と時間が迫る中で、分科会メンバーは今までよりもより多くの時間を共にし、最後は強固で密接な連帯感を作り出せたのではないだろうか。無事にファイナルフォーラムが終了しても本会議が終わるわけではない。次期、つまり第67回日米学生会議実行委員選挙が行なわれた。各立候補者がどういう思いで立候補したのかは来年の参加者が肌で感じてほしい。そして、24 日に本会議は終わりを告げた。だが、忘れてはならないのは、本会議が多くの人々から学ぶと同時に社会に還元することで、多くの人々及び社会に影響しており、それを安易に考えてはならないことである。（藤井一衆）

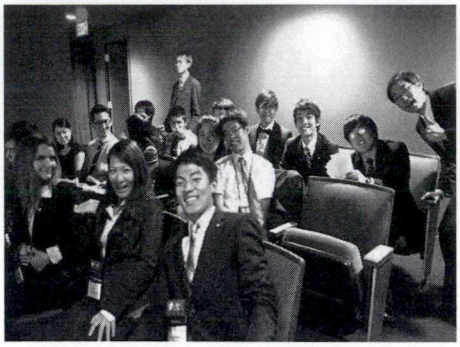
ファイナルフォーラム

5月から始まった事前活動から約4か月。本会議では米国側参加者と共に、何十時間と議論に費やしてきた。そんな日米学生会議の軸である分科会活動も、ファイナルフォーラムで与えられた発表時間はたったの10分。一人あたりの持ち時間は1分15秒。不安や期待、恐怖、感動、葛藤。今まで各々が感じた全てをこの1分15秒に凝縮させた。

私達は「2020 年東京五輪を利用した日本の再活性化」をテーマに、東京五輪を通して日本のイメージがどう変わるか、再活性化を成功させるためには日米両国がどういう対応を取るべきか、などを発表した。

メンバー全員にとって 100%満足のいく発表だったとは思わない。しかし満足のいくプレゼンテーションをすることが最大の目的なら一人ですればいいのであって、目的はそこではない。8人で何度も何度も議論を重ね、お互いが少しずつ案を出し、反論し、妥協して行きついた結果が今回の発表だった。衝突し、一人一人が孤独を感じつつも、準備に励んだ。

そんな中でのこの発表こそが、日米学生会議ならではの醍醐味ではないかと思う。（村井咲絵）



ファイナルフォーラム前

■　**分科会感想文**

近藤　直佑

私が本会議を通じて最も強く感じたことは、自分に思考力が欠如しているということと、視野が狭いということである。それぞれの開催場所で用意されていた講演、イベントでは必ずと言っていいほど毎回、質疑応答の時間が設けられていた。当初、私は疑問に思うことが無ければ、わざわざ手を挙げて質問する必要なんて無いと思っていた。しかし、講演の回数をこなすにつれ気づいたことは、毎回手を挙げる人は大体決まっており、彼らの質問や講演に対する自分の意見や疑問は、彼らの視野の広さや思考力の高さを感じさせるものであった。そしてよくよく考えてみると彼らのうちの一人は、私と同じ分科会に属していて、常に議論を前進させたり、新たな視点を提起したりする存在であることに気づいたのだ。私はその時、漸く疑問に思うことが無いことこそ、自分の思考力の低さ、そして知識が浅薄であることを証明していることに気づいたのである。私はこのことに気づいて以降、講演を聞くたびに疑問点を見出さそうと精を出したが、どう思考をめぐらしても、インターネットで調べればすぐわかってしまうような知識的な疑問点しか思いつかなかった。これにより、益々自分の能力、努力不足を痛感することになった。また思考力や知識量は一朝一夕には身につかないということも身に染みて実感することができた。この経験こそが、自分よりもはるかに学力的に優れている人たちの存在を認めるきっかけとなっており、またそのことが帰国してから日々の生活を改める原動力となっているので、自分にとってJASCを通じて得られた最高のものである。

澤　隼

日本とアメリカがアジア太平洋地域の平和に貢献すればいいのかについて、アメリカ側代表団と議論したい。これが、私がスマートパワー分科会を志望した一番の理由である。昨今、アジア太平洋地域でのパワーバランスが著しく変化している。中国の台頭や北朝鮮の核兵器開発が、その最たる例である。分科会での議論を通して、日本の国際社会での役割とアジア諸国の日本とアメリカ関係について深く考えさせられた。アメリカ側代表団と議論して常に感じたことは、日本のプレゼンスの低下やアメリカ外交の内向きが顕著にな

っているということだ。これからアジア太平洋地域の安全保障を考えていく上で、アジアの国々と日米は協力することが重要だ。また、本分科会ではソフトパワーについて多く議論できた。日本の文化や価値観が国際社会でどのような評価を受けているのかを考えることができた。本会議を通して、分科会のメンバーとは、安全保障や政治といった学術的な話から日本やアメリカの価値観といった幅広い分野についてディスカッションした。このようなディスカッションを通して、彼らたちの性格や価値観を知ることができた。彼らと過ごしたディスカッションの一秒一秒が、本会議の一番の宝物である。次に彼らと会う日まで、成長した自分を見せるために精進したい。

藤井　一衆

「日米関係におけるスマートパワー」は一見どういうものなのか、わかるようで実は幅広い分野なのだと四月から始めて八月の最後に思い知らされた。普通に連想される日米関係や安全保障分野とは大きく異なり、スマートパワーは軍事のみならず、経済や文化、歴史など多くのことを踏まえた上で議論を展開することが求められている。渡米前、本分科会がフォーカスしていたことは「太平洋の平和」だったが、主にどのようにすればアジア統合機構が創設できるのか、どうすれば中国との協力関係を築けるのか等を中心に議論が進められ、専門家を尋ねた時もその実現可能制について言及した。しかし、渡米してアメリカ側参加者と初めて議論をした日、本分科会は一気に方向転換することになったのである。私たちは英語という言語的な障壁を感じる以前に、議論の展開が神速ともいえるほど早さで展開されたことに驚きを隠せずにいた。私たちがこれまで話してきたアジア統合は見る影も無く消え去り、同時に参入してきた「2020 年の東京オリンピック」や安倍政権が七月に行なった憲法解釈変更や集団的自衛権行使の閣議決定、アジア諸島紛争など主に日本がメインとされるテーマについて時間を割くことになったためだ。ここに来て私は初めて自分たちがいかに狭い視野で話を進めて来たのかを実感した。その後は本会議を通して幾度か太平洋の平和についても議論を展開させ、アメリカ側にも私たちが準備してきた内容を共有し話し合った。最終的にファイナルフォーラムではオリンピックや憲法改正をメインに発表することになったが、それまでの過程でお互いに自分たちが勉強してきた分野についての共有、相互理解を深めたのは間違いない。時には衝突もあったが、掛替えのない仲間と最も濃密な時間を過ごして議論することこそが日米学生会議の意義であり、それを本分科会は達成出来たのではないかと私は思う。最後に私たちを陰ながらサポートしてくれた二人の分科会コーディネーターに心から感謝の意を表したい。波のあった分科会だったかもしれないが最後まで導いてくれてあ

りがとう。

村井　咲絵

スマートパワー分科会に所属したことによって、自分が今まで見ていた、感じていた狭い視野がぐっと広がったことが一番大きな収穫であった。これまでa広島という小さな世界で18年間生きてきた私は、自分と似た意見に触れることの方が圧倒的に多かった。大きな衝突なく議論をすることが殆どであり、私の中では「自分の“当たり前”」が「皆の“当たり前”」になりつつあった。しかし日米学生会議は違った。スマートパワー、特にハードの面を扱う際には、分科会メンバーそれぞれの意見の違いが顕著に表れていた。そして「どうしてそう考えるのか」「なぜあなたはそのトピックを扱いたいのか」など質問攻めにあい、自分の意見を根本から考えなおす機会となった。また当分科会は一人一人が強い意見を持っている故に、衝突や言い争いの多い分科会でもあった。「スマートパワー」という中身に対する議論の衝突よりも「それぞれの考え方」に対する衝突の方が多かったことからも、生活環境や受けてきた教育によって人の意見は全く変わってくるということを、身をもって実感した。しかしそういったトピック以外の議論も含め非常に白熱した分科会であったことは確かである。

自分と違う意見に触れることは、私が日米学生会議に応募したきっかけであり、日米学生会議に対する期待でもあった。その点においては私の期待や目標は達成されたと思う。しかしその議論は無論英語で行われていくのであり、聞くこと・理解することで精いっぱいで、自分の意見を的確なタイミングで語弊なく伝えることができなかったのは自分自身の反省点である。スマートパワー分科会は、英語力の高い日米学生会議の中でも特にレベルの高い分科会であったように感じる。もっと英語力を身に着けたい、もっと自分の意見を論理的に言えるようになりたい、そんな課題を、この分科会を通してよりはっきりと意識することができた。

■分科会総括

大西　由起

「スマートパワー」とは、ハーバード大学のジョセフ・ナイ教授によって提唱された、いわゆる軍事力や経済力の「ハードパワー」と価値観や文化の魅力である「ソフトパワー」を掛け合わせた比較的新しい概念である。例年、「安全保障」が日米学生会議の伝統的分科会テーマとして取り上げられているが、第66回には、安全保障を新たな角度から模索するため、スマートパワーに注目した。確かに、表向きでは「日米の安全保障」、「アジア太平洋地域の平和と安定」がキーワードとして挙げられたが、私自身としては、既存の概念にとらわれず、学生ならではの柔軟な視点で議論を進めて欲しいという願いがあった。

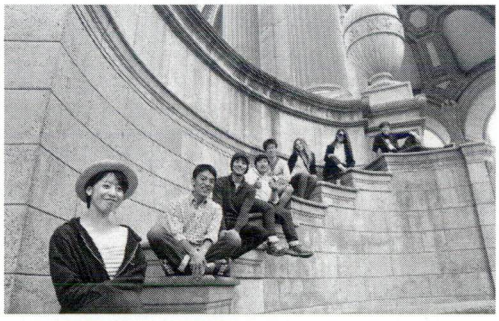
日本側の学生による事前準備の段階では、

安全保障やハードパワーの議論が多く展開された。それぞれが分科会に対して強い思いを持ち、互いの持っている知識や意見をぶつけ合い、議論を深めていった。フィールドトリップでも、参加者自らお話を聞いてみたい講師の方とアポイントを取り、お会いする事ができた。ミーティングでは、参加者が個々の関心のあるトピックを提示し、それに関するディスカッションが行われた。チームとしてはハードパワー色が強かったが、ここでパブリック・ディプロマシーや広島の平和活動に着目する者もいて、決して万全ではないが“スマートパワーらしい”準備をすることができた。

本会議では、「さすが、日米学生会議」とも言えるほど、おもしろい展開となった。日本側では、ある程度チームとして内容が固まった状態で本会議に臨んだが、アメリカ側から全く違う提案がなされた。それは、オリンピックをスマートパワーとして捉え、2020年の東京オリンピックを中心に日本の再活性化について考察することであった。日本では主にアジア統合について議論が進められたが、アメリカに来てスポーツの祭典という全く別の視点から話が進み始めた。白熱する議論に、次々と発言するアメリカ側参加者に対して、日本人側は戸惑い、自分の意見を中々言えず、ぎくしゃくする場面もあった。だが日が経つにつれ、「これではmutual understandingにはならない」と参加者が自分の思いを相手にぶつけ合い、チームとしての一体感も出てくるようになった。

ファイナルフォーラムでは、2020年東京オリンピック向けて、ハードパワーとソフトパワーを活用した新しい安全保障政策を提案した。我が分科会の発表に対して、「オリンピックを起点に考える政策は今まで考えつかなかった」と在米日本大使館の方からも評価を受けた。まさに、国家間を超えた学生会議ならではの結論を出す事ができた。順風満帆な分科会活動ではなかったが、最後にチームとして、ひとつの政策を提言できたことは、分科会リーダーとしてとても誇りに思う。この活動を通して得た経験や知識、そして出会った人々を大切にし、SPRTが少しでも彼らの人生の糧となることを願っている。

最後に、ご講演を引き受けてくださった森本敏様、細谷雄一様、田中均様、Dr. Henry Nau、また、スマートパワー分科会活動を応援してくださった全ての方々、そして何よりも私のパートナーであるNorihito Nakaに心からの感謝を申し上げ、分科会の統括と致します。



Palace of Fine Artsでの一枚

技術進歩と社会

Technological Advancements and Society

■分科会メンバー

木村優吾*
岡崎琹
北原吉泰
小林勇貴
松井友紀
Sharon Lu*
Konoka Kelli Shiino
Jessica Shindo
Harrison Bade
Minh Hoang
（＊分科会リーダー）

■分科会概要

人類は技術を駆使することによって利便性や効率性を高め、より良い世界を作りあげようとしてきた。インターネットはコミュニケーションにおける時間と距離の障壁を大幅に縮小させた。しかし、我々の生活に深く浸透した結果、膨大なネットワークに集まった個人情報や国家の機密情報を狙うサイバーテロが社会を脅かしている。医療技術においては、胎児の遺伝子から先天性異常を調べる出生前診断の技術の進歩により、以前に増して精度が上がり、流産の危険性も少なくなった。しかしより確かとなった障害の可能性を危惧して、胎児の人工中絶が行われる恐れがあり、再び生命倫理を問うことになった。このように、技術の進歩によって生活はより便利になったものの、同時に疑問も投げかけなければならない。技術の進歩によって人々は幸せになっているのだろうか。当分科会では、技術進歩が社会にもたらす功罪を様々な実例に基づいて検証し、技術とどう向き合うか、どのように活用するかを考察する。

■　事前活動

春合宿

春合宿のRTではメンバーから様々なテーマの提案がでました。最初はどんなテーマについて議論するかについて話し合いました。皆様々な分野においての知識や興味があり、絞り込むのも大変でしたがそこでお互いのことを知ることができました。時間はかかりましたが、たくさんの選択肢から幅広い視野で選ぶことができてよかったと思います。また、

議論していく中でテーマの様々な論点をあぶりだすことができ、複数の違った意見が出てきたことによってこれからますます議論を深めていく道しるべを立てることができたと思います。時間の区切りと明確な目標がなかった分、皆思う存分自分の意見や興味について話し合うことができたよい土台作りができたと思います。（松井友紀）

定例ミーティング

「技術進歩と社会」の分科会では週に1回hangoutを使いミーティングを行った。5月頃にメンバー各自、核問題、着床前診断、情報化社会におけるプライバシーとテーマを決めた。6月には、各自のテーマに関して調べた内容を共有し、デイスカッションテーマを決め、夜遅くまで白熱した議論を重ねた。7月には日本側参加者は、同じ分科会のアメリカ側参加者が書いた論文を一人一人分読み込み、他の日本側メンバーに情報を共有し、その内容に関してデイスカッションテーマを決め議論を重ねた。こうした定期的なミーティングをコツコツ重ねてきた事で、アメリカ側と合流し議論を始めた際に知識面で困る事はほとんどなく、議論がスムーズに進んでいったと思う。定期的にミーティングを行なっていた頃が、今では懐かしく、寂しく感じる。そう今思えるという事は、とてもいい雰囲気で、意味のある時間を過ごし、ミーティングを習慣化できていたからだと思う。（小林勇貴）

原爆ドームおよび平和記念資料館

今回原爆ドームと平和記念資料館を訪れて印象に残っている点が二点ある。

まず第一に、核実験への広島市長の抗議文である。フランスで行われた水爆実験に対する抗議文を送って以降、世界で行われた全ての核実験に対して市長が抗議文を送っており、その数606通。核実験が行われた回数と抗議文の多さにまずは驚き、日本人ですら知らないところで、広島が必死に声をあげていることを知った。それにもかかわらず、海外はおろか国内にすら知られない。600を超える抗議文を送ろうとも世界中の核実験は終わらない。抗議文を送る事が不要な事だという意味ではないが、その努力の無力さを感じずにはいられなかった。

第二に、原爆ドーム訪問者の多くが外国人であったことだ。アメリカでは原爆は正義の為のものだったと教育されていると聞く。その教育を受けたはずの外国人が原爆ドームを見に来ていることを嬉しく感じた。上に抗議文の無力さについて触れたが、資料館の生々しく残酷な展示物をじっとみつめる外国人を見ていると、個人単位ではあるが広島の努力が人の心を動かせることも感じた。

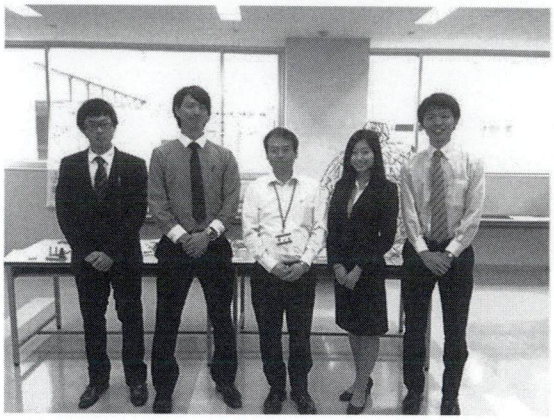
私たち日米学生会議として何ができるのかを考えると、まずは原発に関してアメリカ人に知らせることが義務だと感じた。その上で、何らかの形で日米学生会議として発信していきたい。広島だけが声を上げるのではなく、声をあげる人が増え、多くの人が原爆について考えるようになるだけでも意味ある一歩になる。その一翼を担う義務を感じたFTであった。（岡崎栞）

横浜サイエンスフロンティア高校

公立とは思えないほどの施設に終始圧倒されてしまった。期待の分だけ費用がかかり,プレッシャーもかかっている印象だった。SL(Science Literacy)という、理科の先生でも分からないような問題を研究していくため、先生側に日常の勉強の継続が求められるが、この試みは「先生は生徒と学び合うもの」という私の理想を形にしている試みであり感動した。また、SLが先生方の好奇心を刺激しているためか、心の病にかかる先生が少ないというのは驚きであった。

遠藤先生が仰った問題点として「先生の教える技術が追いつかない」というものがあった。日本の教育方法は、そもそも「考えさせる」事を軽視しているため、SLという思考力を必要とする授業には不適合なのであろう。大学の教職課程の段階で、国際教育方法比較論という授業でもあれば、教育方法にも幅が出るのではないかと思う。教職をとっていて思ったが、これから教師を志望している人達の教育方法の視野の狭さ、日本の価値観に依拠した思考方法に反吐が出そうであった。ましてや、これから教師を志望しようとしている人がこの件に関しての私の意見に議論をかぶせる事が出来ないのは、甚だ遺憾であった。汚い表現を使っていしまったが、それくらい私は憤りを感じている。将来大学教授になって、国際教育方法比較論を作ろうと思う。

（小林勇貴）



横浜サイエンスフロンティア高校に

東海大学医学部

日時：7月11日

実際に着床前診断、出生前診断、遺伝子カウンセリングを行っている医師の方から着床前診断を希望する方のケース、流れ、現在の生殖医療の実態、将来的なデザイナーズベイビーの可能性の3つについてお話をしていただいた。

着床前診断を受ける方の多くは日本では習慣的な流産してらっしゃる方が多いとお伺いした。患者さんの要望、なぜ診断を受けたいのかをお聞きし、同感して、実際に診断を行ったあと、病気の確率などの数字を提示するが、どうした方がいいなどの意見は言わず、患者さんに判断を任せ、最後にどのような決断をされても後押しする形をとるそうだ。この際、患者さんに全ての決定を委ねるため、大変患者さんには負担が大きいのが問題だそうだ。

現在以前よりも多くの方が生殖医療を経て出産しているということで、ますます生殖医療の知識や生命倫理について知る必要があり、

身近な問題となっている。そして、着床前診断が長期的に見て、本当に安全かどうかはまだわかっていないようだ。

将来的にデザイナーズベイビーが実現しても日本の人々がその価値観に対応し広く普及するかは疑問だそうだ。また際限がないことも問題だと教えていただいた。

専門家の意見をお聞きし、分科会の議論の中で出てきた質問にもお答えしていただき、貴重な経験となった。（松井友紀）

直前合宿

いよいよ迎えた渡米前日の直前合宿。これまで春合宿から週１回程度のミーティングを行ってきたが、その中での議論を他の分科会に知らせると同時に、自分の中でも議論を整理し、日本側の意見を再度固める良い機会となった。しかし、プレゼンテーションを作る中でいざ議論を見返してみると、春合宿中に議論し発表した内容から大きく発展した議論は出来ていないような感覚を抱いた。もちろん FT に行って現場の声を聞いて知識は深めたし、問題について考える時間を重ね、深く考えて議論をしてきたが、そこから新しい視点が多く出たわけではないように感じたのだ。ただそれは私にとって悲観する事ではなかった。確かに議論はこれ以上発展しなかったが、それは逆に、アメデリに会って彼らの新たな考えに触れ、議論が進むことへの期待を高めたのだ。最後の日本人間での発表を終え、これから始まる１ヶ月への期待に胸躍らせながら直前合宿はあっという間に終っていった。（岡崎栞）

■本会議中の活動

第１サイト　デモイン

「出だしで今後の流れをうまく作れるかが決まる」と、個人的に意気込んで望んだ第一サイトであった。本会議で分科会として使える時間を計算し、６つあるテーマの中から３つにテーマを提案し、メンバーの同意を得た。３つのテーマを何日の何時から何時間話し合うかまで決めることもできた。第一サイトで流れをつかめた事が、本会議でスムーズに分科会を進める事ができた要因だと思う。また、アメリカへ向かうフライトで、日本側のメンバーはこの分科会の結論がどう出るのか考え、ある程度の見通しや結論を持ってアメリカ側と合流する事ができた事も、本会議で良い流れで議論できた要因だと思う。第一サイトはアイオワ州という事で、農業に関する研修をしてきた。話し合う事が決まった３つのテーマのうちの一つである「遺伝子組み換え食品（GMO）」に対する考えを深めるのに絶好の機会であった。GMO に寛容なアメリカ、厳格な日本の対比を顕著に見る事ができた。（小林勇貴）

第２サイト　サンフランシスコ

第１サイトを後にし、分科会活動にもメンバーにも慣れてきた第２サイト、サンフランシスコ。ここでは本会議中唯一の FT の時間が確保されており、外部の声を聞く機会を得た。わたしたち技術 RT は Electronic Frontier Foundation（以下 EFF）という、NSA 等政府による監視活動に反対する団体を訪れた。国民の安全を保障するという名の下行われる

監視活動を通し、罪のない者が逮捕される等、プライバシーの侵害以前に人権を侵している事実や、実際にテロ活動を防止できた例が一件もないという事実を知り、深く考えさせられた 1 日であった。過剰とも言える監視活動は、「個」を大切にするアメリカ国民の性質になじまないものである。だからこそプライバシーの問題は日本よりもアメリカの方が大きな問題として扱っているような印象を持った。日本でプライバシー問題を議論していた時はこの問題との距離を感じていた私も、EFF を訪れ NSA を激しく批判する人の意見を聞き、当事者意識を持って問題を捉えられるようになった。（岡崎栞）

サンフランシスコ、グーグル本社

第3サイト　ニューヨーク

ニューヨークでは、デリ同士もすっかり打ち解け、分科会ではファイナルフォーラムに向けての準備が着々と進められた。

ニューヨークでは色々な場所に足を運ぶことができた。9.11 メモリアルでは、テロの恐ろしさ、またその当時の様子のお話をお伺いすることができた。Citi group でのキャリアフェアでは、グローバル化が拡大し、language barrier がある中でのコミュニケーションに関するパネルディスカッションを聞き、ビジネスにおける Face to face の重要性を改めて感じた。様々な場所に訪れるだけでなく、多くのデリ同士のインターアクションもあったのを思い出す。例えば Nihongo は、アメリカ側と日本の俳句を作り、日本が四季を重んじる文化であることを伝えることができたと思う。また Atomic Bomb Forum では、原子爆弾所持に関して、分科会関係なくグループに分かれ、学生のそれぞれの知識に基づいた論理的な議論をすることができた。

（松井友紀）

第4サイト　ワシントン D.C.

最終サイトであるワシントンに到着して「あと 1 日でファイナルフォーラムか。あっという間だったなぁ」と感じた。このように感じた理由は、凝縮された 1 か月間だったからではないだろうか。分科会の最終サイトで印象に残ったことは、やはりファイナルフォーラムに向けた活動だった。RT のために設けられた時間はもちろんのこと、空き時間はすべてファイナルフォーラムの準備に費やした。食事や移動時間もプレゼンを作ったことを覚えている。やや辛かったというのが正直な感想であるが、分科会のメンバーとこの辛い経験を共有できたことで、さらにきずなが深まった気がする。ファイナルフォーラムも無事に終わり、最終日を迎えた。最終日は分科会のメンバーで朝まで一緒に過ごし、太陽が昇ってやっと完成した分科会のコーディネーターに向けたビデオレターを分科会全員で見た。

今改めて振り返ってみると、最高のRTメンバーと同期に恵まれ過ごした夏の1か月であった。（北原吉泰）

ファイナルフォーラム

私たち技術進歩と社会の分科会は、デザイナーズベイビー、遺伝子組み換え食品、原子力発電、の3つのテーマを議論してきた。ファイナルフォーラムに向けて最も苦労したことは、全テーマにおける意見の不一致、10分間の発表時間の使い方、という2点であった。分科会の意見がまとまらない中、あるメンバーが「懸命に議論した結果、分科会として意見がまとまらなかったという事実をありのまま発表しよう」と提案をした。当初は反対意見も挙がったが、ファイナルフォーラムでは、議論の争点と賛成派・反対派の意見、の2つを盛り込んだ。しかし、発表の方向性が決まった途端に、10分以内に発表を収めるという2点目の問題に直面したのであった。コンパクトかつ内容の濃い文章を作り、それをスラスラと話すことは予想以上に困難なことであった。何とかこの2つの問題を乗り越え、ファイナルフォーラムは無事に終えることができた。学生会議を振り返ってみて、ファイナルフォーラムを分科会の目標にできたからこそ、充実した分科会になったと思っている。（北原吉泰）

ニューヨークでの分科会議

■　分科会感想

北原吉泰

分科会はJASCの中で最も活動時間が多かったため、本当にたくさんの思い出ができ、またたくさんの気づきがあった。ここではその中から2つを取り上げたいと思う。1つ目は、人間関係についてである。分科会活動を通して改めて人間関係の大切さを学ぶことができた。というのも円滑で充実した議論を行うためには、議論以外での人間関係が大きく関係するからである。議論の中で相手と意見が異なる際には、どうしても相手の意見を否定しなければならない時がある。人間性を否定されるわけではないが、自分の意見を否定されることは決して気持ちのいいことではない。しかし、RT以外の時間で分科会メンバー同士が深い関係を築いていたこともあり、意見が合わない時は反対意見を堂々と述べることができるなど、基本的に何でも言い合うことができる仲になっていた。今後の人生を左右するのは人間関係といっても過言ではないので、今後もJASCの参加者と同じように深い関係を築いていこうと思う。

2つ目は、極限の状態であっても自分をコントロールすることの大切さである。よく極限状態の時にこそ人間の真の姿が見えるといわれているが、本当にその通りだと思う。参加者の多くが、本会議のスケジュールが非常にタイトであるにもかかわらず、常に周りに気を遣い、リーダーシップを発揮していた。2つ目も究極的には人間関係に大きく関係する。JASCで気がついた人間関係の大切さを忘れずに、彼らとは一生涯付き合っていきたい。

小林勇貴

本会議前に仕入れておいた事前知識のおかげで、英語が苦手であっても議論の流れが予測できたため、「原子力発電」「遺伝子組み換え食品」「着床前診断」に関するデイスカッションは積極的に参加、発言ができた。自分が英語が苦手で聞き取る事ができず聞き返したときも、周りのメンバーが嫌な顔一つせず丁寧に対応してくれたおかげでもある。メンバーには、感謝しても仕切れない。ところが、NYサイトに移ってからは、どのように最終フォーラムで発表するかという抽象化した議論となり、個人的に話の流れが予測できない内容となった為、議論に入り込めなくなった。残り時間が少なくなってきていて、自分の為に説明する時間を割いてもらう事に意味を感じなくなった私は、自分から議論に参加しない事を選び、最終フォーラムの進め方はメンバーに任せた。時に、議論から退く事は必要だと思う。しかし、話の流れを理解した上でポジティブに議論から退く事と、話の流れを理解しできなくてネガティブに議論から退く事は全く意味合いが違う。NYサイトでした私の行動は完全にネガティブな退き方であった。自分の英語力の限界を知った。議論以外でも、英語の壁によってアメリカ側参加者のメンバーと分かり合えなかったりした為に、話す事を敬遠してしまった時期もあった。しかし最終的には、同じ時間を長時間過ごした事で、信頼関係や友情でアメリカ側参加者と繋がれたと思う。日米学生会議の趣旨である相互理解は、本会議だけで終わりではない。死ぬまで、一生かけて作り上げ続けるものだと思う。今度会う時には言語で繋がれる様に、今回の悔しさを胸に刻み、勉学に励む。

Electronic Frontier Foundation にて

岡崎栞

異なる環境、教育の下生きてきたアメリカ人と日本人との議論を通し、価値観の違いを肌で感じたいと思って参加したJASC。アメデリが加わった事で、日本側だけで議論している中では出なかった視点や疑問が見られ、まさに考えの違いを強く感じていた。生命倫理等、技術 RT は倫理に関わる問題を多く取り扱っていたが、全員が少しずつ違う意見を持っており、非常に面白かった。議論は平行線ではあったが、私はむしろその意見の不一致を楽しんでおり、その相違こそが JASC の意義であるとも感じていた。

しかし議論を面白いと思う一方、アメリカ到着以来、私には日本にいた頃とは違った悩みが生まれていた。性格上、間違える事や分からない事を恥ずかしいと思ってしまう私は、英語面で分からない事があってもそのままや

り過ごしてしまう事が多かった。分からないと言う勇気が出ず、気付いたら議論をいつも耳で聞いているだけの自分がいた。そんな私にとって第２サイトでの分科会は大きなターニングポイントとなった。誰にも相談することなく１人で悩み続けた結果、涙が溢れたRTリフレクション。泣く私が最後まで話し終わるのを待ち、優しく的確なアドバイスをくれたRTメンバーの言葉や姿、JASCメールの１つ１つが忘れられない。メンバーに悩みを打ち明けたことで楽になり、また頑張ろうと思う気持ちを持つことが出来た。

この１ヶ月の分科会活動を通して私が得たもの。それは専門的な知識でも、相手を言い負かす議論の方法でもなんでもない。「仲間」と「悔しい経験」である。学生という立場で自由に議論をし、笑い、悩み、支え合う。たった１ヶ月の共同生活を通して、一生大切にしたい仲間を得た。そんな素晴らしい仲間と過ごした１ヶ月が悔しさの連続であったことも私は忘れない。悔しい経験をしたことで、実行委員として参加する来年のJASCに向けて課題が明確に見えている。貴重な経験をさせてくれたRTメンバー全員に感謝するばかりだ。本当にありがとう。

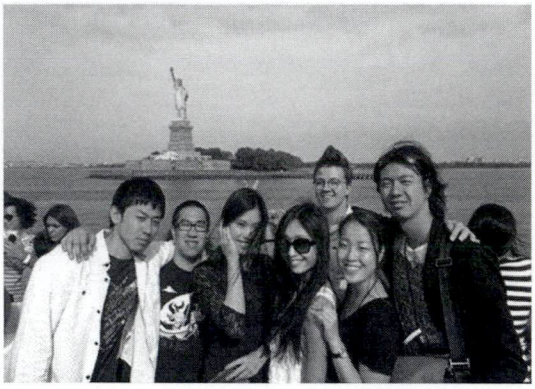
松井友紀

最終的に原子力エネルギー、遺伝子組み換え食品、デザイナーズベイビーの３つをファイナルフォーラムでは発表したが、その他、政府と個人のネットのプライバシー問題についても話し合った。分科会で話し合い、興味深かった２つのことについて書きたいと思う。まず異なるバックグラウンドを持っている人と議論することについてである。テーマはそれぞれ意見が割れ、国や社会的地位など様々な立場に立ち、多面的に論点を見ることができたと思う。そして、アメリカ側からは多民族との共生、自国の国民性に関するアイデンティティといった面やLGBTなど、日本ではあまり意識されていない視点からの意見も上がり、準備の段階では思いつかなかったことが話題に上がった。その中でも特に印象に残ったのは、プライバシーに関する問題を話し合っていた際、日本人は政府に自分のネットの個人情報を見られている感覚はあまりないが、アメリカでは政府が自分のネットが政府機関に監視され、言論の自由などがなくなることに問題意識を持っていた。そのように、自分とは異なる国の学生と話すことで新たな視点を取り入れることができ、興味深かった。それと同時に先進国でもある国同士として、発展途上国に与える影響についても話し合うことができた。

２つ目に道徳や倫理面を話し合うということについてである。社会の中で技術を使うことに関する利点と欠点を並べて比較する際に、多くの倫理的、道徳的な考えを盛り込むことによって、より本質をついた議論になったと考える。なぜなら、道徳は確実な証拠はなく、数字化することができないので、他の物質的な事柄と比較するのは難しい。また、自分とは違う倫理観を持っている人を納得させるのは難しいからだ。その難しい中でお互いの考えを交換し、理解に努めることはとても有意義であったと考える。

話し合ったテーマは限られていたが、そこから話題を広げ、様々な社会問題に触れるこ

とができ、分科会では多くの実りある議論ができたと感じる。



ニューヨーク、自由の女神の前

■分科会総括

遺伝子組み換え食物は、その収穫量や強靭さから食糧難の国を飢餓から救うことができる。一方で遺伝子の組み替えは自然環境に計り知れない悪影響を及ぼす可能性がある。果たして遺伝子組み換えという技術を獲得した人類はどのようにこの技術を活かせばよいだろうか。容易に想像できる様に、立場によって意見は異なり、明らかな答えなどない。

当文化会は、遺伝子組み換え食物に加えて原子力使用の是非、政府によるインターネットの監視、出生前診断など、新た科学技術によってもたらされた問題について議論した。答えのない問題を前にして最も重要な事は、多様な視点を取り入れ、争点を発見していくことである。そのため当分科会はディベート形式を取り入れ、敢えて自分の意見とは異なる視点に立って議論に挑んだ。

議論をする中で、以前持っていた意見を考え直す事が多々あった。渡米前、多くの日本側参加者は、国家の安全保障のためなら政府がインターネットの個人情報を利用してもよいだろうと感じていた。しかしアメリカでは、個人情報に対する態度は大きく異なっていた。政府からの自由を強く追求するアメリカでは、政府の個人情報利用に懐疑的な意見が多かった。対テロリズムという名目で不当に拘束され、市民の知らないところで電話、メールなどの個人情報が監視されているからだ。我々はEFF（Electronic Frontier Foundation)というNSA（アメリカ国家安全保障局）の個人情報操作に異議を唱えるロビー団体を訪問し、個人情報の保護を巡る熱気を肌で体感した。日本での準備活動中には欠けていた視点を得たことで、この議題の本質的な課題がみえてきた。

多様な意見を取り入れると共に、感情論を避け、数字やデータの裏付けをもとに議論をするよう意識した。例えば遺伝子組み換え食物を巡る議論では、科学的な根拠もなく体に悪影響があるとの考えが蔓延していることに気付いた。

最終的に当分科会は各議題の争点をいくつかの視点から分析して、ファイナルフォーラムにて視聴者に発表をした。答えがないという問題の性質上、議論の両側面を与え、どの立場をとるかの判断は視聴者各自に委ねた。

このように発表という形で私たちは分科会の成果をまとめた。アカデミックさを追求するならば、専門的な知見をもった大学院生が集まって、研究をした方が「成果」は出たかもしれない。ただ当分科会は政治、生命科学、医学、経営学、など様々なバックグラウンドを持った学生の集まりであり、専門集団とは到底いえないだろう。議論した内容は既存の

議論に止まっていたかもしれない。だが学生が真剣に社会の問題に向き合い、議論をした事実こそが重要である。そこには伝えきれない数々の妥協、挫折や迷いが繰り返され、相互理解に結びついた跡が刻まれている。当分科会の真の価値はそこにある。

技術進歩と社会分科会の成果が本当に花開くのは、日米学生会議が終わり、各々の歩む道においてである。時には苦しい思いをしながらも議論をまとめあげた経験はきっと今後社会でも活きてくる。今後お互いがどのように活躍するかが楽しみだ。

最後になりますが、当分科会にご協力頂きました多くの皆様に深く感謝を申し上げ、分科会総括とさせて頂きます。

ワシントン D.C.にて

NY エリースアイランドにて

第6章

日本側代表団の声

朝倉　咲希

JASCでの思い出を格別なものとしているのは、人の優しさを感じたたくさんの瞬間である。知識や語学の面で壁にぶつかった時、メンバーはいつも助けようとしてくれた。プレッシャーや自分の能力の不足を感じた時、メンバーにもらった手紙を読んで救われた夜も何度もあった。優しかったのはJASCのメンバーだけではない。多くの過去のJASC参加者の方々が私たちの活動を助けてくれ、ためになる話をしてくれた。さらに、ホストファミリーは面識のない私たちとたくさんの時間を過ごしてくれ、笑顔をくれた。自分が一歩勇気を出して相手と真摯に向き合おうとすれば、相手の優しさに必ず気づけるということを学んだように思う。私もJASCで出会ったみんなのように、周りの人と丁寧に付き合っていきたいと改めて思うようになった。

また、JASCにいて学んだのは自分にとって未知な世界の広さである。本会議が始まる前まではJASCでの人との交流とは日米間の交流であると捉えていたが、本会議で感じたのはJASCとはひとりひとりの間での交流の場であるということだ。アメリカ側参加者はもちろんのこと、本会議前から既によく知っている気でいた日本側参加者同士の中でも、より深く長く話すことで新たな個性やものの考え方を発見出来た。また、それぞれのレクチャーの後、どう感じたかなどを参加者の間で話し合うことで、新たな発見を得て視野を広げることが出来たと思う。さらに、人と話すことで、自分についてもまだまだ認識しきれていなかった長所・短所がたくさんあったことに気付いた。今回JASCで「まだまだ未知な世界はたくさんある」と感じたことを忘れず、今後も前向きに人や物事から学び続けていきたいと思う。

大きな区切りである２０歳の夏をJASCで過ごせたことは、今後も大きな意義を持ち続けていくと感じている。このJASCでの経験・絆を心の支えとして今後も意欲的に毎日を過ごしていきたいと思う。

池田　耕一

私の人生にとって日米学生会議とは何だったのだろうか。現在の私の認識は「長い長い、そして実り多い寄り道」、である。私は大学でヨーロッパにおける経済統合を研究し、更に宗教文化や国際協力に興味を持っているため、東南アジアや中央アジア、中東各国を訪ね、自分にできる人助けの道を探していた。正直にいうと、私は「アメリカ」という国への関心は非常に薄かった。政治・経済・文化、あらゆる面で日本がアメリカから大きな影響を受けていることは重々承知している。しかしながら、「日本の利害」を考える意識や「日本人」としてのアイデンティティを失くしてしまったのだろうか、私はどうしても「日本」という国を中心に物事を考えることができない。そんな私が日米学生会議に参加した理由、それは単純。「自由とは何か」を自由の国で考えるため。そして「環境問題」というテーマに強い関心があったからである。結果を言ってしまえば、私が参加した当初の目的は果たされなかった。過酷なスケジュールの中で、「自由」とは程遠い三週間であったし、環境分科会でも満足はいったものの奮い立つような議論にすることはできなかった。しかしな

がら、最も大きな収穫は、予想もしないものであった。それは、多くの優秀なデリとのぶつかりあいの中で、「自分は何者であるか」を、否応なく考えさせられたことである。私の過去、私の使命、人には話せないようなことも、JASCer ならば真面目に聞いてくれる、自分のために泣いてくれる。それが、何よりもうれしかったし、だからこそ私も、大好きな JASCer のためなら何でもできる、そんな思いを常に抱いていた。日本側実行委員長が言っていた、この会議の目的は「相互理解」にある、という台詞。会議を通じて痛いほど感じた。国籍なんて関係ない。私たちは理解し合える。国籍なんて関係ない。日本人とだって、完全には理解し合えない。私の夢は「人助け」にある。JASC で得た気づきを、後悔を、苦しみを、忘れずに進んでいきたい。

板倉　美聡

日本、アメリカ、韓国、中国。第 66 回日米学生会議において随一のダイバーシティを誇る歴史教育 RT に、私は配属された。そこで私たちは、歴史教育と右翼の進捗というセンシティブである種のタブーとも言える問題に取り組むことになる。

なぜここに集まる国籍も文化も違う個人は、言語の壁をしても必死で互いに理解し合おうとするのに、個人の集合体である国家は唾み合うのであろうか。なぜ外から見れば地球は限りなく青く丸く一つであるのに、そこに国境や人種の違い存在するのだろうか。そしてこの世界の抱える問題と私が目指す場所は果てしなく壮大であるのに、私がつまずいている石はなんて小さいのだろう。1 ヶ月間、私の心に浮かび続けたとりとめのない疑問である。「核兵器なくして世界の平和を保つ具体的な方法を考えよ。」Atomic Bomb Foul rum で出されたディスカッション課題に取り組んだとき、自分がたどり着いたものと、答えは同じであるような気がする。たぶんそこに明確な答えはなく、ただ挑み続けることに意味があるのだろう。

様々な感情が混沌と交錯する中で、かけがえのない仲間と転んでは立ち上がり挑戦し続けた日々を、すでに愛おしく思う。ここで出会った仲間たちが、世界のどこかで活躍し続ける姿を思い浮かべただけで、胸が踊る。私もきっと負けない。ワシントン空港で涙ながらに別れた仲間たちに、後ろ髪引かれる思いで大きく手を振って、しかしその後振り返ることはせず、私はこの道を歩いていくと心に決めた。

上島　万波

一体何をここで語れば良いのだろう。 言葉で語るには様々な体験と感情を経験しすぎたようにも思える。期待と不安を胸にアメリカの地に降り立った日がまるで遠い昔のようだ。JASC に参加するまで生まれてこの方北陸にずっと住み医学部の狭いコミュニティで生きてきた私はもっと広い世界を見ることを渇望していた。今回の会議は、様々なバックグラウンドと興味を持った人達と関わり、彼らを知ることの出来る大変良い機会になると思っていた。

結論から言うと、もちろんそれは達成されたのだが、それよりももっと収穫であったことは、自分と真正面から向き合うことができ

たことだ。というよりは、否が応でも向き合わざるを負えなかったと言った方が正しいかもしれない。帰国子女でもなければ留学経験もない私の最大の壁は言語であったが、言語というコミュニケーションの最大のツールが自分の中で揺らいだ時、ここまで自分の感情と思考と行動が各々かけ離れた動きをするとは思わなかった。そしてそれは文化の壁や自己の喪失のようになって現れた。今まで思っていた自分と違う自分、今まで見えてこなかった自分の本質の一部を見た気がした。正直にいって、その自分と向き合うのはとても難しかった。しかしながら、向き合うことで今気づけたことはこれからの自分の人生において間違いなくキーになる。そういう意味で、Life Changing Experience であった。これから精一杯精進したい。

そしてもちろん、自分自身のことばかり語っていてもつまらないので、最後に一番重要なことを述べたい。辛いことも苦しいことも葛藤も沢山あったけれど、楽しいこと、感動も沢山あり、それら全て含めて私の財産であるとはっきりと断言できる。そして、それらの瞬間と感情を仲間とともに体験できたことは素晴らしいことであり、JASC で出会った仲間はみんな私の大切な宝物である。これからもこの繋がりを絶やさずにいたい。JASC に関わる全ての人にこの場を借りて感謝の気持ちを示します。本当にありがとうございました。

大西　由起

「日米学生会議で"Life Changing Summer"を過ごしてみませんか。」これが多くの JASCer が JASC の宣伝をする時に使うキャッチフレーズである。私も、第66回日米学生会議実行委員として、友人に、そして全国の学生に対してこの決まり文句をよく使っていた。日米学生会議で夏を過ごすのが今年で2度目。昨年は日本、今年はアメリカと二つの全く違う国で夏休みを過ごす事ができたのは、とても素晴らしい経験であった。しかし、そんな夏を2度も過ごしてみて、果たして私の人生は変わったのかと聞かれると、答えに少し戸惑う。確かに、日米の優秀な学生と熱い議論を交わしたり、著名人の講演を聞いたり、企業訪問や文化体験をしたりなど、普通の大学生活では得られない経験をすることができた。だが、これらが大きく自分の価値観や人生を変えたかと言われるとそうではない。

「なぜ今 JASC なのか。」私たち第66回会議実行委員会では、常にこの疑問と向き合いながら会議の運営を行ってきた。今の時代、同じようなプログラムはたくさん存在する。JASC よりももっと"Life Changing"なプログラムはあったかもしれない。とはいえ、私はこの選択をして後悔はしていない。たとえ、人生が大きく変わらなかったとしても「日米学生会議を経験して良かった」と胸を張って言える。そして、この会議の運営に携わる事ができて誇りに思う。決して順風満帆な会議ではなかったが、数々の困難さえ良き思い出である。何よりも、最高な実行委員チームと、生き生きとしている参加者に出会えた事が私にとって一番の大きな財産である。実は、この出会いこそが"Life Changing"なのかもしれない。

最後に、この会議に携わってくださった全ての方々に心から御礼を申し上げたい。多

くの方が私たちを支えてくださったように、私も未来のJASCerをサポートしていければと思う。これからの日米学生会議の繁栄を祈る。

大沼　雄貴

JASCでの社会問題に対する全力の議論、様々な話を花咲かせた夜、一生の友情ができた分科会活動、そして一年間実行委員として、15人の仲間と共に代表団71人のために頑張ったこと、どれもとても幸せな時間であった。しかしJASC最大の幸せは、多くの素晴らしい仲間と出会い、私の“可能性”を大きく広げてもらったことだろう。

今、思い返すとJASCに参加する前の私は、大きな目標に対してできない理由を見つけては、挑戦することに諦めていた。JASCでも最初の頃は「どうせ一ヶ月程度議論したところで、大きな社会問題をたかが学生が解決するのは無理だろう。」と心のなかで思いながら参加していた。実際、分科会の多くは問題をすぐ解決できるような解決策は出なかった。

しかし、世界平和や理想の教育の実現、貧困の根絶を本気で実現しようと高らかに語る友人たちは、もっと大切な未来の“可能性”に目を向けていた。今、問題を解決できなかったとしても、我々が今、議論したことからなにか変わるかもしれない、解決に向けた答えがこの夏に出なかったとしても、私達が大人になった時にできることがあるかもしれない…、JASCは通過点にしか過ぎないと語った友人を見て、彼らはできない理由を見つけても、言い訳を考えずに耐えず努力し続けていた。漠然と目の前のできることだけをこなしてきた自分にとって、自分と全く異なる彼らとの出会いは衝撃的だったと、同時に自分の大きな欠点が見つかったことに肯定的に捉えている自分がいた。

この代表団の声を書いている今も、私には将来に取り組みたい大きな夢や目標は見つかっていない。それでも。心で「無理」と思うようなことが目の前に現れても、必ず一回は挑戦し、解決するために何が必要かを考えるようにしている。少しでも自分の可能性を広げるために努力し続けていきたい。

岡崎　栞

私にとって第66回日米学生会議とは、「悔しさ」と「仲間の刺激」の2つの言葉で表せる。

日米学生会議。私が初めて名前を聞き、活動内容を知ってから惹かれ続けた団体だ。当時他のプログラムでアメリカに滞在していたところ、1泊だけ帰国して選考を受ける程、熱望して入ったJASC。異なる文化、環境、教育の下で生きるアメリカ人と日本人の価値観の違いを知りたい、議論を通して自分の疑問を解決したい。そんな期待で始まったJASC生活は、春合宿から本会議を通し、今までのちっぽけな自信が全て崩れ去った経験であった。春合宿では、出会ったばかりの関係にも関わらず自分の意見をはっきりと述べる周囲に圧倒され、本気で帰りたいと思った。FTや研修を通して皆と顔を合わせる機会が増え、週1回ミーティングを行う中で、私も自分の意見を言うことに慣れ、頭を悩ませながら議論をする事が楽しくなった事前期間。渡米するや否や、言語の壁にぶつかった。今持てる力の中でできることを精一杯やるべきだという事

は分かりつつも、逃げてしまった本会議。つまらない自信も何もなくなり、無条件にJASCが楽しかったと言うと嘘になる。しかし間違いなく言えることは、この経験が私を変えたことである。悔いが残ったからこそ、そこから自分に何が不足しているのか、クリアな課題を見つけ、JASCに実行委員として再チャレンジする決断を下せた。はっきりとした目標を持つことが出来た。そのために何をしなければいけないのか考え、本会議が終わり直ぐ動き出すことができた。

そして、私を変えた背景には、楽しい時も悔しい時もそばにいた70人の仲間がいる。仲間を見て、私も頑張ろうと何度も思えたし、その関係は本会議が終ったこれからも変わることはないだろう。世界には、生き生きと活躍し続ける70人の仲間がいることを考えれば、私も負けられない。

あの夏は、本当に眩しかった。Once a JASCer, Always a JASCer.　JASCerであることを一生誇りに思い、66回で見つかった自分の課題を見つめ、実行委員として関わる67回JASC、そしてその先の人生のため精進していく。

奥谷　紘子

日米学生会議の春合宿から本会議までの5か月間はとても長いようで短い濃い時間であった。それぞれが本会議でアメリカ代表団と何について議論したいかを考え事前学習をした。学校との両立やみんなの予定が合わないといった困難に直面したものの、この時間は決して無駄ではなかったと今だから言える。

本会議が始まり、初めてアメリカ側参加者と出会った時の興奮と新鮮な気持ちは今でも鮮明に覚えている。マッサージナイトやゲーム、飛行機の移動時間など何気ないときを通して71人全員と繋がっていけることに喜びと手応えを感じた。

しかし、楽しいことばかりで終わらないのがJASCである。私たちのRTは“正義と道徳”というテーマであったが、テーマ自体があまりにも抽象的すぎたことや各々の興味分野が多様であったことから何を中心に議論していくのか的をしぼることができず、初めの方は浅はかな議論が繰り返された。なかなか前に進まない議論に皆焦燥感や苛立ちを隠せず衝突した。性格の違いや英語力の差もあり、メンバー全員が抵抗なく発言できる空間を作るためにはどうしたらいいか考えさせられ、グループ内でも何度も話し合った。しかし、こうして壁にぶつかることで私たち一人一人は確実に成長しグループとしても前に進むことができたと思う。ファイナルフォーラムではアメリカと日本の道徳教育の違い、どういった道徳教育が社会にとって望ましいのかについて私たちのRTの集大成として発表することができた。振り返ればもっと質の高い深い議論できたかもしれないなど反省点は多いが、RTの議論の時間はただ与えられたテーマについて各々が議論する場所ではないと感じている。一緒に過ごす時間が多いからこそ一人一人と真剣に向き合う場であり、自分と向き合い共に人として成長する場でもあったように思う。こうして終えた本会議だがJASCで学んだことを本当に活かしていけるのはこれからであり、自分がJASCerであるという誇りを胸に頑張っていきたいと思う。

兼子　莉李那

私が日米学生会議と出逢ったのは、今から三年前、大学に入学した直後の事であった。知人が実行委員を務めた第63回会議のファイナルフォーラムを訪れ、日米学生会議にすっかり魅せられたのを今でもはっきりと覚えている。日本開催の第65会議を待って応募した時は、まさか自分がこの学生会議に二年間をも費やそうとは夢にも思わなかった。私のような障害者が、このような長い歴史を誇り、数多くの著名人を輩出した格調高い学生会議に合格出来るはずがないと確信していたからだ。しかし、日米学生会議は私が今まで経験してきたような「差別」をするような組織ではなく、私の障碍ではなく私一人の人間性を見て、私をJASCerとして認め、結果私は第65回会議を通じて沢山の事を学び、発信し、充実したひと夏を過ごす事が出来た。この「壁のない」会議を次期参加者とも共有したいと、実行委員に立候補し、幸いなことに日米学生会議史上初めての障碍を持った実行委員として当選することが出来た。実行委員として活動したこの一年間は、第66回会議を成功させることは勿論、常に「初めての障碍を持った実行委員として私に出来ること、私にしか出来ないことは何か」を念頭に置き、活動して来た。活動が忙しくなるに連れ、自分自身の個性を出すよりも実行委員としての仕事をこなす事に重きを置くようになったが、第65回、第66回両会議を通して、日米学生会議は全ての学生に対してオープンであり、この学生会議には差別は存在しないことを証明できたのではないかと思う。私にこの素晴らしい機会を与えて下さった第65回実行委員の皆様、見守って下さった国際教育振興会や日米学生会議同窓会の皆様、共に活動してきた第66回実行委員会、懸命に会議を盛り上げてくれたデリの皆、そして常に支え応援してくれた家族に感謝したい。

北原　吉泰

ASCを終えてみて感じたことは、JASCに参加できてよかったということです。JASCでは悔しい思いをした記憶しかありませんが、その悔しさをばねに帰国後も充実した毎日を過ごせておりますので、参加して正解だったと思うのです。特に自身の英語力のなさを痛感いたしましたので、必死に英語を勉強します。

英語で苦労したわけですが、本会議中にはたくさんの人との出会いがありました。本会議参加者はもちろんのこと、OB&OGの方々とお話しすることができ、自分の知らない世界を垣間見ることができました。特にサンフランシスコサイトの時に80周年記念パーティーがあり、そのパーティーではシリコンバレーなどで起業されている方や過去に企業をなさっていた方とお話しする機会に恵まれ、本当に幸せでした。自分の専攻がビジネスということもあり、また起業に強い興味を抱いているためです。今後は話を聞いて得たことを行動に結びつけ、結果を出すことが必須ですので、精一杯頑張ります。

特にたくさんの方との出会いがあったサンフランシスコサイトを終え、その次のサイトであるニューヨークへ移りました。ニューヨークサイトになると徐々にファイナルフォーラムを意識せざるを得なくなり、分科会の中でもファイナルフォーラムを少し意識しつ

つ議論を進めました。私たち技術進歩と社会の分科会は、デザイナーズベイビー、遺伝子組み換え食品、原子力発電、の３つのテーマを扱いました。ファイナルフォーラムに向けて最も苦労したことは、全テーマにおける意見の不一致、10分間の発表時間の使い方、という２点でした。分科会の意見がまとまらない中、あるメンバーが「懸命に議論した結果、分科会として意見がまとまらなかったという事実をありのまま発表しよう」と提案をしました。当初は反対意見も挙がりましたが、ファイナルフォーラムでは、議論の争点と賛成派・反対派の意見、の２つを盛り込みました。しかし、発表の方向性が決まった途端に、10分以内に発表を収めるという２点目の問題に直面したのです。コンパクトかつ内容の濃い文章を作り、それをスラスラと話すことは予想以上に困難なことでした。何とかこの２つの問題を乗り越え、ファイナルフォーラムは無事に終わりました。冒頭でも述べましたが、JASCに参加でき本当に良かったです。ぜひ後輩にも勧めたいと思っております。

木村　優吾

実行委員として参加する今年は、日米学生会議の社会的意義を問う一年であった。国際交流が盛んになり、個人の留学も以前より容易くできる中で、日米学生会議の価値はどこにあるのか。

日本初の学生交流団体としての長い歴史、他交流プログラムと比較しても長い開催期間、著名なOB/OG等、どれも誇れる日米学生会議の特異性だ。この比類ない会議が資金面で苦労しないように財務活動に励み、より多くの人に知ってもらおうと広報活動に励んだ。参加者にとってより良い体験をしてもらうために会議のコンテンツも工夫した。環境を整えることに私は注力した。

時は過ぎ去り、気付けば渡米前の直前合宿、ある実行委員がふと呟いた。「ついに最後のJASCが始まるね」。そこで私はぱっと頭の中が真っ白になった。大抵の参加者が日米学生会議を一度しか経験できないところを、私は実行委員として二度経験できるのだが、それも今年で最後だ。去年実行委員に立候補したのは国籍に拘らない人と人の絆に魅力を感じたからだった。しかし目の前にいる参加者とどれほど向き合って、深く知り合うことができただろうか。直前合宿で議論をする彼らを見回しながら不安になった。参加者が議論をする「箱」を整えることに必死になって、その中身である参加者に目を背けていた。

深夜まで議論を交わし、ひたむきに努力する参加者をみて私は思い出した。日米学生会議の本当の価値はその参加者にあることを。衝突を乗り越え、各々が自己、他者と真剣に向き合って培った絆は、日米、広くは世界平和の一翼を担う、という私たちの理念から遠く離れたことではないだろう。日米学生会議を機に知り合った日本人とアメリカ人が、何十年経った今でも手を取り合って、思い出に耽るのを80周年記念式典で目の当たりにして、このことを再認識した。

この夏培った絆こそが第６６回の成果である。しかしその真価が発揮されるのは会議が終わってからである。今年得た経験を胸に、今後もそれぞれが歩む道で努力しよう。今から何十年後、各々の道で活躍する参加者が再

び手を取り合う姿を想像しながら。

小林　勇貴

いい意味で自信をつけさせてもらって、いい意味で自信を失わせてもらった４ヶ月間でした。学生が主体となって運営している日米学生会議では、主体的に動けば、やれる事は無限にあります。私は、英語が周りのメンバー程できないと、選考に通ったときから分かっていました。だからこそ、自分の存在価値を確立させる為に、持ち前の行動力、リーダーシップを活かしてできる事をしようと決めていました。「技術進歩と社会」という分科会に属し、核技術について考えていくうちに、アメリカと日本を結ぶ、できれば触れたくない話題である「原子爆弾」について学びました。昨年の日米学生会議では、この話題を敬遠していたために、日本側の参加者から不満が出たそうです。この事からも、たとえ傷口をえぐるような話題であっても、会議全体で話し合う必要があると思い、「原爆フォーラム」を開催する事を提案しました。日本側から仲間を集め、力を合わせて３日間に及ぶフォーラムを成功させる事ができました。一衆、ぺぺ、ゆりこ、さえ、しおりがいてくれたからこそ、良いフォーラムを作り上げる事ができました。本当にありがとう。この事で、アメリカ側の参加者からも感謝や労いの言葉をもらえた事が、私の自信となっています。しかし、自分の英語力の無さから、フォーラムの司会進行を交代せざるを得ない状況になりました。この事が、「もっと、英語を勉強しないといけない」と気づかせてくれました。自信を失ったからこそ、自信を付ける為に動き出せます。

この会議が残してくれた何よりも大切なものは、人生をともにできる最強の友達

です。途方もない夢に向かって進むのは、正直、怖い時もありますし、大量のエネルギーが必要だと思います。しかし

世界のどこかで、同じ様に先に進もうと必死に努力している仲間がいると思えるから、

どんなに辛い時でも、前よりもっと大きな歩幅で進んでいけます。出会えた事に、感謝。

小松崎　遥平

つい先日まで、私はある特殊な靴を履いていました。それは日米学生会議のチェア（実行委員長）という靴です。見た目は普通ですが実は不思議な力を秘めており、ある時には日米関係史を熟読するため私を図書館に連れていき、またある時には賛助のお願いをするため大企業の社長室に連れていき、そして世界平和への道を行く 72 名の団員の先頭に立たせました。1 年間履き続けるうち、ボロボロになっては自身で磨き、失くしそうになっては仲間が一緒に探してくれました。その道程では突然の竜巻に見舞われることも、急峻な山岳地帯を前に足がすくむこともありましたが、それでもいつも楽しいものでした。

そしてその靴は、自分という人格の理解と、リーダーシップと、一生の友を私に与えてくれました。まず私は、自分は真っすぐさだけが取り柄であることを知りました。曲がったことはせず、自分の正しいと思うことを追い求める姿勢がチェアとしての私の僅かな価値であったと思います。そして、正直に伝えるというその行為と、それが生む相互理解

こそが会議に通底する理念であるとの考えに至ったとき、私は本当の意味でのリーダーシップに気がつきました。リーダーシップとは私にとって、理想を掲げてそれを実現することです。同時に、そのためには共に理想を追い求める仲間が必要で、私はその仲間にも恵まれました。特にあのプレハブのような事務所で1年という時間を共に過ごしたチームには感謝に堪えません。緑が似合う彼は抜群の安定感を、お洒落な彼は広範な発信力を、元気印の彼女は底知れない明るさを、飲み助の彼は人と人とのつながりを、ツッコミ担当の彼女は少数者の意見を、会う度に髪色の変わる彼は周囲を楽しませるセンスを、キテレツで真面目な彼は理想を現実にするための思考を、私とこのチームに与えてくれました。

私はこの靴の66番目の持ち主でした。本当は次に受け渡したくなんかありません。まだこの靴を履いてやりたいこと、行きたい場所が沢山あるのに。しかしこの名残惜しさこそ私をこの会議につなぎとめるものなのでしょう。ですから、言葉にするにはあまりに大きなこの経験を、靴を脱いだ後もずっと胸に抱いて、歩いていこうと思います。

小宮山　宗

私にとっての第66回日米学生会議は「人生を変える経験。」などと形容する他の参加者たちのように華々しいものではない。そもそもこれに応募したのも、全くの偶然であった。運よく選考には通ったものの、実際に参加するかどうかは最後まで悩んだ。ECからの後押しもあって参加を決断したが、当初懸念していたことがそのまま発生する結果となった。

私には「Why JASC now?」という問いの答えが未だにわからない。大学生活を通して国際化と異文化理解に力を入れてきた自分にとって、今更相互理解を旨とするプログラムに参加することの意義が分からなかった。また、分科会のテーマは自分の専門分野ではないし、そもそも自身の最大の関心は日米関係よりももっと別のところにあった。更に、4回生のこの時期に進路も決まっていない不安定な状況だったというタイミングも微妙であり、気持ちが集中できない結果になった。

もちろん良い点もあった。上位校の若き精鋭たちに会えたことである。そもそも京都での生活に絶望し、救いを求めて応募したのがJASCであったから、東京での春合宿での彼らとの初対面は衝撃的であり、大いに刺激を受けた。しかし、本会議での約1カ月間の共同生活を通して、彼らは頭の回転は速いが、人として何か特別なのではなく、自分と同じ普通の人間なのだということに気が付いた。言い方を変えれば、JASCは私にとって社会的地位の高い人たちとの相互理解の場になったといえる。

ある者はまるで「新隊員教育」のようだと揶揄したように、過密な日程の中、あまりにも多くの行事があるのはJASCの特徴である。私はせっかくの機会なのですべてに対して好奇心を持って取り組んでいたが、すべてに心踊らされたわけではなかった。このように、むやみやたらに選択肢を示してくれたことによって、自分の興味の有無や向き不向きに気づけたことから、JASCは逆説的に自分をあるべき道へと導いてくれたのだといえる。

最後に、JASCは80年の歴史を持ち、これ

までに社会に多くの傑出した人材を輩出してきた偉大な組織である。今年も大多数の参加者がJASCを通して大きく成長を遂げたことから、その教育機関としての効果は驚くべきものがある。ただし、いかなるものにも相性の良し悪しがあり、問題はむしろ私個人の方にあった。つまるところ、今年このタイミングで私が参加したことはベストな選択ではなかったといえる。もっと適切なタイミングで参加できていたら、私にとってのJASCも、私が周りに与えられた影響も、もっとプラスなものだったと思う。然れども、総じて、JASCは私に人生の糧となる多くの手掛かりを与えてくれた。特に、人生に希望の光を与えてくれて、絶望の淵から救出してくれたことには大変感謝している。ありがとう。

古村　大和

期待に胸を膨らませながら渡米し、屈辱的な思いで帰国した。その酸いも甘いも、全てを含めた冒険記こそが第66回日米学生会議である。私にとって今夏の経験は挫折である。嘗て味わったことのないほどの苦痛と困難。その壁を乗り越えられなかった結果が今もなお無残に散らかっている。信頼や自信を失い得たものは何か、熟考したい。

実行委員として迎えた本会議は、一参加者として臨んだ昨年とは大きく異なった。比べ物にならないほど、与えられた職務のそれぞれに計り知れない責任が伴った。参加者として体験を消費するのではなく、実行委員として質の高い時間を供給することが求められた。私はその重圧に押しつぶされた。耐え切れなかった。素直に申し上げるならば、本会議の途中で私は諦めた。第65回日米学生会議の終幕から一年間かけて描き上げた理想を放棄したのである。背伸びをし続けていた身体は悲鳴を上げていたのだろう。感情は失せ、情熱は冷め、他者を疎み、自己を嫌った。応急措置として目指していた高みから目を背け、自分の出来ることに専念した。私は逃げたのだ。

このような対応策が正解だったとは微塵も思わない。逃げたという事実を美化したりはしない。情けない過去を受け入れ、今後の成長の糧としたい。裏切った人々に再び信用されるような人間になるべく、この報告書を通過点として利用させていただく。あの日眼前に突きつけられた己の無力さと限界を心に刻み、革命児としての歩みを再開する。

近藤　直佑

私にとっての第66回日米学生会議は、自分のコンフォートゾーンから抜け出し、さまざまな経験を通じて、多くの気づき、学びを得ることができた密度の大変濃い三週間半でした。日米学生会議を通じてで無ければ、これほどまで自分の本当の能力や人間性など、自分自身について深く考え、反省し、一人の人間として成長することはできなかったと確信しております。能力的にはまずアメリカ側参加者の「自分の頭で考えて人前で発言していく力」に圧倒されました。議論を通じて、話者の主張を理解し、的確に質問を投げかけたり、反論していく「自分の頭で考えて人前で発言していく力」は明らかに自分に欠如していました。発言しないと議論に何も貢献できず存在意義を失うという経験は当初精神的に

つらい時もありましたが、今となってはこの経験のお陰で日々の生活、勉学に対する姿勢を改めるきっかけとなったので貴重な経験であったと自負しています。また会議を通じて、お互い母国語が英語と日本語で異なる両参加者が、言語による誤解を無くそうと、真剣に耳を傾けお互いを理解しようとする姿勢は、グローバリゼーションが進む現代で最も必要とされる能力であると確信しました。これはたとえ日本側参加者が自分が伝えたいことを日本語のように伝えられなくても、お互いの「理解しようとする姿勢」ひとつで、努力次第で必ず伝わるという自信につながりました。このほかにもここには書ききれないほどの多くの貴重な経験をすることができました。このすばらしい会議に参加する機会を頂けたことに感謝し、これからも努力していきたいと思います。

澤　隼

「アメリカにとって日本はどのくらい戦略的に重要なのだろう。日米関係とは何なのだろう」。この問いは、高校時代にアメリカに交換留学した時から抱いていた問いである。私が、アメリカに留学していたときに、当時の鳩山政権の普天間基地退去や対等な日米関係の提示など日米関係は変化しようとしていた。また、日本のＧＤＰが中国に抜かされて二位となったことみ、日本の国際社会での地位の低下に追い風を加えた。

「世界で最も重要な二国間関係」。故マンスフィールド駐日大使の言葉である。しかし、残念なことに昨今の日本は、国際社会でのプレゼンスが低下している。現在、私はアメリカに留学しているが、現地の新聞やニュースで日本のことはあまり取り上げられていない。今年の大統領の一般教書演説でも日本のことは触れられていなかった。私は国際関係論を勉強しており、米国の外交政策やアジア地域の安全保障を米国の学生と議論する機会が多いが、多くの学生が日本について興味や関心が低いことが顕著である。本稿で、日米関係と学生が果たす役割について考えたい。

まず、学生が果たす役割について。日米学生会議という言葉を聴いて、様々なイメージが思い浮かぶだろう。意識の高い学生の集まりやエリートの卵が社会問題について意見を交換する場。「学生ができることなんか限られている」と冷ややかな目線を投げる大人もいることも事実だ。しかし、学生が日米関係において果たす役割はあると断言できる。日本とアメリカは大きな違いがある。違いをあげれば限りがない程である。違いがあるからこそ、日本人とアメリカ人は対話や議論を通して、相互理解を促進することが重要である。正解がないこたえだからこそ、とことんと議論してお互いが納得する妥協案をみつける必要がある。幸いにも、学生は社会的な責任を負う必要が皆無である。学生だからこそ胸襟を開いた議論ができるのでないだろうか。また、も本会議は、日米関係のキーマンとなる人物を多く輩出している。将来、私たちの中からも日米関係を良好とする人物が輩出されることを期待している。日米学生会議が今後の日米関係の一助になることを願うばかりである。

鈴木　健司

「自分の色とは何か。」私自身日米学生会議を通して一貫して考えてきたことだ。参加者として参加した第 65 回会議。非常に個性的な参加者が集まる中で、私は自身の特徴の無さを感じていた。自身の特色、自分にしかない色を探し続け、試行錯誤した。そして、第 66 回日米学生会議実行委員という新たな立場で、再び自分の色を探していくこととなった。

実行委員となり様々な面から自分の役割ということを考えることとなった。会議を準備する上での自分の果たすべき役割、参加者に対して果たす役割、分科会コーディネーターとしての役割と考えさせられる機会が多々あった。そんな時に自分を助けてくれたのは、1 年間多くの時間を共に過ごした実行委員、事前活動から本会議と懸命に活動した参加者たちであった。自身の考えや悩みを伝えれば、正面から受け答え、思ったことがあれば率直に伝えてくれる。そんな皆とのやり取りの中で、私は少しずつ自分がどういう人間かを教えられた。時には、皆の雰囲気にも影響されて涙するといった自分でも気づかなかった自身の一面に触れることもあった。そうして次第に自身を知り、役割を考え、僅かながらも行動することができるようになっていったように思う。

実行委員としての活動の中では、会議運営という面で参加者の時とは異なる経験もしてきた。しかし、率直な対話が可能な関係性というのは、立場を問わずして日米学生会議の色であるのだと、2 回の会議に参加した今改めて実感している。結果的に現時点で自分の色を断言することはできない。しかし、この会議を通して周りから自分を教えてもらうことで、自身の色を見つける大きなきっかけを掴めたと感じている。最後に、一緒に活動してくれた第 66 回会議の全ての人々、そして関わっていただいた全ての方々に感謝したい。このメンバーで会議を経験できたことを本当に幸せに思う。日米学生会議での経験を胸に、また一歩ずつ歩んでいきたい。

鈴木　良祐

JASC は実践的な教育機関であると言われている。それは何故か。人は外部から強い衝撃を受けたときに成長することができる。人生の目標となる人と出会えたとき、本当にやりたいことを見つけたとき、自分より優れた人々と出会い劣等感を感じたとき。JASC にはその全ての機会が揃っている。「劣等感を感じる」それが個人的な JASC での目標であった。居心地の良い環境を脱し、洗練された人々に触れ自分の至らなさを痛感する。その点において JASC は最高の環境である。幼稚な英語ではアカデミックな議論は乗り切れぬことを知り、知識や思考力においても遥かに優れた人々がいることを知った。その一方で JASC での経験は自らの特性を知る上で役立った。他の 71 人と比べ自分はどんな人間であるかを再認識したのである。誰とでも分け隔てなく接することができ、人の良さを見つけることができる。この点は誇れる特性であると感じた。

アメリカ側参加者との違いを発見できたことも大きな成果である。JASC に参加する以前、自分を日本人らしいと思うことは皆無であった。しかし彼らと 1 ヶ月間毎日議論を重ね、自分の日本人らしさに気づく。分科会におい

て結果に重きを置く彼らに対し、プロセスを重視する私。彼らは合理的かつ迅速に結論を出そうとするが、私は時間をかけても一人一人の意見に耳を傾けた。私は彼らの態度を冷たく感じ、彼らは私の態度をもどかしく感じたという。その中でも互いに理解しようと務めた。違いがあっても、それを乗り越え生涯の友情を結ぶことができると学んだ。

今の気持ちを一言で表すと「消化不良」である。4ヶ月間で起こったことがあまりに多すぎて、それが何であったのかうまく説明をすることができない。今後の人生で自らにとってのJASCとは何だったのかを消化していきたい。国やフィールドは異なれども、ここで出会った仲間と、生涯切磋琢磨できることが楽しみである。

関口　響

僕の日米学生会議は終った。もう二度と、あの非日常的で濃密な時間を過ごすことはない。もう二度と、大好きな友人たちと笑い合える夏は帰ってこない。日米学生会議は、心に色鮮やかな思い出を残して過ぎ去っていった。

実行委員として臨んだ今年の会議では、運営準備の段階から本会議終了まで、自身の未熟さに悩まされることが多かった。個々の軸を持つ学生が多いJASCでは、いやでも他者と自身が対比され、自分という存在が浮き彫りになる。「組織における自分の役割は何か」「自分には何が足りないのか」そんな疑問に頭を悩ませることを通じて、等身大の自分が見えていった。

会議が終って「実行委員」としての肩書もなくなり、ついに「個」になった今、これからの生き方が大切になっていく。会議で学んだことを思い出として消費するのではなく、省察し続け、今後の行動に繋げていき、社会へ貢献していく義務があると考えている。

そして、実行委員会の皆には心よりの感謝を述べたい。未熟な自分でもやってこられたのは皆の支えがあったからで、一緒でなければ一年間を頑張りぬくことは出来なかったと思う。心から、ありがとう。

僕の日米学生会議は終わったが、日米学生会議はこれからも続いていく。きっとこれからも、まだ見ぬ誰かに新しい知見と熱い友情をもたらし、相互理解の大切さを気付かせ、成長を与えてくれるのだろう。

竹内　瑞希

「選択の良し悪しは選択後の努力によって決定する」

この言葉、どんな偉人による名言だったろうか。JASCに参加する前の私は、たとえやりたいことがいくつ重なっていようと、責任ある立場に立っていようと、挑戦すること、見つけたチャンスは逃さないこと、チャンスを掴むために努力することはいいことだと思っていた。しかし、JASCへの挑戦を選んだことで、20年に満たない私の人生でおよそ初めてと思える「取捨選択する」ことに直面し、ときに掴んだチャンスを捨てることの重要性を意識した。

事前準備の段階ではJASCへの参加よりも、その他の活動との両立が最重要課題であった。そのため、本会議中に後悔しないよう出来る準備を精一杯したし、JASCを言い訳にしたくなかったからJASC以外の活動もJASCの選考

前よりも必死になった。その結果、体調を崩し、多くの人々に迷惑をかけてしまった。さらに、出来る限り準備したと思っていた事前準備についても、本会議中にその不十分さを何度も思い知り、もっと英語の勉強ができたかもしれない、日本だけでなくもっとアメリカの移民政策も詳しく調べておけばよかった、などと反省することは多くあった。

本会議中は、選択の連続であった。疲労も重なり健康管理も難しくなる中、この人と話したい、もっと分科会のこの議題について話したい、という「やりたいこと」は日々溢れてくる。しかし、同時に、その日その日のスケジュールで最大限に物事を吸収できるように集中力を保つ必要もある。そこで、私は、日記の横にやりたいことリスト、気付いたことリストを作り、今したいこと、今するべきことを目に見える形で管理し優先順位をつけることにした。このリスト、一日に4つ達成するのが限界であったため、本当にやりたいことを「選ぶ」代わりに他の項目は翌日に回したり諦めたりする、つまり「捨てる」ことになってしまう。しかし、整理したことにより、その日やると決めたことに集中して取り組むことが出来たため、一つ一つの項目で納得のいく結果が得られた。

結局、一度にたくさんの人と話せない私は70人すべてのメンバーと満足するまで十分に話せたわけではないし、リストアップしたことすべてを達成できたわけではない。それでも、毎晩マインドセットして翌日に臨めたことは、詰め込み過ぎて体調を大きく崩したりパンクしてやりたいことを忘れたりするよりもずっといいことだったと感じた。選んだことをいい選択にするためには、そのことに関して最大限のパフォーマンスをするためには、他のことは潔く捨てる勇気も必要なのだと学んだ。

JASCを終えた今、私はたとえJASCの最中でなくても毎日が選択の連続と言えることに気付いた。そして、自分のする選択一つ一つにJASCでの選択の経験と、素晴らしいメンバーたちや講演をしてくださった方々の言葉が大きく影響していることを実感した。一方で、今、私はJASCに参加したことで私が「捨てた」ものの大きさも再確認している。それでも私は、自分の人生の方向性を模索する大学2年生の4か月間をJASCに賭けたことは人生最良の選択であったと信じている。これからも本会議中と同じように日々やりたいこと、やるべきことを明確にして努力を続け、十数年後に胸をはってJASCこそ私のLife-changing Experienceだったといえるようにしたい。

竹中　智

私は第６６回日米学生会議に参加したことによって、「将来」において世界を変革するというビジョンを明確にすると同時に、その達成のための「現在」の自分の立ち位置を、身を以て知る事ができた。

まず私は将来、世界を変革するJASCerの一人になると深く決意する事ができた。日本側の代表団に選出されて以来、80年前全く同年代の志高き若者が、悪化していた日米関係の変革を目指して海を渡ったというこの会議の原点に、深い尊敬と感謝の念を覚えていた。今回の会議でも、行く先々で今までの先輩方が歩んで来られた歴史の重みをひしひしと感

じた。その中でも特に印象深かったのは、サンフランシスコでのアラムナイとのひとときだ。私は、エンターテイメントのビジネスモデル革命という夢を率直にアルムナイに語った。すると、一人の草創期のアルムナイから渾身の激励を頂く事ができた上に、自らの体験を踏まえて、世界を変革するためのキーを教えてくださった。それは、「夢を持ち続ける事、高い志を決して捨てない事」だった。このように日米学生会議は、その1回目から今日に至るまで、本気で世界を変えたいという志高き一人ひとりのJASCerによって形作られてきたのだと考える。私もその誇りある一員として、将来エンターテイメントの分野で世界を変革したいと決意する事ができた。

またその達成のために、自らの現在の実力不足を思い知る事ができた。アメリカ側の参加者と議論する際に常に求められた事は、私にしか持ち得ない意見を、勇気を持って主張する事だ。これに関して、渡米前から頭では分かっていたつもりだが、いざ本番となるとほぼ全くできず悔しい思いをした。世界の優秀な同年代と比較すると、全ての面で今の自分はまだまだであるということを心に刻めたことが何よりの財産である。これから私は、「足は大地につけて目は希望の未来に向かって」との言葉があるように、まずはJASCの100周年を決勝点として、自らの夢の実現に向けて全力で挑戦していく決意だ。

辻村　志帆

「早く日本に帰って充電したい。」これが日米学生会議の終盤、私が自分自身に対して感じていたことだった。レベルの高い仲間の中で、自分が持っているものすべてをアウトプットして過ごした時間、それがJASCである。JASCは私に、自身の未熟さと今後の課題を教えてくれた。アメリカに行く前に私が考えていたことはこうだ。私たちはインターネットの登場を主としたIT革命の直後を生き、その恩恵を受けている。しかしこの後にもう一度革命を起こすことは不可能ではないか。このような消極的な考えを持って会議に臨んだ私は、仲間たちが自分と同じように様々な悩みを抱えていること、しかしそこで自分にできることを考え努力していることを知り、大変な刺激を受けた。会議を経て、気づいたことがある。希望がないように見える世界であっても、それでも、JASCで出会った人たちのように世界を変えようとしている人はたくさんいること、誰かが今もどんな小さな変化だったとしても世界を変え続けていること、そして一人で世界を変えている人などいないということ。ちょうど帰国してすぐに、ビジネスで成功された先輩方のお話を聞く機会があった。そこで彼らが共通して言った言葉が、「仲間を巻き込め」である。別に共同作業じゃなくていい、ただ自分が何かをするときに仲間を巻き込んでやるだけで成功率が上がる。その話を聞いたときに私は、最高の仲間を得たJASC、自分の未熟さを教えてくれたJASC、最高の仲間を巻き込んで行動すれば何かを変えられるかもしれないと教えてくれたJASCへの感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

最後になりましたが、この場を借りて第66回日米学生会議に多大なご支援をいただきました皆様に貴重な経験をさせていただいたこと、心よりお礼申し上げます。

永澤　拓也

日米学生会議、外面から見れば36人の日本学生と36人の米国学生が集まって何やら話し合いをする、ただそれだけのように聞こえてもおかしくないだろう、実際自分もそのように思っていた一人ではある。しかし、今会議を終え日本での生活に戻り、自分が得たもの、感じたもの、何より刺激を受けた質量は期待していたよりずっと大きかったように感じている。何となく、そこには見た目以上の何か強い可能性のようなものがあふれ出ていた。会議中はとかく忙しく、英語に苦労したのは間違いないが、ただそれよりも多様な人間に出会い、価値観や考え方に触れることで自らの考えが広がっていることを毎日感じていた、今思えばそれが一番の収穫だったような気がする。新しい環境に飛び込むたびに思うのは、一番重要なのは人間同士のつながりである、ということだが、今回もそれを再認識させてもらった、しかも非常に強烈に。私個人の話をすれば、現在大学4年ということもあり、今後修士に進む上でアドバンテージを得られたように思う。英語力が上がった云々よりも、米国で学ぶ学生に出会って、米国の教育というものにわずかながらも触れることができたし、コネクションもできた。ただカッコいいという存在でしかなかった米国というものを客観的に見えるようになったのは、自分にとって修士を考える貴重な材料となったのは間違いない。大学4年といったが、その点においては、大学1，2，3年生、特に日本側参加者の大学生のパワーに刺激をもらったのも印象的である。これまで後輩と接する機会があまりなかったというのもあるが、自分がその年の時にはこんなこと出来ないだろうな、ということをどんどんやってのけている学生がたくさんいて、心の底から尊敬しているし、将来楽しみだし、同時に自分も頑張ろうと思う、今後とも会議を通して得た仲間と切磋琢磨していきたい。改めて、会議に参加できたことを誇りに思う。

野間　雄大

振り返ると、私の日米学生会議との出会いはちょうど一年前、第65回の東京でのレセプションに縁あって米国大使館から招待されたことだ。当時初めて日米学生会議の名を聞き、どのようなものかは知らず、自分が応募したいかもわからなかった。だがそこで出会った昨年の米国側実行委員長に強く勧められ応募を決意した。試験では個人面接で後悔が残り、不安でいっぱいだったが、幸運にも合格を果たし、正義と道徳分科会に所属することとなった。事前活動では、正義と道徳という非常に抽象的なトピックに悩み、自身の英語力が不足していたことに気づき、本会議に向けた課題を見つけ、成長に取り組む時間となった。本会議が始まると、アメリカ側参加者たちに出会い、彼らの日本人とは違うそれぞれの考えに印象をうけ、会議から離れたカジュアルな話にも花が咲き、一か月間彼らと様々な経験をすることにとても胸が躍った。しかし楽しいことばかりではなく、分科会の議論では英語力の不足から議論についてゆけず、もどかしい時がたくさんあった。第二サイトで言語の壁が大きな問題となり、お互いが正直に本音をぶつけることで、分科会の議論の質が上がりおのずとゴールも見えるようになって

きた。ニューヨークではファイナルフォーラムへの焦りから見えてきた課題もあり、多くのメンバーが体調を崩しがちになったが、全員で夜も遅くまで話し合うことで、より分科会のメンバー間でチームワークが生まれ、お互いのことをよく知るようになったと思う。ファイナルフォーラムでは皆一丸となり取り組み、「Ideal Moral Education」を提案する形で正義と道徳分科会を締めくくった。楽しいことばかりではなかったが、アイオワでは農業や環境問題、カリフォルニアでは移民・LGBT・テクノロジー、ニューヨークでは経済・キャリア構築、DCでは日米関係という普段自分の大学生活ではない学びの機会を持つことができ、また、これから一生続いていくであろう友情関係を皆と築くことができたことは、何よりも「life-changing」であったと感じる。

原田　有理子

JASCが終わった現在、押し寄せる喪失感と共に、全てが非日常で、とても濃く、風のように過ぎ去っていったというのが正直な感想である。しかし確固として違う自分になった私がいて、この経験を出来た事にとても感謝している。九州という地で、歯学という分野を学んでいる私は、就職活動もなく、歯科医師になるという以外の夢を持たず、敷かれたレールに従って進むという事に強い違和感を覚えていた。また国際的に活躍したいと発信すればする程、周囲から浮いてしまうという現実がただただ嫌でしょうがなかった。しかしJASCは、一人一人が熱い将来の夢を持っており、それを惜しみなく語れる。アメリカ人参加者との出会いは勿論の事、日本人参加者との出会いも、私の世界観を変える物となった。

JASCで得た事の一つに如何に日本社会が、日本国民が「違い」に対して寛容でないかを実感した。LGBTQ、外国人労働者、特別永住者、宗教などを含め他人と異なる所を見つけてはそれを認めない現実が日本にはある。そしてそれは地方に行けば行く程濃く根付いているように思う。従って私は声を高らかにして叫びたい。より多くの日本全国の学生に同じような経験をして欲しい。JASCに参加して欲しい。その経験が日本をみる視点を変え、相手との少しの違いを受け入れられる社会を作る事に貢献すると信じている。相手の違いを受け入れなければ立ち行かない、即ち、日本は「日本人」だけでは機能しない時代に突入しているのだ。

JASCが存在する限り日本は、世界は良い方向へ進むという確信を持っている。出会った全てのJASCerが進む先で自らの力を発揮し、イノベーションを起こす人材になるであろう。私もJASC参加で得たLife Changing Experienceを誇るのではなく、JASCが誇る人材になるために日々研鑽を積んでいきたい。関わって下さった全ての方々に心から感謝しています。

東影　喜子

先日、準備期間中にお世話になった国際俳句会の句会に参加させていただきました。そこで元ジャスカーの老紳士にお会いし、参加当時のお話を伺いながら、日米学生会議が長い人生の中で素晴らしい思い出として残っていく事に感動いたしました。

日米学生会議に参加する以前、私は日本

文化に関心があったものの、日本を外から見つめるということをしてきませんでした。特に俳句には思い入れがありましたが、句会や句座を離れ、批判の中に飛び込まなければ本当の意味での良さは見えてこないのではないかと考えるようになりました。こうした思いが、私を日米学生会議へと駆り立てました。しかし準備期間が始まると、改めて自分と周囲の英語力の差を感じ、日増しに不安は増えていきました。けれど仲間との出会いが私を救ってくれました。会議中に開催した俳句レクチャーでは、アメデリがとても楽しみながら俳句を作ってくれ、素晴らしい作品が生まれました。また日本の詩に興味があると話すと「ＨＡＩＫＵのこと？」と目を輝かせてくださったアラムナイもいらっしゃいました。日本の外にも素晴らしい理解者がいることを知り、分科会のテーマでもある芸術の力に新たな可能性を感じました。そして何より、日米学生会議が様々な尺度を持ち、私にもチャンスを与えてくださったことに感謝します。特に日本代表団の支えのおかげで、この夏以前よりも広い視野を持ち成長することのできた自分がいます。この経験を素晴らしい思い出に留めず、今後の人生に生かしていきたいと思います。

藤井　一衆

自分のしてきたことを振り返り、多くの人々と会い、多くの話を聞き、多くのことを自分も発信していく機会があった。そんな中で自分が最も難しいと感じたことは「交渉力」の重要性だ。いかに相手の話を聞き入れ(インプット)し、自分の意見をそこへ出す(アウトプット)かの線引き、妥協点を見つけられるかは大変難しい。例えば分科会でも一方的に話すか、話を聞くだけでは自分や相手が満足させることはできないだろう。どちらにせよ協力が得られなければ最終的な目的であるファイナルフォーラムも中途半端になってしまうだろう。自己満足ではなく、いかに相手を満足させながら自分も満足させられるかの交渉こそが面白みであり、白熱した議論をするために必要な要素だと今は思う。時として交渉は難航し、議論する中で衝突を生むことだって無いわけではない。そこで学んだことはどれだけ人種的、文化的背景が多様であることを認識し、相手について学ぶことが大切であり、議論を展開する上で必要なのかである。日米学生会議では「相互理解」を一種のスローガンとし、重要視してはいるが、それを実践することは以外と難しい。相手に自分を理解させれば良い訳ではなく、自分も相手を知ろうとしない成立しないためである。本会議参加者の皆がそれぞれ学びたい分野や知りたいことに違いがあるのも当然のことだろう。しかし、自分の興味外にあるものを学ぶ姿勢こそが日米学生会議で求められているものである。本当の意味で世界を知り、自分の知らないことを得るための貴重な機会であることを返ってきて思い知ることになった。本会議を通して行なわれた数々の議論や会った人々との意見交換により拡大された視野で自分の未来を拓くことができると確信している。

松居　純平

日米学生会議を通じて得たものとは何か。過去参加者に聞くと、皆口を揃えて、”Life changing experience” である、という。では、

なぜ、この伝統が80年も続き、未だにそう語り継がれているのか。それは、言葉遊びでもなんでもなく、本当に人の人生を変えてしまう魔法があるからだろう。私自身もそうだった。日米学生会議参加前には、大学卒業後はすぐに海外の大学院に進学し、国際法と人権のプロになろうと志していた。しかし、同時にプロジェクトリーディングにも興味があった私は、このように多様な環境で育ってきた仲間たちと議論し合い、一つのものを作っていく過程が本当に好きだった。そして、会議が終わり、いざふたを開けてみると、私は来年度の実行委員長に選ばれていた。渡米前は大学院一本と決めていたため、私にとっては人生が変わった瞬間だった。今では大学卒業を少し延ばして就職活動しようと考えている。まず社会に出て、チームで物事を動かす醍醐味や、社会の厳しさに触れ、その後に大学院に進み、国際的に活動していきたいと考えるようになった。そもそも私が日米学生会議に応募した理由の一つは、「日米の学生で、学生が出しうる最高の移民政策を両国に提言する」ことに挑戦することであった。しかし、この目標は達成しきれなかった。そのため、私はこの挑戦を、今卒業論文でリベンジしようと考えている。悔しさの残る第66回日米学生会議でもあったが、学びはそれだけ大きかった。ここでの経験を第一歩目と考え、最高の第67回日米学生会議を創っていきたい。

松井　友紀

私が日米学生会議に参加したのは、まだ経験が浅く、医学部でこの先、他分野の方と関わる機会が少ないと感じ、議論をする中で視野を広げたいと思ったからである。私が日米学生会議で最も心に残っているのは、そこで交わされた多くの学生、専門家、アラムナイのお話や意見である。これを通じ、私が学んだことを3つ記したいと思う。

私は今まで、答えのないものに関して深く考えたことがあまりなかった。しかし、日米学生会議を通じて、様々な社会問題を日米で議論しながら考えていくうちに、ほとんどの問題には答えがなく、多様な意見が存在し、広く、密接に様々なことが絡んでいる中で正解などないことがわかった。そんな中でも、決断し、障害があったとしても実行しなくてはいけない時がたくさんあるということを学んだ。

2つ目に参加者の方はそれぞれ目標が明確で、将来何をやりたいのか、またその理由、なぜ自分なのか、そしてそれが社会になぜ必要とされているのかを深く考えていて、とても刺激になった。私は医師になるという漠然とした目標しかない。他の方々のお話を聞いて、自分でもどのように社会と関わっていくのかを見出したい。そこで3つ目の点につながる。

3つ目は、人との出会いがどれほど大きく自分の人生に影響を与えるかということだ。そして、そのチャンスが巡ってきた時にきちんと逃さないようにしなくてはいけないということだ。様々な分野で活躍されている方のお話をお伺いした中で思ったことである。人と出会い、話すことによって自分を見出し、自分を客観視し、自分では気がつかなかった新たな扉をあけることができるのだと思った。人との出会いを大切にしたいと強く思った。

最後に特に印象に残った日米学生会議中にある方から教えていただいた言葉を紹介したいと思う。

Life is 10 percent what you make it, and 90 percent how you take it.

光本　愛理

JASCの目的の1つは「相互理解」であると言われている。これは、JASCの創設目的から考えても、多くのOBOGのお話を伺っても、そして私の経験上も、間違いのないことだと感じる。しかし、個人的にはこの言葉があまり好きではない。重要なことだが、非常に抽象的な言葉で、時にはその場しのぎの問題解決のためにも使用する言葉だからである。そこでこの感想文では、自分なりにこの言葉の意味を具体化していくこととしたい。

この会議に参加する以前、私はアメリカの学生の考えを理解する事でこそ、相互理解を実行することができるのだと考えていた。そのためには英語力を向上させ、相手の言っていることをできるだけ分かるようにすることが重要だと思っていた。また、共同生活を通じて、自分の文化との違いを感じ、それを受け入れることが大切だと考えていた。

しかし、実際に1カ月を振り返ってみると、自分自身と向き合う時間の方が、はるかに長かったように感じる。私のいいところは何か、日本代表の中での役割とは、私の意見は何か、私は将来何をしたいのか、と自分について明らかにしようと何度も考えた。つまり、相手を理解するためには、その前に自分自身のことをしっかり理解しなければならないということだと思う。もちろん、それを明確にするためには、他人の存在が必要なのだと思うが、自分について理解してからこそ、他人との違いが見つけられるのだと思う。

これから、更にグローバル化が進み、自分とは育ち、活動してきた環境が異なる人と会う機会が増えるだろう。その人たちと「相互理解」をしていくためには、相手について知る努力と同時に、実は自分をしっかりと持ち、自分について伝えていく力も必要なのだと、今回アメリカの学生と向き合うことで気付いた。これからも自分について問い続け、様々な人の1人1人としっかり向き合い、「相互理解」という大きな目標を実現していく架け橋になりたい。

村井　咲絵

「日米学生会議はどうだったか」と周囲の人から聞かれる度に、私の脳裏をよぎるのは、いつも決して楽しい思い出ではなく、辛い苦しい思い出である。その思い出が「私の日米学生会議」を物語っている。誰かとの衝突よりも、自分自身との衝突だった。自分の感じたこと、　思ったことを的確に言語化できない葛藤、迷った時に勇気の要る方へ踏み出せなかった後悔、いつも感じるのは自分の劣等さと弱さばかりだった。

毎日毎日そんな自分と直面し、元々無い自信をどんどん失っていくうちに、日米学生会議を初めて知った時の希望や、参加したいと思ったあの時の熱意、合格通知を手にした時のあの感涙、そんな初志をすっかり忘れてしまっていた。「なぜ私はこの会議に参加できたのか」「“自分”ができることは何なのか」、事あるごとに自分の存在意義を問い、そしていつも

答えは出なかった。そんな本会議だった。

しかしその辛苦の中にも楽しさはあった。毎晩夜遅くまでメンバーと喋ったり、他愛もないことで笑ったり、そういう何気ないことが私にとってはすごく幸せだった。時に相談し合って涙を共にしたり、また時にお互いに愚痴をこぼしたり、会話の中で醜さを垣間見る事もあったが、それも含めて全て「人間らしさ」だった。そこに日本人、アメリカ人、という境界線はなかった。

実行委員が見つけてくれた私という種は、この夏、芽を出すことにとどまった。それでも67回実行委員になった。ひと夏だけでは終わらせられなかった。自分が66回の実行委員に助けてもらったように、自分も自分と同じような立場になった参加者の心の拠り所になれたらと、それが"私"のできることであり使命のように感じた。実行委員になりたいと思った時のあの意識、選挙に当選した時のあの嬉しさ、落選してもなおあたたかい拍手で見守ってくれた他の候補者たちの表情を、私は絶対に忘れてはならない。そして今年感じたこと全てを糧に、次の夏こそはきっと花を咲かせるだろう。

森　鞠乃

文化や考え方の違いから衝突が起こってしまうことは、特別不思議なことではない。しかし、文化や個々の考え方の違いは相手を信頼し知りたいと思う気持ちと、自分に素直になって自分を知ってもらいたいという相互の理解がなければ、「違い」はただの偏見や一方的な差別になってしまう。このことを特に気づかせてくれたのは私が所属した「芸術とアイデンティティ」分科会であったと思う。

まず、私達の分科会は、茶道などの日本の伝統文化から俳句、アニメ、アメリカのヒップホップ文化まで8人のメンバーの興味・関心は多様であったがゆえに、議論を一つの方向に進めていくことが難しく、時に硬直化を招くこともあった。お互いの意見の「衝突」から「理解」に変わり、「尊重」し合う方向へと少しずつ歩んでいくことができた私達にとって、今後の人生において困難な状況に直面した時に必ずこの経験が自分を強く成長させるものではないかと考える。

また、分科会活動を通じて芸術的価値は時に人々の絆を深めたり、平和構築に貢献したり、表現することでメッセージを届けたり、多様な社会的役割を果たしていることに気付き、芸術のもつ可能性について今後も考えていきたいと感じた。

最後に、アラムナイの方々からご自身が参加した経験をお聞きして、いかにJASCが多くの方の"Life Changing Experience"となっているかを知ることができた。設立から80周年という節目を迎えた年に参加できたことで、日米の平和を祈念するために、理念と伝統が受け継がれながらJASCが今も存在し続けていることに歴史の重みを感じた。第66回の参加者としてJASCの理念を引き継いだことはその長い歴史の中に新たに加わったのだと身の引き締まる思いである。と同時に、自分が学び得たことをまた次の参加者に経験してほしいという願いを込めて、これからも将来の日米関係深化のためにも様々な出会いと相互理解を生み出す会議であってほしいと強く感じた。

モンタニョミチェル　ルイス

日米学生会議に参加した動機というのは「アメリカを見てみたい」という単純なものだった。ここは「日米の架け橋」になりたいと大きな話をすべきだろうが、日米学生会議というのは、大きな理念を掲げている一方、本当のところはこのような小さな思いが物事を動かしているように思う。アメリカを自分の目で見てみたい、という気持ちさえあれば誰しも応募できるのである。後の選考試験はどうとでもなるのだ。

本会議が終わってから二週間が経つが、未だに今回の本会議を消化しきれていないというのが本当のところである。本会議の日程表を読み返しながら自分たちが成し遂げたことの大きさを自覚すると同時に、事前の準備を徹底していればもっと楽しめていたのにと多少後悔もしている。しかしながらこれまでの半年間を思い返してみて、あの時点ではあれが精一杯だったなと、今回の本会議ではありのままの自分の姿で勝負できたように思う。

自分にとっての本会議のテーマを挙げるとすれば、それは「語学力」であった。英語の能力のことではなく、広く語学に堪能な事がいかに大事かを思い知らされた。英語ができなくとも外国人と対話する方法は確かにある。言葉を介さない会話の仕方を駆使しながら、そして時として日本語の出来るアメリカ側の学生たちの助けを借りながら、なんとか自分の意見を皆に伝えることができたものの、より単純に自分の口から直接意見できていれば簡単だったのにと思うことがたくさんあった。自分の主張を端的に伝える言葉、それもそれぞれの状況に最も適した言葉を使いこなせていればアメリカでの日々も一層楽しめただろう。

この一夏を経て私は「語学力を鍛える」という今後の明確な目標と動機を得ることが出来た。「伝わりさえすれば良い」などという些か面白みのない意見に甘んじる事なく、正確な言葉を使いこなす事の面白さを追求したいと思う。結局のところ言葉がなければ、自分たちの世界を築く事も、広げる事もできやしないのだと、すなわち知識こそが人との交流を豊かなものにしてくれる事を肝に銘じながらこれからの人生を歩んでいきたい。日米学生会議は自分の生き方を確かに変えてくれたのである。

矢島　ショーン

JASCは私にとって発見と刺激に満ちた会議であった。３週間以上に渡り、アメリカの各都市を周り、その文化を体験し、同年代のアメリカの学生と生活を共にしたことで、従来の今まで持っていたアメリカやそこに住む人々対するイメージが覆され、同時に今後の人生に対する刺激を受けた。

最も想像と違っていたのは、アメリカに住む人々、とりわけ学生の多様性である。今まで、アメリカといえば私の中では白人社会であった。しかし、我々が訪れた場所がアメリカでもとりわけ多様性に富んだ地域であったのかもしれないが、実際は様々な民族的背景、価値観を持つ人々が暮らしていた。自らをアメリカ人と見なす人、アメリカに帰属意識を持たない人といったように、それぞれが独自のアイデンティティーを持ち、同じ社会で暮らしている。こうした社会は、西洋人と

の混血であり、日本社会において生まれてから常に否応なしに目立ってきた私にとって衝撃的であり、同時にとても心地よいものであった。

アメリカの学生とのディスカッションを通して感じたのは、特定分野に対する専門性と思考の柔軟性を兼ね備えることの大切さである。ディスカッションではまず議題に対して自分の専門に基づき、他のメンバーとは違った知識や視点を提示することが求められる。それが、自分がグループにおいて確実に果たすことが出来る役割である。一方で他の人の意見を理解し、自らのものと組み合わせ、その上に新しい考えを構築していく柔軟性も求められる。これこそが複数の人が集まって、議論することの意義である。今後の大学生活において、この専門性・柔軟性の両方を獲得し、様々な場面で役割を果たし必要とされる人物になれるよう努力して行きたい。

楽しいことも苦労もたくさんあったが、素晴らしい仲間に囲まれ、最高に密で、実り多い1ヶ月間であった。心の底から、この会議に参加して良かったと感じる。

第 7 章

第 67 回会議概要

第 67 回日米学生会議概要

-Coming Together to Confront Our Past, Present, and Future-
過去と向き合い未来を拓く～衝突と多様性から生まれる新たな相違理解～

日米学生会議は、その誕生から 80 年の歳月を経た 2014 年の日米共同声明に初めて、日米交流において当会議が「不可欠なものである」と明記された。日米関係も今や歴史上最も成熟した二国間関係と言われ、会議が創設された当時の両国関係とは隔世の感がある。しかし、本当に日米学生会議の掲げる世界平和構築の理念は達成されたと言えるのだろうか。

こうした中、第 67 回日米学生会議は「過去と向き合い未来を拓く～衝突と多様性から生まれる新たな相違理解～」というテーマのもと開催される。そこでは多様な個性と異文化が交錯し、個々人の多様な価値観や思考様式の違いにより、摩擦や衝突が繰り返されるだろう。参加者はこの「衝突と多様性」の渦に巻き込まれ、自分とは違う個性や多様性の中から互いの相違点を認識し、相互に相違があることを理解する。この「相違理解」があってこそ、初めて相互理解が可能となり、その礎となるのである。

また、戦後 70 周年の節目となる 2015 年に開催する会議では、学生会議創設の理念である世界平和の構築が実現できたのか「過去と向き合い」検証したい。世界平和とは何か、世界平和構築のために日米両国はどのような役割を果たし、学生には一体何ができるのかを考察し、「未来を拓く」のである。そして分科会討論や政府、企業訪問、専門家との対話、広島の平和フォーラム、島根の地方創生フォーラム、会議終盤に開催されるファイナルフォーラムで会議成果を社会に発信していく。日米学生会議は、参加者一人一人がこの壮大な問いに対して、自分なりの答えを見つけ出す絶好の場なのである。

【主催】
一般財団法人国際教育振興会
【企画・運営】
第 67 回日米学生会議実行委員会
【会議開催期間】
2015 年 8 月 3 日～2015 年 8 月 23 日
【事業実施期間】
2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日
【開催地】
広島、島根、京都、東京

■本会議における主な活動

分科会（Round Table, RT）

本会議の活動の中心となる分科会は 7 つ設けられており、日米各 5 名の学生が 1 つの分科会を構成し議論を重ねることとなる。事前活動においても、分科会は本会議中だけでなく参加者が共同生活するための「チーム」としても機能している。

(1) Security and Non-Traditional Threats
　現代の安全保障
(2) Power and Responsibility in the Business World
　企業の社会的責任とリーダーシップ
(3) Religion as a Means, Religion as Meaning
　宗教の意義とその役割
(4) Society and Inequality
　格差と社会
(5) Media in the 21st Century
　21 世紀におけるメディア
(6) Educational Approaches Today and Tomorrow
　今日の教育と未来への取り組み
(7) Global Eco-hazard and Resource Sustainability
　エコハザードと資源の持続可能性

Field Trip

分科会の議題や開催地についての理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO や研究所などへ訪問研修を実施する。議論の対象となっている現場や現状を知ることができる貴重な機会であり、議論に必要な多様かつ具体的視点を得るために重要な活動となる。

Forum

各開催地でサイトテーマや日米両国に深く関わるトピックについて一般公開のフォーラムを開催し、第一線で活躍する専門家、有識者の講演や現地学生を交えたパネルディスカッションを行い、その地域特有の事情や新たな視点も得て参加者は開催地についての理解と関心を深め新たな問題意識や課題解決に向けて参画意識を涵養する

Special Topic Discussion

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、議論をすること目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見能力や議題設定能力を養うばかりではなく、参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

Final Forum

最終開催地におけるファイナルフォーラムでは、3 週間の総括を行う。現代社会が抱えるさまざまな問題と提起した 7 つの分科会における議論の概容と活動内容を発表することにより、第 67 回日米学生会議の成果として社会に発信する。

Reflection

参加者が一同に集い、3 週間の共同生活や、価値観や思考様式の違いから生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことで、参加者間の相互理解一助となることを期待している。また、他者の思いを理解することにより会議の充実や運営の円滑化など会議の成功に向けて努力する姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

第8章

ご協力いただいた方々

第66回日米学生会議にご協力頂いた方々（敬称略・順不同）

【主催者および後援団体協力者】

一般財団法人国際教育振興会

理事長　大井　孝

参与　稲田　脩

事務局　後藤　明子

国際教育振興会賛助会

名誉会長　高円宮妃殿下

会長　南原　晃

事務局長　伊部　正信

事務局　川島　裕子

International Student Conference, Inc

理事長 Kristy Holch

事務局長　Yuuki Shinomiya

事務局　Chelsea Irvin

外務省

国際文化交流審議官　斎木　尚子

国際文化交流審議官　新美　潤

人物交流室長　浦林　紳二

人物交流室　課長補佐　三浦　恵子

文部科学省

国際統括官　加藤　重治

大臣官房　国際課総務　係長　原　文絵

大臣官房　国際課　丸田　俊徳

米国大使館

米国大使館首席公使　Kurt Tong

広報・文化交流部　教育・人物交流室

シニアプログラムスペシャリスト

落合　安代

ユース・アウトリーチ・コーディネーター

三橋　乃佑里

一般社団法人日米協会

会長　藤崎　一郎

専務理事　渡辺　隆

日米文化センター

日本代表　伊部　正信

【広報活動】

武田 興欣　青山学院大学国際政治経済部　准教授

敦賀　和外　大阪大学グローバルコラボレーションセンター　特任准教授

寺迫　正廣　大阪府立大学人間社会学部教授

栗林　知美　大阪府立大学国際交流課

森　純一　京都大学国際交流推進機構長 国際企画連携部門長　教授

深原　優子　京都大学国際部留学生課 森純一教授研究室　秘書

立原　公美子　筑波大学国際企画課 塚本聖筑波大学グローバル・コモンズ機構グローバル・コモンズ支援室

関根　広太　東海大学国際部国際課

田中　文恵　同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・アメリカ研究所事務室　事務長

勇元　信彦	同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・アメリカ研究所事務室　係長
箕浦裕満子	名古屋大学国際学生交流課学生交流掛　掛長
塩井　洋介	名古屋大学国際学生交流課学生交流掛
田中　秀実	法政大学グローバル教育センター事務部　グローバルラーニング課
菊地端夫	国際教育センター副センター長 経営学部公共経営学科 准教授
杉浦絵里	国際連携部国際教育事務室
丸山　加奈子	立命館大学国際教育センター国際部 海外留学課
大島英穂	立命館大学 国際部 事務部長
逢坂　豪	早稲田大学総長室　経営企画課
板垣　有二	株式会社 企業実務アシスト GM
前田 史子	株式会社 企業実務アシスト
村山 和美	株式会社 企業実務アシスト

【選考活動】

今井　義典	立命館大学客員教授
小野　元	京都大学大学院修士過程
金谷　憲	東京学芸大学　名誉教授
関口　和一	日本経済新聞　論説委員
竹本 秀人	国際ウェールズ環境総研代表
田邊　和子	日本女子大学教授
丹羽　秀夫	公認会計士
山田　勝	日米学生会議 同窓会副会長
勇元　信彦	同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・アメリカ研究所事務室 係長

【防衛大学校研修】

國分良成（防衛大学校学校長）、加藤健（防衛大学校准教授）、大井昌靖（二等海佐）、

吉田　千絵	防衛大学校　総務部総務課
真中　萌	防衛大学校　113小隊

【秋田研修】

橋口 昌道	秋田県 副知事
進藤 隆男	秋田県庁 学術振興課
淡路 孝也	藤里町議会議員
淡路 和春	藤里町役場
佐々木 吉昭	藤里町役場
菊池 孝子	藤里町社会福祉協議会
袴田 俊英	月宗寺 住職
新川 泰道	宝昌寺 住職
浅利 幸明	藤里町
淡路 昭芳	
石岡 千代志	
菊池 昇一	
細田 茂廣	
斎藤 栄作美	世界遺産センター藤館 白神山地アドバイザー
菊池 整	エスポワール

淡路 敬子	恵体験工房
伊藤 晴樹	ARC グループ代表
市川 博也	国際教養大学 教授
勝又 美智雄	国際教養大学 教授
熊谷 ひかり	国際教養大学　学生
John Arnold	国際教養大学 学生

【日米学生会議同窓会協力者 】

秋間修　荒木尊士　伊井佐織　飯島千咲
五十嵐淳　市川比呂也　市毛裕史　伊藤孝真
井上敏之　井上聡美　今井義典　小田垣彩花
上江洲仁美　烏賀陽正弘　梅崎渉
遠藤繁　大高巽　大野峻典　岡本実
小沢良明　小野元　大日方望　Kurt Tong
川口真　川野さりあ　岸田守　木ノ上高章
木村光太郎　Katherine Jordan　久保勲
Kelly Cargos　五所恵美子　児玉克哉
小松崎涼子　櫻井千浪　Sharon Lu　白畑春来
神馬光滋　杉岡昌太　鈴木悠司　須藤俊男
関口和一　高田修太　武田興欣　竹本秀人
田中豪　辻喜久子　手島敬　冨川秀二
中澤耕己　中山智夫　西田尚弘　西元宏治
野口ゆかり　野地洋平　橋本徹　橋本遥
橋本萌　廣野允威　Patrick Meuer　福谷尚久
藤田耕　Vu Hoang Minh　松尾恵輔　松本秀也
Madison Mears　丸本美加　三科圭介
茂木健一郎　森田修弘　守屋彰人　森泰子
八木澤龍大　安川皓一郎　山下祐里奈
山田勝　山本東生　渡部寛史

【事前活動協力者】

大山　利男	立教大学准教授
遠藤　広樹	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校副校長
大貫　優子	東海大学病院神経内科医師
和泉　俊一郎	東海大学病院産婦人科医師
森本　敏	拓殖大学特任教授 前防衛大臣
細谷　雄一	慶應義塾大学教授
田中　均	株式会社日本総合研究所 国際戦略研究所　理事長
新井田　理恵	国家公務員
早川　秀樹	多文化まちづくり工房代表
今里　譲	文部科学省 大臣官房国際課長
石井寅男	浮世絵保存協会副理事
関　裕行	日本芸術文化振興会　理事
原　秀樹	国際交流基金 企画部　事業戦略課長
佐藤　幸治	国際交流基金 総務部　総務課　課長代理
篠原　由香里	国際交流基金 文化事業部 主任　米州チーム
小野　元	国際交流基金 日米センター
熊倉　純子	東京藝術大学教授
福島　安紀子	東京財団
松原　大輔	立教大学 現代心理学部映像身体学科 4年次

中村　寛	多摩美術大学准教授	森　佳子
木下達夫	日本 GE 株式会社人事部長	市川　比呂也
大島　葉子	日本 GE 株式会社	小松崎　きよ江
	アジア・パシフィック エグ	窪田　良
	ゼクティブ・カウンセル	高林　浩司
	弁護士	
	ニューヨーク州弁護士	
竹内　智洋	日本 GE 株式会社	
	フィナンシャル・マネジメ	
	ント・プログラム	
忽那 武範	公益財団法人 稲盛財団	
	理事・事務局長	

【ユースフォーラム・ジャパン】

愛知　和男

古澤　明子

小林　斐子

河原田　有一

木ノ上　髙章

山本　東生

渡部　恒雄　東京財団上席研究員

Dr.Paul McCarthy　駿河台大学名誉教授

Kurt Tong　米国大使館首席公使

【賛助者】

橋本　徹

大塚　雄三

大高　巽

山本　修巳

山崎　繭加

第８章　ご協力頂いた方々

【賛助団体・企業、賛助者】

一般社団法人　日米協会

大阪日米協会

京都日米協会

秋田日米協会

公益財団法人三菱 UFJ 国際財団

公益財団法人双日国際交流財団

公益財団法人平和中島財団

アサヒグループホールディングス株式会社

伊藤忠商事株式会社

株式会社オリエンタルランド

オリックス株式会社

キッコーマン株式会社

キヤノン株式会社

ＪＸホールディングス株式会社

新日鐵住金株式会社

株式会社セブン＆アイ・ホールディングス

禅林寺

デルタ航空会社

株式会社電通

東京海上日動火災保険株式会社

東京ガス株式会社

トヨタ自動車株式会社

中辻産業株式会社

株式会社ニコン

日産自動車株式会社

株式会社日本政策投資銀行

日本生命保険相互会社

日本電信電話株式会社

野村ホールディングス株式会社

パナソニック株式会社

株式会社日立製作所

富士ゼロックス株式会社

富士通株式会社

ベイビュー･アセット･マネジメント株式会社

丸紅株式会社

株式会社みずほ銀行

株式会社三井住友銀行

三井物産株式会社

三井不動産株式会社

三菱地所株式会社

三菱重工業株式会社

三菱商事株式会社

株式会社三菱東京 UFJ 銀行

三菱 UFJ リース株式会社

メリックス株式会社

住友商事株式会社

日本郵船株式会社

ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス

東燃ゼネラル石油株式会社

協和発酵キリン株式会社

楽天株式会社

オタフクソース株式会社

ANA ホールディングス株式会社

ソフトバンク株式会社

マイナー財団

※役職・団体の名称等は当時のものです。

賛助団体ロゴマーク

ACUCELA
in it for sight

ANA

DBJ
日本政策投資銀行

DELTA

dentsu

FUJITSU

FUJI xerox

kikkoman

kinko's
On Demand Solutions

Marubeni

MINER
FOUNDATION

MITSUI&CO.

MIZUHO

NISSAN MOTOR CORPORATION

SMBC
三井住友銀行

SoftBank

TOYOTA

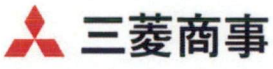
Unilever

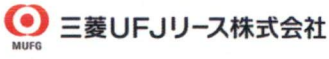
東燃ゼネラルグループ

NISSAY

日本郵船

三菱地所


三菱商事


三菱UFJリース株式会社

楽天

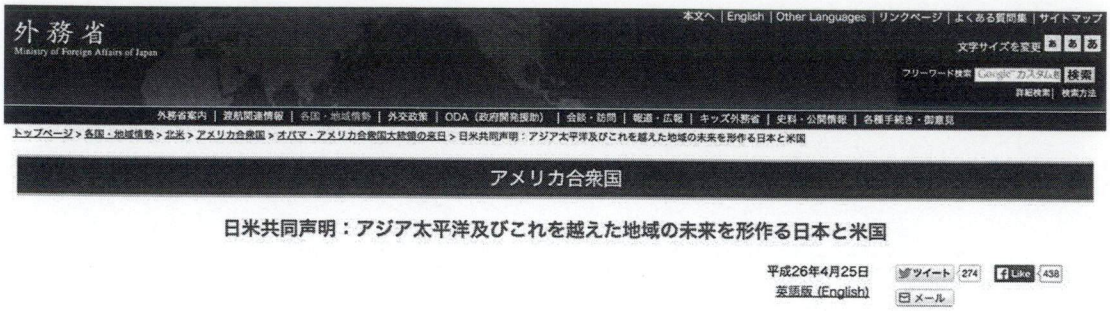
協和発酵キリン様から頂いた商品と共に

オタフクソース様より頂いた商品をアメリカで

第9章
パブリシティ

パブリシティ一覧（2014年〜15年）

『日米共同声明』外務省（2014年4月25日）



外務省
Ministry of Foreign Affairs of Japan

本文へ | English | Other Languages | リンクページ | よくある質問集 | サイトマップ
文字サイズを変更 あ あ あ
フリーワード検索 Google™ カスタム検索 検索
詳細検索 | 検索方法
外務省案内 | 渡航関連情報 | 各国・地域情勢 | 外交政策 | ODA（政府開発援助） | 会談・訪問 | 報道・広報 | キッズ外務省 | 史料・公開情報 | 各種手続き・御意見
トップページ > 各国・地域情勢 > 北米 > アメリカ合衆国 > オバマ・アメリカ合衆国大統領の来日 > 日米共同声明：アジア太平洋及びこれを越えた地域の未来を形作る日本と米国

アメリカ合衆国

日米共同声明：アジア太平洋及びこれを越えた地域の未来を形作る日本と米国

平成26年4月25日
英語版（English）
ツイート 274　Like 438
メール

のである。これらのプログラムは何年にもわたって二国間の人的つながりを拡大し，強化してきた。

これら政府のプログラムは，日米協会，米日カウンシル，400以上の姉妹都市関係など両国国民をつな
いる。そのようなプログラムは，多数の学術機関，大学間のつながり，皇太子明仁親王奨学金，日米交流
今年80周年を迎える日米学生会議のような民間資金による交流と同様に，不可欠なものである。日米両国
て拡大された非政府対話を更に奨励する。

両国を結び付ける草の根の友好関係を象徴するものとして，米国政府及び広範な民間部門のパートナー

『交遊抄　日米学生会議　今井義典』日経新聞（2014年11月12日）

交遊抄

日米学生会議

今井　義典

日米友好の絆を学生が担う日米学生会議が今年80周年を迎えた。満州事変で悪化した日米関係を若者の手で修復しようと1934年に米国に渡り、現地の学生に呼びかけたのが始まりである。

太平洋戦争などで2度中断したが、64年に復活。私が参加したのはベトナム戦争真っ直中の65年だった。戦争の是非などを巡り、口角泡を飛ばしながら米国人学生と初めて英語で議論した充実感は、今も忘れられない。

米通商代表部（USTR）で日本担当を務めたグレン・S・フクシマさんも米側の参加者だ。NHKの記者時代、日米通商交渉で親しくなったがある日、奇縁の人に会わせると食事に誘われた。

そこでお会いしたのが現在、日本政策投資銀行社長の橋本徹さんだ。全国銀行協会の会長時代に海外向け番組の英語インタビューをお願いしたりしていたが、まさか日米学生会議の大先輩とは思いもよらなかった。

橋本さんは日米学生会議は人生に大きな影響を与えたとして「ライフ・チェンジング・エクスペリエンス」と呼ぶ。私も同感である。日米関係の担い手がこの会議から何人も巣立った。

15日に80周年の記念式典が開かれる。同窓会長を務める橋本さんのもとで私が実行委員長となったのも何かのご縁といえよう。（いまい・よしのり＝元NHK副会長）

『主張　日米学生交流の原点　住友商事グローバルリサーチ社長　高井裕之』

日刊工業新聞（2014年10月27日）

（第3種郵便物認可）　日刊

Person

「会って話す」80年続く友好

日米学生交流の原点

住友商事グローバルリサーチ社長　高井 裕之

主張

歴史ある日米学生会議が今年で80周年を迎え、11月15日に東京で記念式典が開かれる。会議のOB・OGをはじめ今まで日米関係構築に尽力された両国の要人が集まる。式典に併せて行うシンポジウムでは、日米協会の藤崎一郎会長による基調講演のほか、私を含めた日米の会議OB・OGで日米交流の意義に関するパネルディスカッションを行う。

多士済々の顔ぶれ

日米会議は学生による日米交流の中では最も歴史が古く、第二次世界大戦前の当時、満州事変で悪化しつつあった日米関係を憂慮した学生有志によって創設された。太平洋戦争による中断を経て戦後に再開し、通算80年続いている。会議の運営はすべて両国の学生の実行委員によって行われ、日米で選考された約80人の学生が約1カ月間合宿してさまざまなテーマでの議論を行いながら各地を回る。会議は毎年夏に日米交互に開かれ、来年の第67回会議は日本で予定されている。

同会議は数々の人材も輩出している。宮沢喜一元首相やキッシンジャー元米国国務長官、若手では在日米国大使館で首席公使を努めたカート・トン氏ら、日米両国の各方面で活躍するOB・OGが多数おられる。このコラムの読者にも先輩や後輩がおられるのではないだろうか。

会議創設時は「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米の平和にある。その一翼を学生も担うべきだ」という理念の下、4人の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪れて参加者を募り、総勢99人の米国代表団を伴って帰国。青山学院大学で最初の会議が開かれた。使節団は会議後に中国東北部に渡り現地視察もしている。まさに政府に頼らない学生主導の草の根外交のはしりと言えよう。

ネット社会にこそ

あれから80年、太平洋戦争や日米貿易摩擦などを乗り越え、政治・経済両面で日米関係は強固な同盟関係へと発展した。その間、さまざまな階層で日米間の交流が行われたが、やはり両国関係を底辺で支えてきたのは民間の地道な交流であり、利害関係のない学生同士の自由闊達な議論を通じた友人関係が日米関係の裾野を形成してきたと言っても過言ではない。

世界中がインターネットでつながり、英語が堪能な日本人や日本語が堪能な米国人が増える中、日米両国間の学生が毎年集まって会議を行ってどれほどの意味があるのかという議論もある。しかしながら、ネット社会だからこそ実際に人間同士が会って話す場の重要性が高まっている。ネットは〝炎上〟すれば修復不能だ。しかし実際に会って話せば大抵は分かり合える。80周年を迎えた日米学生会議だが、財政状況は決して楽ではないと聞く。ぜひこの息の長い国際交流に賛同いただける方にはご支援をお願いしたい。

（東京都中央区晴海1の8の11）

たかい・ひろゆき　80年（昭55）神戸大経営卒、同年住友商事入社。08年理事金融事業本部長、11年理事エネルギー本部長、13年住友商事総合研究所（現住友商事グローバルリサーチ）社長。大阪府出身、56歳。

『Though Leaders POLITICAL ISSUES　by Glen S. Fukushima』Forbes Japan（2015年1月）

THOUGHT LEADERS 02 POLITICAL ISSUES by GLEN S. FUKUSHIMA

Developing Future Global Leaders
将来のグローバル・リーダーを育てる

GLEN S. FUKUSHIMA
グレン・S・フクシマ

米国先端政策研究所（CAP）の上級研究員。米国通商代表部の日本・中国担当代表補代理、エアバス・ジャパンの社長、在日米国商工会議所会頭等を経て現職。米日カウンシルや日米協会の理事を務めるなど、日米関係に精通。

2014年11月15日、日米学生会議の設立80周年を記念して、祝賀会が開かれた。日米間で学生の運営する交流プログラムとしては最も歴史のある会議である。祝賀会には、高円宮妃殿下をはじめ、両国政府高官、数多くの同窓生が、この卓越した会議の歴史と遺産を讃えるために出席した。本会議は、1934年に、当時悪化する両国政府の関係を危惧した学生たちが、日米間の理解と友情を深めようと理想に燃えて設立したものである。残念ながら、実際には、この7年後に日米は宣戦布告し、戦争に突入することとなった。

日米学生会議は、数多くの著名な同窓生を輩出している。アメリカからは、ヘンリー・キッシンジャー元国務長官が、ハーバード大学の学生であった1951年に参加。日本の同窓生の中には、故宮澤喜一元首相が、東京帝国大学の学生時代、1939年と1940年に参加している。

1992年1月8日、東京でのジョージ・H・W・ブッシュ大統領歓迎の晩餐会で、宮澤喜一元首相は、1939年に南カリフォルニア大学で開催された日米学生会議に出席し、その際2つ「手に入れた」ものがあると言っている。第一は、アメリカの民主主義についての理解。アメリカの学生が自国のアジア政策を平気で批判するという自由で開放的な空気は宮澤元首相に強い印象を与えた。第二に「手に入れた」ものは、となりに「座っている妻」。ロサンジェルスに向かう船の中で津田塾大学の学生と出会い、東京大学を卒業し、大蔵省入省後に結婚したとの話だった。日米学生会議では同様に結婚したカップルが多く、「日米結婚会議」と呼ばれていた時期もあったほどだった。

筆者自身も、宮澤氏同様に、スタンフォード大学の学生のときに、1970年のスタンフォードでの会議に出席し、そこで出会った女性と、1971年の東京での会議も一緒に出席し、1972年の秋に結婚した。日米学生会議への出席が、私たち二人の人生に大きな影響を及ぼした。

その後、私はハーバード大学大学院で日米関係について学び、1985年に米国通商代表部に入省したが、その15年も前に日米学生会議で日米交渉の雰囲気を知り、日米両国での長年の友人を得ることができ、幅広い同窓生ネットワークに入ることもできた。日本政策投資銀行社長、元富士銀行頭取で、日本日米学生会議同窓会会長の橋本徹氏も敬愛する同窓生の「先輩」である。

日本が世界に貢献するためには、理想主義、現実主義、グローバルなマインド・セットを兼ね備え、多様な個人やグループと一緒に成果を上げられるリーダーの育成が不可欠である。日米学生会議の4週間にわたる質の高い経験により、大学生はスキルや能力を伸ばすチャンスを得られる。議論や討論のトピックスは、タイムリーかつ重要であり、参加者は多様な背景を持つ学生と切磋琢磨し、相互理解を図る。そして、会議の運営自体が学生に任されていることから、プログラムの成否は学生自身の責任となる。

日米学生会議が重要な役割を果たしてきたことから、バラク・オバマ大統領と安倍晋三首相は、2014年4月25日の日米首脳会談後の共同声明の中で、日米学生会議を「不可欠な」二国間の交流プログラムであると讃えた。

2015年は、第二次世界大戦終結から70周年の節目の年となる。この記念すべき年を祝うために数多くの催しが行われる。そこで大切なのは、1945年以前に、何が起きて何が起こらなかったかを議論することではない。重要なのは、この70年間に日本が国際社会で建設的な役割を果たしてきたことと、今後どんな役割を果たせるかということだ。日本が将来もグローバルな役割を果たすことができるか否かは、大志を抱き、優秀な能力を持つ次世代の日本のリーダーにかかっている。そのためには、日米学生会議をはじめとするグローバルなリーダーシップ養成プログラムを支援することで、現在のリーダーが、今後のリーダーとなる若者を育成することも必要ではなかろうか。

ILLUSTRATION BY BERND SCHIFFERDECKER

左：『月曜論壇　若者の声に耳を澄ます　袴田俊英』（7月28日）

下：『日米学生会議　地域課題、住民と議論』（7月10日）

ともに秋田魁新報

月曜論壇

若者の声に耳を澄ます

袴田俊英

米国で8月に開催される「日米学生会議」の日本代表メンバーのうち24人が今月上旬、藤里町を訪れ、2日間にわたり自主研修した。機渡しをしてくれたのは、これまで町民と交流を続けてきた「ARCグループ」という地域貢献活動を行っている県内の学生団体である。

メンバーは到着後、町内を視察し、夜には大沢地区の公民館でグループ討論を行った。中心テーマは「過疎地域に生きる」。「これからの秋田の農業」「交流人口の拡大」「定住人口の増加促進」「特産品の販路拡大」「少子高齢化社会における安心・安全な町づくり」という五つの小テーマ別に分かれ、地区の住民やARCグループと意見を交わした。

学生たちはわずかな時間の視察の中で感じたことを各小テーマごとにまとめ、貴重な提言を次々と出してきた。環太平洋連携協定（TPP）が妥結すれば、中山間地の農業の継続は難しく、自然と水だけでは地域の魅力としては足りないことなど、町の抱える問題点を共に考えた。さらに、全国から注目されている「ひきこもり対策」を高く評価し、対策を自主的に全国の若者に来てもらったらどうか、といった積極的な意見も出た。

筆者もグループの一つに参加、何よりも討議の素晴らしさに感激した。日本を代表して来国に乗り込む学生だけに論旨は明快で、疑問点には鋭い質問が飛ぶ。主張するだけでなく、他者の意見を聞く態度もいい。「自分は何が分からないのか」ということに真摯に向き合うので、議論が充実していく。彼らは過疎に悩む日本の地方の問題も念頭に、日米の会議の場で発言してくれることだろう。

最近、特に地方の衰退が大きく取り上げられるようになった。本県でも少子高齢化が進み、元気な若者や若いリーダーが少なくなっていると嘆く声を聞くことが多い。しかし、これは若者の問題では済まされないと思う。問題の本質は「大人は若者を育てようとしてきたのか」ということではないのか。

長期にわたる景気低迷や過度の競争を強いるグローバル経済の中で、日本の企業はコストを掛けて若者を育てることができなくなり、「既に育った若者」を必要とした。教育界も経済界の要請を受け、キャリア教育に重点を置くようになった。

教育の中身が、知らないことを知るという知的作業でなく、企業の求める人材を養成するためのものに変質してしまったと言えば、言い過ぎになるだろうか。そして、若者たちは企業のある都会へと向かい、地方に残る若者はどんどん減っていく。

以前この欄で紹介したが、昨年行われた「地域力フォーラムinあきた」では、秋田の若者の活力に驚かされた。発表者として登場した8人の若者の秋田を愛する情熱と前向きな姿勢に、聞いていたこちらが力をもらった。今年も8月9日に再びこのフォーラムが開かれると知り、迷わず実行委員会に加わった。委員の年齢層は20代から70代までと幅広く、職種もさまざまでまさに多士済々。共通しているのは若者の話を聴こうという態度である。

元気な若者は秋田にもたくさんいる。その声を聴く耳を大人たちが失っているのではいか。若者を応援しようとする大人の姿勢と行動こそ、今の秋田に必要だと思う。

（僧侶、藤里町住）

2014・7・28

米議会日学生

地域課題、住民と議論

日本代表団が藤里訪問

8月に米国で開かれる「第66回日米学生会議」に参加する県内外の大学生ら約20人が5日までの2日間、藤里町を訪れ、地域住民と交流を図った。地方の魅力を体感するとともに地域が抱える課題を探り、日本の将来を考える機会にしようと、同会議日本代表団が自主研修の一環で企画した。

初日は大沢地区の大沢会館で、交流人口拡大のための方策などについて住民と意見交換した。

県内外の大学生らが地域課題について住民と意見を交わした日米学生会議の自主研修

学生からは「世界自然遺産の屋久島は人気アニメ映画の舞台として知られ、観光地として成功している。白神山地も独自の魅力やストーリー性を打ち出せないか」「藤里町の引きこもり支援事業は他の自治体にはない強み。引きこもりの人の社会復帰に特化したまちづくりを目指してはどうか」などの意見が出た。

慶応大学法学部2年の岡崎栞さん(19)は「雇用の場がないなど課題もあるが、藤里町は会う人みんなが話し掛けてくれる、いい意味でお節介な町。人の温かさがうれしかった」と話した。

参加した大沢婦人会の淡路高江会長(64)は「町で生まれ育った自分たちにはない若い人たちの発想は新鮮。地域課題の解決に向け、参考にしたい」と述べた。

日米学生会議は1934年に発足した学生交流団体。8月の会議には日米それぞれ36人の計72人の学生

第66回日米学生会議　日本側報告書

発行日	2015年2月
編集者	大西　由起　　大沼　雄貴 兼子　莉李那　　木村　優吾 小松崎　遥平　　古村　大和 鈴木　健司　　関口　響
発行	日米学生会議報告書編集委員会 〒160-0004 一般財団法人国際教育振興会内 日米学生会議事務局
印刷	キンコーズ・ジャパン株式会社

Japan-America Student Conference
Since 1934

主　　催：一般財団法人国際教育振興会

企画・運営：第 66 回日米学生会議実行委員会